

# 幽鬼の怪物

NIRIN0202

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黒い霧のようなものに覆われた、暗く、光の届かない場所。

現世に限りなく近く、されど決して手の届かない場所。

其処に、手足や胴体を突き刺され、磔にされた者がいた。

かの者は助けを求めている。楔を解き、ここから連れ出してくれる存在を。

しかし、その声を聞く者は無く、手を差し伸べる者も居ない。

救いなど、ありはしなかった。

「ありふれた職業で世界最強」の二次創作物になります。

小説自体書くのが初めてな上に勢いで投稿しているので、お見苦しいところが多々あるかと思われませんが、皆様の暇潰しになれば幸いです。本作を読む際、下記の項目にご注意下さい。

- ・原作の出来事の大半を飛ばします。
- ・物語の展開上、主人公との関わりが殆どありません。
- ・作者の独断と偏見により、キャラの性格や各設定に矛盾が生じる場合があります。

・オリ主にはカップリングどころか恋愛要素もありません。百合もありません。

注意事項は今後変更される場合があります。以上を踏まえて御覧下さるよう、宜しくお願い致します。

目次

1.	始動	1
2.	目標	11
3.	契約	17
4.	贈物	31
5.	旅出	40
6.	奢り	49
7.	搜索	56
8.	竜人	66
9.	化物	74
10.	指輪	87
11.	服従	99
12.	報告	111
Her past. 1		116
Her past. 2		127
13.	変化	138
14.	深淵	150
15.	勧誘	164
16.	裏切	178
17.	私の過去	194

## 1. 始動

1.

ずっと同じ声が聞こえる。

誰かに助けを求める叫びが。

此処から連れ出してくれと願う声が。

他人の声など聞いたことが無いのに、何故か聞き覚えがある様な気がする。

その人を助けなければならぬ。それが今ある私の全てだから。

けれども、周りには誰も見当たらず、暗く、冷たい黒い霧が絶え間無く吹いているだけ。

今日もまた、見つけれぬものを探し続けている。

.....

光輝「30階層辺りで事件？」

メルド「ああ、どうもその階層にいないはずの魔物が出てきたそう  
だ。それも数えきれん程のな。」

宿場町【ホルアド】、光輝達勇者一行は、その町の常用している宿で  
メルド団長含めた騎士達と打合せをしていた。

クラスメイトのトラウマとなっていたベヒモスを倒し、前人未到の  
階層を攻略していた頃、【オルクス大迷宮】の上層にて事件が起きた。

陣乗ではない量の魔物が溢れかえり、迷宮を次々に埋め尽くしてい  
るようだ。近くの階層を攻略していた冒険者達はその波に飲み込ま  
れ、多くはないが既に犠牲者も出ている。このままでは魔物が迷宮の  
入口にまで侵攻し、町が滅ぼされ、魑魅魍魎で埋め尽くされるかもし  
れない。

その報告を聞き、【ホルアド】のギルド支部長は緊急の依頼を勇者一  
行に申し出た。金ランクの冒険者が出払っている今、彼らの実力なら  
この事件を解決できると信じて。

雫「魔物の種類や規模は判明しているんですか？」

メルド「辛うじて脱出して来た冒険者によると、どうやら虫型の魔

物が大半のようだな。あとはブルタールや狼型のものが少々といったところか。だが問題は数だな。聞いた限りでも数百単位入るだろう。」

打合せに参加している者達の間には戦慄が走る。当然だ。下手をすれば自分達と同じレベル以上の魔物が相手となるのだ。それも今まで戦って来た規模のものとは比べ物にならない数だ。

香織「そんな数の群体か一体何処から……？」

龍太郎「オイオイ、シャレになんねえぞ……。」

生徒達か動揺する中、勇者か立ち上がり皆を鼓舞する。

光輝「皆、大丈夫だ！ベヒモスを倒して、前人未到の階層を突破した俺達なら誰が相手だろうと負けはしない。力を合わせて、事件を終わらせよう！」

龍太郎「へッ、光輝の言う通りだな。それに雑魚がいくら集まろうがオレ達の敵じゃねえぜ。」

雫「簡単に言うわね……。まあでも、どちらにしろやらなきや大変な事になる。」

香織「そうだね。せめて出来る限り数を減らさないと。その前に魔力回復薬とか、消耗品の補充だね。」

光輝の言葉に、一行は気力を取り戻していく。こんな時でも彼の力リスマは遺憾なく効果を発揮した。

メルド「よし、まずは作戦を練って、物資の用意が整い次第出発するぞ。連中が迷宮の入口に到達するまであまり時間が無い。」

メルドの声に皆が頷く。勇者一行による殲滅作戦が、始まった。

.....

翌日、準備が整った勇者一行は事件のあった階層に進んで行った。メルド達騎士団は万が一、魔物が迷宮から湧き出した時に備えて入口で待機している。

光輝「万象切り裂く光 吹きすさぶ断絶の風 舞い散る百花の如く  
渦巻き 光嵐となりて敵を刻め！ 天翔裂破！」

【オルクス大迷宮】の30階層。普段なら中堅の冒険者達が実力を

伸ばす為、或いは大金を稼ぐ為に駆け回る所に、勇者一行はいた。だが今、その階層は普段のそれとは違う。ブルータル、狼、蟻、蠅、蜘蛛、様々な魔物が勇者一行に襲いかかっていた。

龍太郎「チクシヨウ、全然減りやしねえなこいつら！」

光輝「諦めるな！今の所は俺達で充分相手に出来るレベルの奴らしかいない。前衛！ カウント、十！」

「了解！」

しかし、彼等はその程度の連中に遅れを取ることはない。光輝は高速で聖剣を振り、自分を中心に光の刃を無数に放つ。射線上にいた虫達が、次々に細切れにされ地に伏せていく。

鈴「守護の光は重なりて 意志ある限り蘇る 『天絶』！」

結界師の鈴が後衛組の前にシールドを貼る。突然現れた防壁に対応できず。蟋蟀型の魔物は衝突し、後続の者達に押し潰されていく。

——ギイイイイイイイ！！

鈴「うええ、気持ち悪いよう。」

恵理「泣き言言わないの、鈴。ほら、次が来るよ！」

香織「うう、でもこの光景はちよつとキツイかな……。」

女性陣が向かって来る虫の様子に怯える中、それでもめげずに着々と魔物の数を減らして行く。だが、魔物達もまた次から次へと湧いて出て来ていた。

光輝「後退！後衛、放て！」

「『炎天』」「『』」

号令と共に、前衛組が離れ、後ろから炎系上級攻撃魔法が放たれる。周囲一帯が炎に包まれ、魔物が焼き尽くされていく。勇者達がいる部屋の中の敵は全滅したが、それでも通路の奥から新たな魔物が入り込もうとしている。

鈴「刹那の嵐よ 見えざる盾よ 荒れ狂え 吹き抜ける 渦巻いて 全てを阻め 『爆嵐壁』！」

その前に、入口に攻勢防御魔法による空気の壁の様なものが見える。魔物達は蹴破ろうと武器や魔法を当てていくが、空気の壁はたわむばかりで少しも破れない。

そして入口が虫で埋め尽くされた時、空気の壁が凄絶な衝撃とともに爆発した。集まっていた魔物は一気に後ろに吹き飛び、数を多く減らす。残党が尚も勇者一行に襲いかかろうと動き出す。既に光輝の準備は終わっていた。

光輝「神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ！ 神の息吹よ！ 全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ！ 神の慈悲よ！ この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！—— 神威——！」

真つ直ぐに突き出した聖剣から極光が迸る。放たれた光の刃は地面を削り飛ばしながら突き進む。入口から通路の奥まで駆け抜けて行き、まだ数多く残っていた魔物諸共消し飛ばした。

光輝「はあ、はあ、これで、全部かな……。」

龍太郎「だと良いけどなあ。流星に切りがねえぜ。」

魔力を殆ど使い果たし、光輝は荒くなった呼吸を整えようとする。この階層に到達するまでもにも、多くの魔物達を倒し続けて来た。そのせいで皆疲労が溜まってきていた。次の戦闘が始まる前に休息が必要になるだろう。一行は魔物が侵入してこないように入出口を土壁や瓦礫で埋めて、即席のバリエードを作った後に休息に入った。

雫「でも、こんな大群が一体何処から来たのかしら？」

光輝「分からない。でも奴らはこの入口の奥からどんどん出て来ていた。若しかしたらこの先に、魔物の巣か何かがあるのかもしれない。」

休憩の最中、再びその疑問が持ち上がる。光輝の言う通り大群は必ず迷宮の奥、それも一方向からしか出て来なかった。他にも連絡口や通路があるにも関わらず、だ。

恵理「でも、この方向って……。」

鈴「確か、何かよく分からない魔法陣が描かれた床がある部屋だったよね？ エリリンはあれが何なのか知ってる？」

その質問に、恵理は首を横に振る。後に分かることだが、それは70階層と30階層を繋ぐ転移陣と呼ばれるものだ。未だその階層に到達した者かいない為、その魔法陣は起動すらしておらず、唯の床の

傷と化していた。

雫「どちらにしても、敵の出所らしき物は判明した事だし、一旦宿に戻って休んだ方が良いわね。皆体力も回復薬も殆ど使い切っているし、もうこれ以上の戦闘は厳しいわ。」

光輝「… そうだな、迷宮とは言え魔物も数日で増えたりはしないだろうし、休憩が終わったら宿に戻ろう。」

光輝の言葉に皆賛同し、出発の準備に取り掛かる。

そんな時だった。聞き覚えの無い、不快な声が響き渡ったのは。

？「いやはや素晴らしいではないか、勇者の実力というものはあ。流石は神がもたらした奇跡の使徒達だあ。他の有象無象とは格が違う。」

「!?!」

他人を嘲る様な声が一行に掛けられた。全員が声の主が居る方向に振り返る。だがおかしい。出入口は全て塞いでいた筈だ。人が入って来る余地はない。にも関わらず、その人物はそこに居た。

棺を背負い、黒いローブを羽織った初老の男性、人差し指には奇妙な文字が掘られた、青白く輝く指輪をしている。その肌は浅黒く、耳は片方だけ僅に尖っていた。だが特徴的なのはその顔だろう。眼はひどく澱んでおり、左眼は瞳孔が開ききってあらゆる方向を向いている。顔中は別の人の肉を繋ぎ合わせたかのように、肌の色が違う皮が継ぎ接ぎだらけになっており、針を縫った痕が痛々しくのこっていた。

光輝「お前は…。」

キンドル「はじめまして勇者さま。私はキンドル・ガートン。種族は、言わなくても分かるね？」

香織「魔族…ッ」

キンドル「大正解い。頭の回転が早くとても助かるよお。ご褒美に拍手を送ってあげよう。」

魔族の男は背負っていた棺を地面に降ろし、挑発する様にワザとらしく手を叩く。拍手の音か部屋に響き渡る中、生徒達は我に返り、慌てて各々の武器を取り構える。だが男は両手を挙げ降参する様な



姿勢をとる。

キンドル「おおっと、待て待て。まだ戦いに来たわけじゃあない。少しだけ取引がしたいだけさあ。」

光輝「取引だと？いや、その前に質問に答えろ。何故ここに魔人族が居る!?どうやって入って来た!」

先程までの煽る様な行動に腹を立てたのか、光輝が怒声を上げる。その返答に男は光輝を一瞥した後、溜息を吐き呆れる様に首を振る。その動作が光輝をさらに苛立たせる。

キンドル「まあまあ落ち着きたまえよ勇者さま。そんなに怒鳴らなくとも要求には答えるさ。答えは単純、最初からこの部屋にいたのさあ。君達か来る前からねえ。」

光輝「最初から…？馬鹿な、ここには魔物が大勢いて…!?」  
男の言葉に生徒たちは息をのむ。これが嘘でなければこの男は魔物たちがひしめく中、襲われることもなくまるで友人と待ち合わせでもするかのように部屋の中で待っていたことになる。そして、教皇のイシユタル達信仰者から教わった座学の通りならば、魔人族は魔族を従える力を持っている。この事実が意味することはつまり――

光輝「まさか…。魔物があふれ出た原因は!」

キンドル「ご名答う!全部私の仕業だあ。ここにいた魔物共は全部、私の駒だったんだよお。考えるまでもない簡単な問題だっただろう?」

光輝「ふぎけるな!態々その元凶が俺達の前に出てきて取引だと?犠牲者を出しておきながら、よくもそんなことが言えたな!だがもうお前の用意した魔物は全て倒した。お前に勝ち目はない!大人しく投降しろ!」

光輝は激しく憤り、キンドルに啖呵を切る。その言葉に反応し前衛組は再び武器を構え、後衛組は攻撃魔法の詠唱を始める。

自分の命はすでに相手に握られている。その光景を前にしてもキンドルは尚も勇者達を嘲るような眼を向けつつ、緩慢な動作で姿勢を変える。

キンドル「ハア、人の話を聞かない坊主だねえ、まあいいかあ。ど

うせ帰り道の途中で寄っただけだし。ちなみに、さっきの取引の内容容なんだけどさあ…。」

男は構えも詠唱もせずに、手ぶらで話し続ける。

キンドル『命は助けてやるから、大人しく捕まって私の軍勢の為の実験体になれ』つてところなんだけどお、どうだい？今からでもこの提案に乗り換えないかい？』

それは提案と呼ぶには余りにも過激な内容だった。脅しともとれる横暴な台詞に、勇者達は一瞬呆けた表情をする。だが言葉を理解していくとともに、光輝の目が吊り上がっていき、キンドルを睨みつける。

光輝「いい加減にしろ!!実験体だど!?大事な仲間をそんな酷い目に合わせてたまるか!聞いていた通りお前達魔人族は邪悪な存在だ!ここでお前を倒してこの事件を終わらせてやる!覚悟しろ!」

光輝は聖剣に膨大な魔力をつぎ込み、キンドルに刃先を突き付ける。それでも相手の余裕な態度と表情は変わらない。

キンドル「ふうん。君がそう言うなら仕方がないねえ。じゃあ——」

「くたばれ」

その合図とともに、この部屋で倒した魔物の死体が瞬く間に蘇り、勇者達へ一斉に襲いかかった。

光輝「何!?!」

光輝達は、自分達の手で確実に仕留めて来た敵が、時間を巻き戻すかの様に再生していく光景に目を剥く。否、ただ蘇っているだけでは無い。肉体がより強固なものに変質し、倒す前よりも更に魔力も威圧感も増している。

——「シャアアアア!!」

その内の一体、巨大な百足の魔物が圧倒的な質量をもって、光輝に突っ込んでくる。

「『剛力』!」

永山と坂上が臂力を上げる魔法を使い、猛進する百足を受け止めようとする。しかし障害物など無かったかの様に、立ち塞がった二人まとめて生徒達を吹き飛ばす。

光輝「……………ツつう!!」天翔閃「！」

雫「絶断」!

辛うじて突進を回避した二人は予め詠唱していた魔法を使い、後衛陣が体制を立て直す時間を稼ぐ為に湧き出す魔物を減らそうとする。しかし、四つ目の狼だけは攻撃を全てかわし、死角を突いて前衛組を翻弄してくる。狼に対応している内にも、他の魔物が次々に生徒達を追い詰めていく。

龍太郎「何だってんだコイツら!? さつきより無茶苦茶強えぞ!」

恵理「皆伏せて!」炎浪「！」

全員が押し負ける中、恵理が全方位に向けて炎系攻撃魔法を放つ。魔物達は回避の為に後退するが、すぐさま進撃を開始する。

鈴「守護の光は重なりて 意志ある限り蘇る」天絶「！」

その前に、生徒達全員を覆う様に光の壁が立ち上がる。魔物達が押し当たる。数に物を言わせ、障壁を破ろうとする。

香織「天恵よ 神秘をここに」譲天「！」

他者の魔力を回復させる魔法を使い、「天絶」の効力を底上げする。それでも物量故か、段々と壁にヒビが入っていく。

光輝「神威」

だが、時間は稼いだ。光輝の最大火力の魔法が障壁を抜け、魔物を消し飛ばしながらキンドルに向かっていく。光輝の十八番は障害物突き抜いたにも関わらず威力を落とさずに向かっていく。人一人始末するには十分過ぎる火力だ。

キンドルは少しも動かずに尚も変わらず嘲笑を浮かべる。そして「神威」かキンドルに到達しようとした時――

光り輝く膜の様なものが見れ、「神威」を飲み込み、あらぬ方向から生徒達に向かって「神威」が放たれた。

「うわあああ!」

「きゃあああ!」

光の奔流が味方を次々に薙ぎ払う。圧倒的な火力が生徒達を襲い、何が起きたかも分からぬまま全員が倒れる。勇者達が死なない様に手加減されたのだろうか。全員が気を失う程度の怪我で済んでいる。

恵理「うう……っ。何が、おきて……？」

否、一人だけ何とか動ける者がいた。悪運故か軽傷済み、未だ意識のある状態で済んだ様だ。

——ギチギチギチギチギチギチ

恵理「ひっ!？」

だが、この状況では唯の悲劇でしか無い。大勢の魔物が恵理に視線を向け、獲物を詰る様に追い詰めていく。

恵理「うあ……っ。嫌だ……来ないで……ッ」

恐怖で顔が引きつり、弱々しく後ずさる。しかし直ぐに背中では壁にあたり、逃げ場は無くなる。

——ウウウウウウウウウツ

恵理「嫌だ……、死にたく無い……ッ」

そうだ。こんな所で終われない。彼女の計画はまだ始まったばかりなのだ。自分を助けてくれるはずのヒーローを手に入れる策略は。

キンドル「捉えろ。なあに、お望み通り死にはしないさあ。」

嗜虐的な笑みを浮かべ、実験材料を得るべく、魔物に指示を出す。

恵理「誰か……、誰でもいいから……、助けて……ッ」

怯えながら、ただ一人助けを求める。しかし理不尽な現実、彼女に残酷な牙を突き付ける。

主人の命令に従い、プルトールは恵理に向かってその拳を振り下ろした。

……

……

……

恵理「？」

降りかかるはずの衝撃はいつまで経っても訪れない。恵理は恐る恐る目を開き、前を向く。

……ドサリ

そこには頭や心臓、脊髄など、体の急所に青白く輝くステイレットを打ち込まれ、次々に倒れる魔物達の姿があった。

そして自分の前に、一人の少女が立っている。

恵理「え?.....え?」

「..... 助けを呼んだのは、貴方ですか?」

女性にしては高めの身長、肩口辺りで切り揃えられた色素の抜け切った、セミショートの白い髪、感情を映さない氷の様な黒い瞳、表情の無い冷たい顔立ち、奴隷が着る様なみずぼらしいボロ布を纏った、一人の少女。あまりにも容姿が違うが、その姿には見覚えがあった。昨年までクラスメイトだった、彼女を思い出す。

恵理「..... 白野?」

それは一月程前に行方不明になった。恵理の親友だった、玖珠木白野その人だった。

## 2. 目標

2.

魔物が無数に犇めき合う部屋で、二人の少女が状況を確かめる様に見つめ合う。ふと視線を変えると、いつの間にかキンドルが持っている棺の蓋が開いているのが見えた。どうやら白野と呼ばれた少女はこの中から飛び出して来た様だ。キンドルが訝しげな視線を白野に向ける中、恵理に向かって再び質問が投げられた。

「次はどのように致しますか？」

恵理「……………へ？」

「何をすれば貴方を助けられますか？」

無機質な瞳が真つ直ぐに恵理へと向けられる。理由は分からないが、どうやら恵理を助けるつもりの様だ。

恵理「え、えっと、じゃあ、此処にいる魔物と魔人族を全部倒して。」

「わかりました。」

かなり無茶な要求を言うが、白野は文句を言わずに了承する。そして直ぐそばにあったプルタールが持っていたのであろうメイスを拾い、キンドル達に体を向ける。

キンドル「オカシイねえ。何でお前が今更起き上がるんだい？そもそも、何が出来ると——」

言葉が途中で途切れる。白野の手から投げナイフの様にスティレットが放たれ、彼の頭と残っていた魔物の全てに降り注いだからだ。

一瞬で命を絶たれたキンドルは、あっさり地面に崩れ落ちる。

——ウオオオオオオオオオン！

四つ目狼だけは奇襲を避け、白野に襲いかかる。彼女は攻撃を最小限の動きでかわし、四つ目狼の予測よりも早く、メイスを振り下ろし頭だけを地面のシミに変える。

そしてその勢いのまま、迫ってきたプルタールの足を砕き、地面に倒れた所で上段から振りかぶり、頭を潰す。

「炎浪」

そして背後から迫っていた大量の蜘蛛の魔物に向けて、広範囲の炎魔法を放つ。それは恵理が使った時よりも遥かに強力で、炎の色が蒼くなっていた。魔物達は一瞬で灰に変えられる。

——「シャアアアア!!」

大百足が突進してくるが、縮地の様な素早い動きで容易く避ける。しかし大百足の進行方向には未だ気を失っている光輝達がいる。

恵理「まずい!?!お願い、光輝君を助けて!」

「わかりました」

白野に助けを求め、光輝を救出させようとする。この指示には打算も含まれている。光輝と恵理だけ助けさせて、他を見捨てれば必然的に彼は唯一人生き残った自分を見てくれるだろう。そうでなくとも、恵理にとつての邪魔者は殆ど処分出来る。

恵理がほくそ笑む中白野はその要望通りに救い出した。……隣にいた遠藤を。

恵理「は?」

光輝は無事に大百足に跳ね飛ばされ、華麗なトリプルアクセルを決める。イケメンフェイスと白い目が実に映える。

恵理「え、待つて、違うから!?!そいつじゃなくて今跳ね飛ばされた茶髪の人だから!?!その人を助けて!」

「わかりました。」

遠藤を恵理の近くに降ろす。今度は蟻の魔物が光輝に迫る中、彼女は跳ね飛ばされていた茶髪の檜山を助ける。

大量の蟻が砂糖と言う名の光輝に集る。

恵理「顔覚えてないの!?!分かった!指示を出した僕が悪かった!だから全員助けて!!」

「わかりました」

このままでは光輝が虫に啄ばまれる。考え直した恵理は生徒達全員を救出する方向に変える。序でに白野の「わかりました」は信用できなくなる。

指示を受けた白野はステイレットを生徒達に投げる。一瞬トドメを刺すのかと思つたが、それが当たると同時に生徒がその場から消え

て、恵理の周りに現れる。どうやらあの短剣は、武器として使えるだけでは無い様だ。

「天絶」

全員を一箇所に集めた後、白野は詠唱もしていないのに魔法を行使する。光の障壁が生徒達を覆う様に展開される。白野が使えない筈の魔法を使う事に驚く中、当の本人は続けて魔物にメイスを振り、時に鎧通しを投げつつ数を減らしていく。途中、使っていたメイスが壊れたが、白野はすぐに他の武器を拾い、魔物を屠っていく。敵は彼女に傷一つ付けられないまま、数を減らしていった。

.....

そして然程時間が経たない内に、部屋にいた魔物は再び全滅した。白野は半ばから折れ使い物にならなくなった斧を投げ捨てると、生徒達を守っていた“天絶”を解いて恵理に近づく。

恵理「.....」

しかし、恵理は白野に向かって疑惑の視線を向ける。別に不満がある訳では無い。余りにも記憶に合わないからだ。行方不明になる前の白野の戦い方と、今繰り広げられていた戦い方が。

恵理（白野は剣や斧とか、他の近接戦闘用の武器も苦手だった筈。だからクロスボウを使っていた。魔法も適性はあつたけど、戦闘中の詠唱が出来なかったから使いもしなかった。なのに.....）

白野は武器を振るい、原理は分からないが詠唱もしていないのに魔法を使い続けた。しかも適性の無い魔法さえも。最早別人の域だ。

「怪我はありませんか？」

恵理「！」

白野の言葉に我に帰る。考え事をしている場合では無かった。何はともあれ、事件は解決した。早く皆の怪我の治療を済ませ、地上に戻らなければならぬ。

恵理「..... 私は大丈夫。他の人の治療をするから手伝って。」

「わかりました。“絶象”」

恵理「え、何それ.....っ!？」



白野が手をかざし、恵理の知らない魔法を使うと、生徒達は光に包まれ、傷が治っていく。いや、外傷だけでは無い。ボロボロになった服も、壊された武器や鎧さえも、瞬く間に修繕されていく。

光輝「……………うう……………ここは？」

香織「何が起きて……………？」

そうこうしている内に、生徒達が次々に目を覚ましていく。そして、既に立ち上がっていた二人に目を向け、驚愕する。

恵理「光輝君！皆！大丈夫!？」

光輝「恵理？無事だったのか!？」

雫「あれ？でも、隣の人は、誰なの？」

鈴「嘘でしょ……………？もしかして、ハクノンなの？」

香織「白野つて、もしかして白野ちゃん!?!?どうしてこんな所に!?!?皆探してたんだよ!?!」

全員が突然の再会に驚き、白野に向けて次々に質問を投げつける。しかし白野は不思議そうに首を傾げた後、逆に質問をした。

「白野とは誰のことですか?」

鈴「え?」

その言葉に理解が追い付かず、全員が静まり返る。余りの衝撃に言葉が出ない。

香織「……………自分の名前は?」

「分かりません。」

香織「今迄何処にいたの?」

「知りません。」

雫「……………覚えてる限りでの、最初の思い出は?」

「その眼鏡をかけた方にお会いした所でしょうか?」

質問を続けた二人は絶句する。つまりは行方不明になっていた約一ヶ月間は愚か、知り合いの名前も、地球にいた頃の記憶さえも無いという事になる。鈴が怯えた様子で白野に詰め寄る。

鈴「嘘……………でしょ……………?忘れちゃったの?私だよ、鈴だよ!あなた

の親友で、一年の時クラスメイトだった!本当に覚えてないの!?!」  
「知りません。」

鈴「そんな……。嘘だ……。嘘だよ……。」

鈴がシヨックでその場に泣き崩れる。生徒達が動揺して俯く中、光輝が先導しようとして――

キンドル「いきなりやってくれるねえ、人形風情が。人の話も聞けないのかい？」

「!?!」

――忌々しい声が響き渡った。一斉に振り返ると、そこには頭に刺さったステイレットを引き抜き、頭の傷を一瞬で治す魔人族の姿があった。

光輝「そんな、莫迦な……。不死身なのか!?!」

キンドル「まあ、そんな所かなあ。さて、さつきは随分なご挨拶をしてくれたねえ、クソ女が。また同じ目に会いたいのか？」

「……。」

白野は無言で、再び生徒達を“天絶”で覆う。今度は白野自身も障壁の中にいる。

キンドル「馬鹿が、無駄な足掻きだ。」

突如、全ての出入口から再び無数の魔物が現れる。それだけでは無い、白野が倒した魔物もまた蘇った。部屋そのものが魔物で埋め尽くされた。

龍太郎「嘘だろ……？全滅したんじや無かったのかよ!?!」

キンドル「ハハハハハ、肉体がある限り何度でも蘇るさあ。それに、在庫はまだ無数にいる。この迷宮の十数階層を埋め尽くすほどになあ！さて、大人しく捕まってもらおうかあ……!!」

キンドルの顔に嗜虐的な笑みが浮かぶ。圧倒的な戦力差を相手に、勇者達は尚も武器を構えるが、敵の数は先程より倍以上に増えている。しかも個々の戦闘力も向こうの方が遥かに上だ。勝ち目が無い戦いを前に士気が下がっているのが目に見える。

その軍勢に向けて、白野は手をかざす。

「黒天穿」

突如地震のような激しい揺れが起こり、天井から黒い壁が現れた。魔物とキンドルが壁に引き摺り込まれ、押し潰されていく。

キンドル 「あ!?! うあああああ! あああアア  
アアアアアアアアアアア——

否、壁では無い。巨大な塊が、上階から階層を突き抜け、下層に降りながら全てを飲み込み、押し潰していく。

光輝 「何なんだあれは!?! 一体、何が起きている!?!」

“天絶” から内側は効果が及んでいないのか、勇者達は引き込まれずに済んでいる。だが、壁や地面が崩れる轟音や魔物達の悲鳴と、ブラックホールが目の前にあるかのような光景に、思わず地面に伏せて蹲る。

やがて、轟音と揺れが収まり、静寂が訪れる。勇者達は安全を確かめるように恐る恐る頭を上げる。そこには——

恵理 「……………何……………これ……………? あり得ない……………」

生徒達と白野、そして“天絶” が覆われていた辺りで途切れた地面。そして“黒天穿” によって限界まで圧縮された、魔物と瓦礫の塊。それ以外は、何もかも無くなっていった。背後に残った緑光石と、迷宮の入口辺りから差し込む光のみが、生徒達を照らす。

「皆様、怪我はありませんか?」

そして、この現象を引き起こした張本人は、何事も無かったかの様に、抑揚の無い声で生徒達に話しかけた。

こうして、一人の魔人族が起こした事件は一先ず解決し、勇者一行は、奇妙な少女に出会った。

### 3. 契約

メルド「……………それで、お前さんは白野で合っているのか？」  
「分かりません。そもそも、私は自分の名前を知りません。」

場所は一転して、「ホルアド」の宿の一室。白野が迷宮を壊した影響で地上に戻れなくなっていた勇者一行だったが、肉塊と化した魔物達をそのまま下層へ落とそうとする白野を止め（討伐した証拠がそれしか無い為、回収する必要があった）、迷宮の入口に投げさせた後、彼女は再び“絶象”を唱えた。すると魔物以外の壁や床等の迷宮の構造物が以前と全く同じ物に戻っていった。次々に起こる天変地異の様な現象に、勇者達はもう驚くのも疲れた様子で地上へと戻った。念の為、辛うじて無事だった白野が入っていた棺も抱えて。

入口から出ると、案の定白野が投げた肉塊にメルド達騎士団とその他野次馬が所狭しと集っていた。メルドは勇者達に気付くと、地震が起きた事や謎の塊が迷宮から飛び出してきた事など、不可解な現象への説明を要求した。代表として恵理が休息の為に、先に宿へ戻ると話す。事件のあらましの説明もそこで行うとも。

そして、冒頭に至る。部屋には事情聴取の為に白野と恵理が、対向にメルドがテーブルを挟んで向き合っている。

玖珠木白野。

光輝達と同じく、トータスに「神の使徒」として召喚された生徒の一人。髪は黒い肩口で切り揃えられたセミショートで、平均より少々美人寄りの顔立ち。性格はとても面倒見が良く、どこか大人びている。誰とも分け隔て無く接し、率先して生徒や教師の頼み事を快く引き受けるお人好し。そのお陰か友人も多かった様だ。周りも彼女の事を「皆の秘書」「出来るキャリア女子高生」「何でもいう事を聞いてくれるハクノチャン」と呼び、名前は兎も角かなり慕っていた。

だが、目の前の少女には、以前の白野の面影も無い。先程の質問の答えも合わさって、メルドは頭を抱える。迷宮で事件が起きたと思ったら、その原因が魔族であり、しかもその男の持ち物から自分達の仲間が記憶を失った状態で現れたのだ。魔族に囚われていたとも



前に書かれている「享年」の文字が問題だ。これが記入されている事はつまり、玖珠木白野は既に死んでいるという事になる。自分の前に本人がいるにも関わらず。

故障によるものかもしれないため、この問題は新しくステータスプレートを作る事で解決する事にする。そうすればこの娘の名前も詳細もハッキリするだろう。

メルド「君が使っていたと言う青白いステイレット。あれは何の魔法だ？魔法陣も詠唱も無かったそうだが？」

「あれは、手に魔力を込めると出てくるんです。武器に使ったり、相手をその場に縫い止めたり、当てた対象を動かす事も出来ます。後は込めた魔力量によって、強度と効力に差がある位ですか。それ以外の事は知りません。」

メルド「……………縫い止めると言うのは？」

「そのままの意味です。例えば敵の足に刺せば、例え空中でもその場に固定する事が出来ます。」

メルドは少しの間考える。白野の言う通りならば、この魔法は魔物が使う「固有技能」と同じ物という事になる。詠唱も魔法陣も不要な魔法と言ったら、トータスの常識ではそれしか無い。

メルド「……………魔法を使う時に詠唱が無いのは何故だ？」

「魔力の直接操作によるものです。これが出来るなら詠唱と陣は不要になります。唯、私の場合イメージの保管の為に、魔法名を名乗る必要があります。」

メルド団長、更に頭を抱える。魔力操作が出来るのも魔物だけだ。最早、白野に擬態した魔物と言われる方が信用できる。こんなものの上に報告する事は出来ない。伝わった瞬間白野らしき者の死刑が決まる。そもそも此処で斬り伏せられても文句は言えない。

メルド「質問を変えよう。何故隣の女性を、恵理を助けたんだ？」

メルドは、既に恵理から白野に会った時の話を聞いていた。どうやら助けを呼んだ時に棺から飛び出し、恵理の目の前に現れたのだと。

「助けを呼んでいたからです。それを聞いたら、私は助けなければならぬんです。」

メルド「……随分と短絡的だな。それなら、助けを呼んでいたら誰でも助けていたとも言えるのか？」

「はい。私にとって、それが全てです。」

白野ははつきりと断言する。感情の伺えない彼女だが、その言葉だけには絶対的な意思が見受けられた。

メルド「何故そう考える？」

「……誰の声かは分かりませんが、頭の中で、ずっと助けを呼ぶ声が聞こえるんです。」

メルド「声？」

「はい、私が知っていた人なのか、それとも関わりが無い人なのか、何処に居るのかも分かりません。だから、私はその人を見つけて助け出すまで、人を助け続けるつもりです。」

大体の質問を終えて、メルドは悩む。正直、今の彼女は信用できない、今の話だってそうだ。頭の中で声が聞こえるなど、精神疾患を持っているか、妄想癖があるかどうかというレベルだ。どちらにしろ碌なものでは無い。こんな状態の人物を仲間に入れて、背中を預けられる筈も無い。

それに、自分達は明日にも「ヘルシャー帝国」からの、使者と会合の為に「ハイリヒ王国」へ出発する予定がある。そうすれば白野の身柄は自分達で預かるか、「ホルアド」のギルドに任せるしか無くなる。しかし、彼女は勇者達を全滅一步手前まで追い詰めた魔物の軍勢を、僅か数瞬で壊滅させる程の力がある。ギルドに置いていくには些か危険過ぎるし、かといって王国に連れて行けば、先述の処刑台送りだ。抵抗されて国が地図から消える可能性だってある。

メルドが白野の処遇について悩んでいると、今迄黙って話を聞いていた恵理が話し出した。

恵理「メルドさん。白野の処遇については、提案があるんですけど……。」

メルド「提案？何かいい方法があるのか？」

恵理「はい、少し無理がありますけど。彼女は私が“降霊術”で動かしている死体という事にしませんか？」

その発言に驚愕する。降霊術とは、闇系魔法の中でも超高難度の魔法で、死者の残留思念に作用する魔法だ。戦闘における主な使い方は、遺体の残留思念を魔法で包み実体化の能力を与えて使役したり、遺体に憑依させて傀儡化するというものだ。また、生身の人間に憑依させることで、その技術や能力をある程度トレースすることもできる。

だがそれは、あくまで死体に対してと言う条件がある。肝心の白野は生きているし、死体を演じさせ続ける事も難しい。メルドはその制限について話すと、またもや別の疑問が浮上ってしまった。

恵理「それに関しては解決策があります。試しに白野の手に触れてみて下さい。白野、手を出して。」

「……………」

恵理「…………… 白野?」

「…………… ?それは私の事ですか?」

恵理「そこから!?今迄の話ちゃんと聞いてた?白野なんて名前は貴方以外いないから!」

白野「わかりました。」

話の仙骨が折れかけたが、話を戻す。白野は指示通り、メルドに向けて手を差し出す。メルドは伸びてきた手に触れると、僅かに顔を強張らせる。

メルド「…………… !?…………… これは!?!」

冷たい。

まるで埋葬される直前の死体のような冷たさだった。手だけでは無い。腕も顔も、何処もかしこも体温は感じられない。同時に、生きていれば必ずある筈の脈動も無かった。これでは動く死体そのものだ。

恵理「白野の状態を利用すれば、傀儡にしたと言えば大凡は通じます。それに、言い方は悪いんですけど…。要は私の道具にあたるので、身分を証明する必要も無くなります。新しくステータスプレートを作り直す事ありません。」

ついでに言えば、戦闘力の面も解決する。建前ではあるが恵理の傀



備なのだから、彼女が指示しなければ味方に刃向かう恐れも無くなるという事になる。寧ろ、傀儡にさせた方が体質的な面で見ても都合が良い。魔力操作や何故体温や脈が無いのか等の疑問が残るが、判明させる方法がない為一先ず保留にする。

メルド「…………… わかった。君の提案を採用しよう。正直助かったよ。上にどう報告したものか煮詰まっていたからな！」

メルドは豪快に笑い、二人に笑顔を向ける。

白野の身柄は一旦恵理に一任する事になり、方針が決まった所でその場は解散となった。

……………

その日の夜遅く。恵理は、周りを欺く為の仮面を外し、白野を泊める為に新しく借りた部屋に向かっていた。理由は彼女を自分の計画に組み込み、利用する為だ。彼女の実力なら有事の際に充分役に立っし、自分の知らない魔法の知識を、可能であれば教えてもらう事も出来るだろう。何より、助けを求めるとかなり従順だ。今はまだ降霊術の腕前が足りない為実行はしないが、殺して降霊術を掛けても、前述の体質のお陰で他人にはバレない。色々理由を付けて引き込めば、優秀な駒になる筈だ。

詳細はここでは省くが、恵理には現状自分しか知らない白野に関する情報がある。これ取引に持ち掛けたら、快く引き受てくれるだろう。

そして、白野が割り当てられた部屋に到着した。ドアに手を掛けると鍵がかかっておらず、扉がゆつくりと開く。部屋の明かりは消されており、月明りのみが室内を照らす。目的の人物はベッドに潜り込んでおり、寝息一つたたさず目を閉じていた。その無防備な姿に少し呆れる。

恵理（女性で、しかも一人部屋なのに呑気だねえ。）

盛った男共が入って来るかもしれないのに。嫌な記憶を振り払いつつ、恵理はベッドに近付くき、白野を起こす為に頭に手を伸ばす。ガシリと。

伸ばした腕を冷たい手が掴みとり、  
無機質な顔がぐるりと恵理に向いた。

恵理「ひ——っ!?——ッ!?」

白野「どうかしましたか? エリさん?」

恵理「——ッ!!」

犯人は白野だ。恵理が手を伸ばした瞬間、何の前触れも無く手を掴み、暗闇の中一瞬で目を開け振り向いてきた。恵理は悲鳴をあげそうになったが、騒がせない為かもう一つの手で口を塞がれ、喋られなくなる。

恵理が何とか落ち着き始めた所で、白野は恵理の口から手を離れた。ベッドから立ち上がる。

白野「あまり騒ぐと、他のお客様のご迷惑になりますよ。」

恵理「ぜえ、ぜえ、誰のせいだよ!? て言うか、起きてたなら最初から起き上がれよ!!」

恵理は周囲に気付かれない程度の声量で反論する。密会をする為に来たのに、プチホラー体験をする羽目になる現実に苛立ち、頭を掻き毟る。

白野「私に何か御用がお有りでしょうか?」

恵理「用がなかったらこんな夜更けに来ないよ。君に、契約を取り付けたくてね。白野さあ、記憶、取り戻したく無い?」

気を取り直して、恵理は記憶を餌に契約を結ぼうと迫る。もし自分が誰なのか分からなくなったら、失われた記憶を取り戻そうとするのは当然だろう。だから、早速手掛かりになりそうな情報を渡すかのように振る舞う。

白野「いえ、不要です。」

恵理「……え? 何て?」

白野「記憶は要りません。」

恵理「…私しか知らない事もあるよ? それでも要らないの?」

白野「はい。」

恵理「ええ……?」

恵理さん、早速二度も出鼻を挫かれる。有効な切り札になると思わ

れていたものが紙切れに変わる。

恵理「……じゃあ、白野はこれからどうするつもりなのかなあ。」  
白野「特には何も考えておりません……。そうですね。助けを求めている人を助けながら、世界中を探し回りましたよ。」

恵理は啞然とする。こいつ、何も考えてない。計画性どころか未来も無え。そんな事をすれば悪知恵の働く連中に、程のいいように使われて野垂れ死ぬだけだ。白野自身、そんな事になるとは露ほども思っていないだろう。呆れながらも話を続ける。

恵理「はあ……。そんな事するぐらいなら、僕と手を組まない？ そうすれば例の助けを呼ぶ声が誰か、わかるかもしれないよお？」

白野「本当ですか？」

恵理「……かもしれない」ってだけの話だけどね。どうせ手掛かりも殆ど無いんだし、情報を持ってそうだった魔族も、君が殺しちゃったしねえ。あてがそう簡単に見つかるとも思えない。だったらお互いに協力して、有意義な事をした方が良いとは思わない？」

白野「思いません。」

恵理「こいつ……。」

取りつく島もない様子に、恵理は思わず半目になり白野を睨む。だが、意外な事に白野の方から話が切り出された。

白野「エリさんは、まだ助けを求めていますか？」

恵理「！……そうだねえ。詳しくは話せないけど、今進めてる計画があるんだあ。その下準備が結構大変でさ、誰か助けてくれる人がいると良いんだけどなあ。」

獲物が漸く餌に掛かった事に内心喜びながら、白野の返答を待つ。

白野「良いですよ。では計画の詳細を教えてください。」

恵理「ねえ本当に話ちゃんと聞いてる？ 話せないって言ったよね？」

舌の根も乾かぬうちに、恵理の喜びが疑惑に変わる。

白野「聞いております。ですが、お互いの認識に齟齬があれば、その計画に支障を来します。全容を知らなければ貴方を助ける事が出来ません。」

恵理「あのさあ、この計画は周りにバレるとそれだけで破綻するんだよ。情報漏洩のリスクは少ない方がいいし、君が知る必要はぷみゆ!?!」

白野が唐突に両手で恵理の頬を抑えつけ、言葉が途中で切れる。万力の様な強さで掴まれ、お互いの顔が向き合う形で固定される。

白野「助けを求められた以上、私には貴女を助ける義務があります。その計画を必ず成功させなければなりません。そして、その為には情報共有が必要不可欠です。」

恵理「…その前に、僕以外の人には絶対にバレないようにする事と、聞いたからには必ず協力する事を約束しろ。じやなきやこの話は無しだから。」

白野「わかりました。その旨を遵守致します。紅茶を用意しますので、少々お待ちください。」

話が長くなると予想したのか、顔からから手を離し、物を用意するべくその場から離れる。程無くして、部屋に用意されていた紅茶を淹れ、香りを漂わせながら白野が戻って来る。

白野「お待たせ致しました。」

湯気の立つ暖かそうなそれを受け取り、恵理は白野に掴まれて冷えた手を温めながら、紅茶を口に含む。何故か、ハイリヒ王国のメイド達が入れた物より美味しく感じる。

恵理「紅茶の淹れ方なんて、何処で習ったの？お茶汲みどころか料理も出来なかった癖に…。」

白野「教わった記憶はありません。最初から知っていました。」

またこの現象だ。白野が苦手だった事でさえ、今では容易くこなして見せる。行方をくらましていた一ヶ月の間に猛特訓でもしたのか、それともあのフランケンシュタイン地味な顔をした魔族に何かされたのか。肝心の本人が何も覚えていない事もあり、答えは出てこない。

恵理「……まあいいや。君がどうしても聞きたがってる計画の内容だけど、要は光輝君を手に入れる為の下準備だよ。」

白野「コウキとは、誰の事ですか？」

恵理「……キラキラした鎧を着てて、バスターソードを持った茶髪の男。」

白野「髪の色はわかりませんが、確か司令塔を担当されていた方でしょうか？」

恵理「そうそれ。」

恵理は疲れた様に投げやりに答える。

計画を要約すると、光輝に群がる生徒達を全員排除し、彼自身にも降霊術を掛けて傀儡化し、自分だけの所有物とする計画だった。勿論そんな事をすれば王国には居られなくなる為、魔人族と接触し、ゴミ掃除の副産物で傀儡にした生徒や、王国の先鋭兵士を手土産に彼らに取り入り、自分達は放置してもらおうつもりのようなのだ。

だがその前に降霊術の腕を磨く必要がある。この魔法の仕様上、一度しか機会がない為失敗は許されない。今の實力では精々青白い顔をしたゾンビが出来上がるだけだ。それでは意味がない。

白野「つまり、練習の為に被験者を用意しなければならぬ、と言う訳ですね。」

恵理「そうそう、だから君には早速、実験体を用意する為に色々働いて欲しいんだ。話が早くて助かるよ。」

白野「もう一つ、やりやすい案があります。」

恵理「……？何それ？」

恵理が訝しみながら、白野の顔を見つめる。

白野「私が、エリさんに魔法の知識をお教え致します。」

恵理「何それ、君の方が僕より降霊術に詳しいとか言わないよね？」

白野「それはわかりませんが、貴女に丁度いい神代魔法や、色々な降霊術の使い方を伝える方法があります。」

恵理「!？」

後半は兎も角、前の台詞に恵理は驚愕する。

神代魔法。それは現代では失伝した、文字通り神の時代に使われていた魔法だ。その知識は勿論手に入れる術はない。なのに、彼女はそれを知っていて、しかも教えてくれると言うのだ。

恵理「……その魔法はどう言うものなの？」

白野「『魂魄魔法』と呼ばれるものです。魂などの生物の持つ非物質に干渉する魔法です。これなら降霊術の研究にも役立つ筈です。」  
恵理は喜びに目を輝かせる。ぴったりなんてものではない。それが手に入れば降霊術以上の事も容易く出来る。非物質というのがどの範囲までかはわからないが、上手くいけば相手の記憶も思考も思いの儘だ。

恵理「でも、教えるにしてもどうやってやるの?」

白野「知識を直接貴女の脳に刷り込みます。そうすれば数分足らずで魂魄魔法を使える様になります。」

恵理はその話を聞き、今すぐ飛び上がりたくなるかのような喜びを感じる。習得に時間も労力もかなり掛かると思っていたが、僅か数分で終わるようだ。喜ばない筈がない。思っても見なかった大きな収穫だ。

恵理「じゃあさあ、早速教えてよ。その神代魔法。ね、いいでしょ?」

白野「構いません。ですが、先に一つ忠告をさせて下さい。」

恵理「今度は何?まさかとは思うけど、今更この計画を止めるとか言わないよね?」

白野「いえ、先程コウキさんに降霊術を使い、自分だけの物にするとお聞きしたので、その事で一つお話す事があるんです。」

白野の澄んだ瞳が、恵理を真っ直ぐに見つめる。

白野「死んだ人とはずっと一緒にいられるかもしれませんが、二度と会えなくなる事を忘れないで下さい。」

恵理「……随分偉そうなこと言うね。何も覚えてない癖に。」

白野「滅相ありません。忠告は以上です。それでは魔法をお教えしますので、じっとしていて下さい。」

恵理は忠告に不快げに眉を顰めた後、言われた通りに椅子に座って大人しくする。白野は恵理の頭に手を伸ばし、額に触れる。

そして頭の中に、知識が入り込んで来た。

.....

黒い霧に覆われた所に立っていた。  
光は無く、暗い空間が続くだけの景色。

助けて

とても寒くて、身が凍るかのように冷えていく。そんな中、声が聞こえてくる。

たすけて

声がる方向に振り向く。  
しかし、何も見えてこない。  
黒い霧が絶え間無く吹いているだけ。  
仕方なく辺りを見渡していると

タスケテ

礫にされた■の姿が、  
恵理の目の前にあった。

.....

恵理「——ツ!!ハアツ：ハアツ：ハアツ：!？」

白野「大丈夫ですか？」

気を失っていたのだろう。飛び起きながら、荒くなった呼吸を整えようとする。中々動悸は治らず、体も震えが止まらない。

恵理「今のは……何なの……？」

白野「何か妙なものでも見ましたか？」

全てが死に絶えたかの様な、悍ましい景色だった。恵理は自分が見た光景を白野に伝える。しかし、求めていた答えは返ってこない。

白野「申し訳ありません。その景色はよく見ているのですが、それが何なのかまでは私も知りません。」

恵理「あんな物をよく見るの……？よく生きてられるね……。」

白野「それで、魂魄魔法の知識は得られましたか？」

恵理は少しの間目を閉じ思考する。確かに、さっきまで知らなかった魔法の知識が頭に叩き込まれている。使い方もはつきりと理解出来ている。どうやら知識の伝授自体は成功した様だ。

恵理「へえ。これが神代魔法か。くふふ、適正もちゃんとあるみたいだし、これはもう僕の為にある様な魔法だねえ。ああ、早く試してみたいなあ！待ちきれないよ！」

先程迄の嫌な気分も幾らか消し飛び、恍惚な笑みを浮かべながら、恵理は新しいオモチャを手に入れた子供の様に燥ぐ。これを使えば計画に大きな進捗があるだろう。だが、慌ててはいけない。計画は入念に練るのが大事だ。

恵理「まあ、試すのは実験体を手に入れやすい王国でやればいつか。色々あつて疲れたし、今日はもう休むよ。」

白野「そうですね。また何か欲しい物があればお申し付け下さい。出来る限りご用意致します。」

恵理「アハハハハ、良いねえ。色々と上手くいきそうだよ。そうだ！今度は魔力操作とかを教えてよ。詠唱とか面倒なだけだし、思いの儘に扱えるのはかなり良いし。」

恵理はそう言つて、白野に手を差し出す。

白野「これは？」

恵理「握手だよ。ここまで来たからには、白野にも手伝ってもらわないとね。だから、計約成立の握手だよ。」

白野「わかりました。」



二人の少女の手が重なる。これを持って、協力関係は成立した。  
恵理「ヨロシクね。白野。」  
白野「宜しくお願い致します。エリさん。」

## 4. 贈物

翌朝、光輝達勇者一行は馬車に乗り込み、「ホルアド」を出発する。行列は帝国との会談の為「ハイリヒ王国」に向かい進んで行た。

各々が思い思いの会話を紡ぐ中、全く言葉が出ず、静まり返っている車両が一台あった。

白野「……………」

鈴「……………」

白野が乗せられている車両だ。室内には以前仲が良かった生徒の恵理、鈴、香織、雫その他女性陣が並んで座っている。因みに、何時迄も奴隷服でいるのは問題がある為、白野の衣服は他の人の予備を借りており、一般的な町娘の姿になっている。

鈴「…………… その… ハクノンはさ、何も覚えてないの？」

重苦しい空気に耐えかねたのか、鈴が白野に話しかける。その問いに、残酷な返事が戻ってくる。

白野「……………？はくのんとは、誰の事ですか？」

鈴「……………ッ」

その事も忘れてしまったのか。鈴の顔が悲しげに歪む、恵理がその背中を撫でて、慰める演技をする。

香織「白野ちゃん。それはね、鈴ちゃんがあなたにつけてたあだ名だったんだよ。白野ちゃん自身も結構気に入ってたんだけど、思い出せないかな？」

白野「特に思い出せるものではありません。」

香織「そっか……………」

香織は悲しげに顔を伏せる。他の生徒達も、寂しげな表情を白野に向ける。もう、自分達の知る白野はいない。かつての姿は、自分達の記憶の中にしかない。その現実には、皆が俯く。

白野「皆様は、私が記憶を取り戻せば救われますか？」

鈴「え…？」

白野「全て思い出せば、貴方達は喜びますか？」

白野の質問が、馬車にいる全員に向けられる。皆が顔を上げて、白

野に向き直る。

鈴「…うん、そうだね。鈴にとつても大切な思い出だから、ハクノンにも思い出して欲しいな。楽しかった事が沢山あったから。」

香織「うん。色々あったよね。一緒に家に泊まったりとか、喫茶店でお喋りしたりとか。お祭りに行った事もあったよね。」

雫「そうね、あの時、白野が射的で凄い量の景品稼いでたわよね。あの時の店員さんの顔が、今でも忘れられないわ。」

恵理「絶対とれない様にしてた景品も持っていかれたからね。ヒドイ顔になってた。」

その質問を機に、思い出話に花が咲き、空元気ではあるが本人達の明るい性格のなせる技か、重い空気が腫れていく。

気が少し紛れた所で、鈴は意を決して白野に話しかける。

鈴「その、ハクノンは王国に着いた後に時間ある？」

白野「王国側の事情聴取がある為、私からは何とも言えません。」

神の使徒という元々の身分上、王国には帰還と身の上話、その他諸々の報告をしなければならぬ。どれほど時間がかかるかは貴族連中の反応次第だ。それでも、メルドが報告を取り計らってくれる為、白野が考えている程には時間はかからないだろう。

鈴「その、鈴達も帝国との会談が終わったら、少しの間休暇がでるの。だからその時に、皆で王国の商店街に行つて、色々買物とかしてみない？」

白野「買物ですか？何かご入り用なものがあるのですか？」

鈴「ええと、生活に必要なものはもう揃つてるんだけど、商店街には行つた事ないし、折角異世界にいるんだから、今の内に見に行きたいなあと思つて。だからハクノンも一緒に来ない？」

鈴は白野と一緒に休暇を楽しみたいようだ。周りの生徒も誘ってみるが、生憎先約があるようで、集まったのは鈴、白野、恵理の三人だった。

白野「私がついていく事に、意味があるのですか？」

鈴「それはほら、いろんなものを見て回つたら、もしかしたら何か思い出せるかもだし、部屋にずっといるよりは外に出た方が楽しい

よ。ね？恵理もそう思うでしょ？」

恵理「うん、そうだね。私も服とか色々見て回りたいかな。それに昨日の臨時報酬で白野も結構貰えたんでしょ？だったら皆で出かけて、遊んで行こうよ。」

臨時報酬とは、白野が殲滅した魔物の事だ。あの後、白野が再生魔法を使い、肉塊から魔物の素材のみを取り出し、ギルドで換金したのだ。かなり質の良いものだったらしく、売値は相当な物になった。その報酬は白野に渡る予定だったが、本人が不要と言い出し、恵理達勇者一行に全額を寄付しようとし出した。何人かは喜んで受け取るうとしたが、光輝が受け取れないと申し出た為、結局折衷案として全員に均等に寄付される形となった。それでも、贅沢をするには充分過ぎる金額だ。

白野「わかりました。メルド団長に相談し、時間が取れる様でしたら、スズさん達にご連絡する様に致します。」

鈴「ホント？楽しみだなー！今まで訓練とか迷宮攻略とかで時間が無かったから、買物に行くのも久し振りだね！」

鈴の顔に笑顔が戻っていく。それに連れて、生徒達の表情にも笑みが浮かぶ。

ハイリヒ王国に着くにはまだ時間がかかる。それまでの間、少女達の談笑が馬車の中で絶え間無く続いた。

.....

あくる日、そろそろ昼時に回る頃、普段着となった町娘の姿で、白野は王宮の入口で待ち合わせをしていた。

貴族達への報告や、帝国との会談も無事終わり、勇者一行は予定通り各々が思い思いの休暇を満喫していた。事情聴取の際、案の定白野を魔物と判断し、処刑しようとした者達もいたが、メルドの尽力と恵理の考案した説明の甲斐もあり、勇者達と騎士団に監視させるという条件付きで話は済んだ。

そして先日の約束通り、白野は商店街へ買物に行く準備を済ませ、他の二人が到着する迄待機していた。

鈴「お待たせハクノン！もう来てたの？」

恵理「ごめん、待たせちゃった？」

程無くして、待ち人が白野に向かって歩いて来た。

鈴は白いブラウスに、膝下まで伸びた短い袖の黒いワンピースを着ている。いつものお下げから一転、髪を下ろしキャプリーヌを被っている。首元には赤いリボンが巻かれており、ロングブーツを履いている。

恵理は白いノースリーブのカットソーに鼠色のカーディガンを羽織っている。膝の辺りまで伸びた黒いスカートと茶色のブーツを履き、キャスケット帽の様なものを被っている。

気にしすぎかと思うが、神の使徒が来たとなれば軽い騒ぎになると予想し、変装の意味も含めて二人共帽子を被っている。白野の場合は見た目が変わっていることもあり、姿を隠す必要は無いだろう。白野は二人が自分より遅く来たことに気にしたそぶりも見せずに、二人に話しかける。

白野「お待ちしておりました、お二方。忘れ物はございませんか？」

鈴「うん！財布も地図も持ったし、後は出発するだけかな。最初は何処に行こうか？」

恵理「そろそろお昼時だから、先に喫茶店に行って見ない？」

鈴「そうだね、何か甘い物とかあるかな？折角だから色々食べてみたいなく。」

恵理「ふふ、食いしん坊さんだねえ、鈴は。」

鈴「むう、別に良いじゃん。普段運動してるんだから、カロリーとかそんな気にしなくても平気だし。……あれ？大丈夫だよね？鈴の体重。」

そんな日常的な会話をしながら、三人は商店街へと向かって行った。

.....

鈴「甘い物ってあんまり無いかなどか思ってたけど、結構種類あったね。」

恵理「そうだよね。中世のヨーロッパみたいな世界だし。無くてもおかしくはないから。でも、ある方がこつちとしても有り難いけどね。」

目的地の喫茶店に到着し、各々が気になった料理を注文する。主食に鈴はミートソースの Pasta を、恵理はマルゲリータの様なピッツアを、白野は自分で選べなかつた為、店員のおススメでスフォリアテツラ擬きを頼んだ。食後のデザートにはケーキやプリンと言った、地球でも慣れ親しんだ物が数多く取り揃えられており、二人は目移りしながら何を注文するか悩み楽しんでいた。

やがて料理が到着し、三人は食事を始める。

鈴「ん！やっぱり美味しいね。流石は貴族御用達の名店。」

恵理「うん。リリーがお忍びで通い続けるだけの事はあるね。」

二人の言う通り、この店の料理は中々の評判があり、知る人ぞ知る隠れた名店となっている。王国の王女、リリアーナの密かな憩いの場にもなっている。王国一の喫茶店になる日も近いかもしれない。

鈴「どう？ハクノンが食べてるのも美味しい？」

黙々とパンを千切りながら、少しずつ食べる白野に話しかける。

白野「美味しい、とは？」

鈴「え？ほら、甘いか、酸っぱいか、何か無い？」

白野「特には何も感じられません。」

唐突に判明した事実二人が硬直する。つまり、どれを食べても味がしないという事だ。これが意味する事は――

恵理「……もしかして、味覚が無いの？」

白野「どうやらその様です。」

鈴「そんな……。」

白野はどうでも良い様に答えるが、鈴はその事実悲痛そうな顔をする。味が分からないという事は、何を食べても変わらないという事だ。例え誰もが食べたがる高級料理を食べても、頬が落ちるような甘いお菓子を頬張っても何も感じない。それでは食事の意味が殆ど無いようなものだ。

食事の場に重い空気が流れるが、白野がおもむろにパンを手を取っ

た。

「んむ!？」

そして二人の口にパンを突っ込む。目を白黒させながらも、何とか差し込まれた物を咀嚼する。

鈴「は、ハクノン……？」

白野「美味しいですか？」

鈴「はい？」

白野「美味しいですか？」

鈴「えと、うん、美味しいよ……？」

白野「それは何よりです。」

恵理「人の口を物をつ突っ込んで、最初に言う事がそれなの……？」  
恵理は困ったように苦笑するが、本人は気にも留めない。だが、次に  
出たのは慰める様な言葉だった。

白野「私に味は分かりませんが、それを共有する事は出来ます。」

鈴「!」

白野「ですから私の味覚が戻るまで、皆で味わいませんか？」

鈴「ハクノン……!」

その言葉に、鈴の顔が晴れていく。本人が意図しているかは不明だが、またこうして一緒に食事をしようと言ってくれた。以前と変わらず、同じように。その事に鈴は喜び笑顔を向ける。

恵理「ふふ、じゃあ、交換しながら食べよっか。ほら、早くしないと冷めちゃうよ？」

鈴「アハハ、そうだね。じゃあ無くなっちゃう前に三人で交換しよっか!」

再び明るい雰囲気に戻って来る。食後のデザートも交換しながら、三人は食事の時間を楽しんでいった。

.....

食事を終えた後、三人は服屋や装飾品等が並ぶ大通りの辺りに来ていた。私服はあまり着る機会が無い為多くは買わず、観光の意味も含めて雑貨が売られている店に来ていた。

鈴「あれ、こんな物もあるんだ？」

恵理「え？どれの事？」

鈴「ほら、これこれ。」

鈴は棚に並べてあった物を手に取り、二人に見せる。

恵理「これって……、もしかしてカメラ？」

それはこの世界では些か機械的な、下部に見たことのない十字の紋章が刻まれた、地球で言う所のレンジファインダーカメラだった。中にフィルムの様な物が入っており、写真を撮る事が出来るようだ。店員に聞くと、どうやら使い方の分からない骨董品で、今迄ずっと売れ残ってたようだ。

恵理「まあ、現像する事も出来ないだろうし、撮っても見づらいフィルムの状態だから買う人がいなかったんだろうね。」

鈴「うくん。ねえハクノン。これ買ってみない？」

白野「この道具をですか？何故？」

白野は意図が理解出来ず、鈴に質問する。

鈴「ほら、これで記録を残していけば、また忘れる事があつても思い出を残せるでしょ？だから、ハクノンにぴったりだと思って。」

恵理「でも、フィルムはどうするの？今の話だと予備も売ってなさそうだけど。」

鈴「それは……。」

鈴が返答に詰まる。今迄使われる事もなく流れ着いた代物だ。当然フィルムの在庫も、作成方法も無い。だが、意外な事に解決策が出て来た。

白野「それでしたら、私が作り方を知っていますよ。」

恵理「え!?!本当!?!」

白野「はい、材料さえあれば”錬成”して幾らでもお作り致しますよ。」

鈴「ハクノン、天職の魔法も使えるの……？ここまで来ると何でも出来そうだね……。」

失伝した作成方法を知っていて、しかも錬成師でも無いのに、“錬成”が使える。益々謎が深まるが理由を知る術はない。白野は店員



に料金を払い、カメラを購入する。ずっと売れ残っていた事もあり、店員は諸手を挙げて喜んでいた。三人はそこでの買物を済ませた後、店を出る。通りの途中にあつた噴水広場に到着した時、鈴から提案が出てきた。

鈴「ねえ、早速一枚撮ってみない？使い方は分かる？」

白野「ええ、使えますが、何を撮るんですか？」

鈴「それは白野次第だけど、先ずは鈴達の写真を撮らない？ほら、三人一緒に！」

どうやら鈴は集合写真を撮りたいようだ。恵理と白野はその提案に了承し、近くにあつた噴水広場が背景になる様に、タイマーをセツトしたカメラを置く。

そして、時間通りにシャッターが切られ、左にVサインをする鈴、真ん中に無表情で直立する白野、その様子に苦笑する恵理がフィルムに写る。初めて撮られた写真は、そんな仲の良さそうな三人が並んでいた。

.....

鈴「はあく。何か今日はあつという間だったなあ。もう夕方になっちゃった。」

恵理「そろそろ王宮に戻らないとね。他の皆も集まつてる頃だろうし。」

陽が傾き、建物に灯りがつき始めた頃、三人は王宮に戻る為、帰路についていた。戦果品を手に、今日の出来事を名残惜しみながら、ゆつくり歩いて行く。

鈴「そうだ。二人にプレゼントがあるんだ。」

白野「ぶれぜんと？」

鈴「うん、コレなんだけど...。」

それは木製の球が並べられた、真ん中に一つ色の付いたガラス球が付けられている腕飾りだ。色の違う物が三つあり、白野に白色が、恵理に青色が渡される。残った黄色の腕輪を、鈴が自分の腕に付ける。

恵理「もしかして、念珠？」

鈴「違うよ!?!ブレスレットだから!トータスだと数珠の風習は無いから、そういう形の飾り物も多いんだと思うよ。」

恵理「それもそうか。でも、何で急に?」

鈴「単純にお揃いの記念品でもあるんだけど、ほら、大分過ぎちゃったけど、白野の誕生日があつたでしょ?」

白野「私のですか?」

鈴「うん。9月8日が白野の誕生日だったんだけど、知ったのがトータスに来てからで、今まで買いに行く暇も無かったから、今の内に渡さなきゃと思つて。」

白野「そうだったんですか。ありがとうございます、スズさん。」

二人は渡された腕飾りを腕に付ける。お揃いの飾りが、三人の腕に巻かれる。

鈴「エヘヘ。これからも鈴達、ズツ友だよ!」

白野「蚓っ屠喪?呪いの類でしょうか?」

鈴「だから違うよ!?!『ずっと友達』の略だから!何で呪いになったの!?!」

恵理「アハハ。ほら二人共、早くしないと陽が沈んじゃうよ!」

鈴「ハッ、そうだった!行こう、ハクノン!」

白野「わかりました。」

夕陽が通りを照らす中、三人の影が小走りに王宮へ向かつて行く。ふと、白野は夕焼けに染められた街並みを眺め、今日買ったカメラでその景色を撮る。フィルムに紅い景色が写る。

だが少女の視界に光は映らず、唯々黒い霧が流れるだけだった。

## 5. 旅出

白野が勇者一行に加わってから、数ヶ月程時間がたった頃。彼等はオルクス大迷宮の80階層を攻略していた。

永山「珍珠木！そっちに行つたぞ！」

白野「はい。」

隊列を維持しつつ、生徒達は襲いかかる蜥蜴の群を相手していた。その内の何匹かが、別の群体の攪乱役を引き受けていた小悪党組と、フルフェイスの騎士甲冑姿をした白野に向かって行く。

——シャアアアアアアアア!!

集団で突進してくる蜥蜴の魔物、それを相手に白野は背負っていた刃渡り1m程のクレイモアを振り下ろし、首を断つ。その勢いのまま振り上げ後続の魔物の頭を両断する。次の一匹が噛み付こうと白野の首に迫るが、彼女の左腕に展開された障壁に阻まれ、牙にヒビが入る。

——キュイイイ!?

後続の魔物が更に防壁に衝突し突破を試みるが、逆に防壁から発せられた衝撃波に吹き飛ばされ纏めて絶命する。

それは腕を覆う程の大きさの手盾だった。任意で展開されるその防壁は、折り畳み式にも関わらず途轍も無い高度を持っている。この盾は敵の物理攻撃や魔法を魔力に変換し、盾の裏に装着された青白く発光する結晶に溜め込まれる。変換された魔力は衝撃波となって敵を打ち付ける他自身の魔力回復にも使えるらしく、外付けの魔力タンクにもなるようだ。

近藤「オラア！サツサと死にやがれえ！」

白野「後ろ危険ですよ。」

近藤「うおっとお!？」

槍術師の近藤が得物を振り回し敵の数を減らして行くが、白野の警告で慌ててその場から飛び退く。そして彼がいた場所に、熊の魔物の腕が叩き付けられ地面にクレーターが出来る。

近藤「危ねえなあ！」

白野のおかげで無傷で済み、早々に態勢を立て直し熊に向き直るが、槍を刺す前に投げられたクレイモアが熊の首を両断し、壁に刺さる。

白野「ご無事ですか？」

近藤「ハッ、余計なお世話だ！」

近藤は助けられた事に気に食わなげに鼻を鳴らす。白野の無感情な雰囲気キミ悪がっているのか、小悪党組は白野を影で毛嫌いしていた。最も、光輝達がいる前では普段通り大人しくなるが。

当の本人はその事を気にもせず、白野は近藤の無事を確認した後、投げた剣を拾う為“身体強化”を使い駆け出す。

——ブモオオオオオオオ！

あと少しで届く所で二足歩行をする牛の魔物が立ちほだかり、持っている大斧を横殴りに振る。白野はそれを滑り込む事で回避し、壁に突き刺さっていたクレイモアを引き抜き魔物の膝裏を切り裂く。牛の魔物は立てなくなり膝をつき、上半身が後ろに倒れこむ。その勢いを利用して、白野は魔物の背中に鎧通しを突き刺し、それを支えに腕力と脚力で跳び上がり魔物の上を横転しながら剣を振る。遠心力の乗った刃は容易く胴体を袈裟斬りに切り裂き、魔物を両断した。

光輝「“天翔裂破”！」

そして、詠唱を終えた光輝が光の斬撃を無数に放つ。数ヶ月に渡り磨き抜かれた範囲攻撃魔法は、部屋にいた魔物達は一匹残らず殲滅した。その様を見届けた後、白野はクレイモアの血を拭い背負っている鞘に戻した後、光輝達の元に歩いて行った。

●  
魔物を掃討し安全確認を終えた後、生徒達は魔物から魔石等を回収するべく、解体作業に入っていた。

光輝「皆、怪我はないか？」

龍太郎「ああ、何とかな。けど、もう魔力回復薬を使い切っちゃまったな。」

香織「私もかな。大分長い事潜ってたし、今回は此处で引き上げて、

補給しに一旦町に戻った方が良さそうかも。」

光輝は仲間の返答に頷く、方針が決まった一行は荷物をまとめ、撤回に入った。その途中雫が白野に話し掛ける。

雫「白野、今回の武器の使い心地はどう？」

白野「特に問題はありません。火力も充分ありますし、整備も調整もしやすいのでこの剣は有用でしょう。」

雫「つまり、今後使う武器はそれで決まりって事かしら？」

白野「そうなります。」

これまでの間、白野は様々な武器を試しつつ、自分の得物をどれにするか選んでいた。基本白野はどの武器も卒なく使いこなすが、武器を何本も持つて行き状況に応じて使い分けながら戦う事は不可能な為、どれか一つに絞る必要があった。そして選ばれたのが今回使われたクレイモアだ。

雫「それは良かった。それにしても凄いわね。その装備品って全部自作した物なんでしょう？王国抱えの錬成師達が『若いのに自分達より良いものを作る』って言って悔しそうにしてたわ。」

白野「そうでしたか。」

雫の言う通り、白野が身に纏っている鎧も盾も、彼女が作成した物だ。何でも王国の宝物庫にある武器は、既に様々な魔法で鍛えられた物が多く汎用性に欠ける為、有り合わせの鉄くずで作った使い捨ての出来る物の方が調整がしやすいと言いだめたのだ。負けじと王国の錬成師達が全力を注ぎ要望通りの武器を製造したが、それでも白野が鍛造した数打ち品の方が質が良かった。結局装備品は迷宮攻略で手に入れた素材を使い、彼女が全て自作する事となった。

恵理「そういえば白野、あの黒い水晶球は何なのか分かった？」

白野「詳しい事は何も判明しておりません。唯、刻まれている魔法陣はどうやら何かを濾過し、吸収している事は確かです。」

白野が仕舞われていた棺に入っていた、魔族が常用する魔法陣が刻まれている黒い水晶球。これについては王国の魔術師達も何も知らず、加工が出来ない程非常に硬い結晶と言う事しか分からなかった。白野自身もそれが何なのかは知らず、どういう魔法が使われてい

るのか、どうやって使うのかも分からず仕舞いだ。

白野「今の所、それは唯の置物でしかありません。」

恵理「そうなんだ。でも、白野が持ってた物って、ステータスプレートとその水晶球だけなんだよね？他に何か手掛かりになる様なのがあれば良いんだけど。。」

白野「手掛かりとは？」

恵理「勿論、白野の記憶だよ。行方不明になつてた一ヶ月間何があつたのかとか、地球で暮らしてた時の記憶とか。」

補足すると、白野自身も含め、勇者一行が地球と呼ばれる異世界から呼ばれた者達という話は聞かせていた。トータスとは違い、科学と呼ばれる文明が発展した場所という事も。

そこでの生活や、ここには無い文明の利器の話も聞かせたが、白野は何も思い出せずにいた。

鈴「でも、他の宛つてなると、後は魔人族に直接聞き出すくらいしか無いよね。この前会った魔人族は死んじゃったけど。。」

件の肉塊から素材を取り尽くした後、残った臓器や肉等の不要な物は、同じく圧殺された魔人族を含め焼却処理されていた。幾ら不死身とは言え、灰になれば蘇生する事もないだろう。

鈴の言葉を聞いた後、白野は何かを探す様に見回す。しかし、今歩いている場所の周りは岩壁と緑光石が洞窟内を照らしているだけで、他は何も無い筈だ。魔物でも近くに居るのかと、恵理と鈴は警戒するが、白野は予想とは違う事を言い始めた。

白野「魔人族なら、どうやら北の山脈辺りにいる様ですね。」

鈴「え？」

.....

メルド「北山脈に魔人族が潜んでいる？」

恵理「はい。、白野が見たものを信じるならそうなります。」

生徒達が宿に戻り休息に入る中、恵理とメルドは、白野が見たものを説明する為に個室に集まっていた。白野曰く、湖畔の町【ウル】の近く、北の山脈に魔人族の姿を見た。また訳の分からない事を言い

出したと、メルドは頭痛を堪える様に顛顛を揉む。

メルド「人影なんて、洞窟の中からどうやって見たんだ？」

白野「遠視魔法によるものです。魔族は私の事を知る唯一手掛かりになる為、その魔法で辺りを搜索したんです。」

メルド「いや、その魔法については知っているが、それは障害物越しに物を見る様なものでは無いぞ…。」

因みに、透視を可能にする魔法は無い。そんな物があれば世の紳士達がこぞって風呂場を覗くだろう。

メルド「仮に姿を見たとして、お前さんはどうするつもりなんだ？」

白野「その魔族に会って、私に関する情報を聴き出します。序でにそこで何をしているのかも。」

つまり自分探しの為に【ウル】迄行き、魔族と接触したいという事らしい。だが、肝心の情報源があまりに不鮮明だ。メルドとて白野を信用していない訳では無い。短い間だが、指示は的確に守り、周りの連中を手助けするよう何でもこなしていた。かく言うメルド達騎士団も迷宮攻略の際は、白野に何度も助けられた。

メルド「その話は、嘘では無いんだな？」

白野「はい、嘘偽りはありません。そもそも貴方達に嘘をつく理由もありません。」

メルドは腕を組み考える。今の話でも言った通り、北の山脈の近くには湖畔の町【ウル】がある。近くで魔族が動いているとなると、その町に侵攻される可能性も出て来る。観光地という事もあり、その防衛設備とて高が知れている。ならば事が大きくなる前に、斥候役として白野を向かわせる事も悪い案では無い。幸い白野が抜けても光輝達なら今迄通り上手くやって行けるだろう。

メルド「因みに、何人で向かうつもりだ？」

白野「他に連れて行ける人はいないので、私一人で行きます。」

メルド「一人で？ステータスプレートを持っていなければ町に入れないぞ？」

白野「その点につきましてはメルド団長にご協力願いたい事があります。貴方が書いた書状を頂きたいのです。それがあれば身分の証

明にもなる為町に入る事が出来る筈です。」

メルド「その為に俺の所に来たのか……。」

王国の騎士団長の書状ともなれば、敵国や仲の悪い国でも無い限り信用されるだろう。そうすればステータスプレートが無くとも身分証明は出来るし、町の出入りも可能になる。

メルド「わかった。とりあえずは『北の山脈の調査の為に訪れた』とでも書いて渡しておこう。出発はいつだ？」

白野「こちらの準備は出来ておりますので、メルド団長の書状が出来次第すぐに出ます。」

白野の返事に領き、メルドは書状の作成に取り掛かるべく部屋を出て行った。そして二人きりになった時、恵理が白野に話し掛ける。

恵理「白野、魔族の事だけ……。」

白野「はい、可能であれば、魔族に取り入る為の取引を持ちかけるつもりです。」

恵理「くふふ、話が早くて助かるよ。と言っても、こっちの準備は未だ途中だし、仲間に入りたい奴がいるって言う情報だけ渡しておいて、後は直接会えるように取り計らえたらそれで良いよ。」

白野「わかりました。魔法の研究は順調ですか？」

恵理「まあね、魔力操作のおかげで練習はしやすいし、魂魄魔法と再生魔法を使えば被験者一人で何回も実験出来るし、結構捗ってるよ。」

白野「それは何よりです。」

恵理は白野の技術提供により、既存の降霊術と時間に干渉する魔法「再生魔法」を新たに習得していた。これと魂魄魔法を駆使すれば被験者の完全な蘇生も可能になり、無駄に多く殺して被験者を増やす必要も無くなった。研究もかなり捗り、降霊術を掛けた死体も生前と全く見た目も性格も変わらず、命令がある迄は勝手にいつも通りに動いてくれる程の出来になった。ここまで来れば何事も無く周囲に紛れ込む事も可能だ。例えば死体と言われたとしても、誰も判別付かないだろう。

恵理「実験も進捗したし、後は魔族と連絡が付けば大詰めか



なあ。」

白野「わかりました。出来る限り早く魔人族とは交渉の場を用意するように致します。」

恵理「よろしくね。」

この時、白野は気づけなかった。計画を大いに変革させる事になるイレギュラーの可能性を。嘗ての白野を知るもう一人の存在に会う事を。

.....

白野「困りましたね.....。」

湖畔の町【ウル】

【ホルアド】を出発してから一週間後、騎士甲冑を着た白野が、香辛料を乗せた荷車を引いて成果品の配達のために街中を歩いていた。

到着したのは数日前だったが、その際に町の住民からの頼み事を引き受けていた。北山脈で魔物の勢力が強まっており、そこでしか収穫できない香辛料の類が採取出来ず町中で在庫が不足している。そんな時現れた神の使徒である白野に、実力を見込み代理で取りに行つて欲しいと、主に宿の調理担当や主婦の方々が頼み込んできた。元々魔人族に会いに北山脈へ行く予定だった白野はそれを請け負い、運搬用の荷車を借りて山脈へと向かった。

しかし、香辛料は集まったが肝心の魔人族には会話する事も出来なかった。居場所は見えていたのでそこに向かったはいいが、近付いても逃げるばかりで、無理矢理追いついても取り付く島も無く門前払いされ逆に大量の魔物を差し向けられる始末。交渉したいのに魔人族の配下である魔物を殺す訳にもいかない為、隠密技能を使い数日に渡り逃げ回りつつ、指定された香辛料の採取を済ませ戻って来たのだ。

白野「このままでは何の成果も無く戻る事になりますね.....。」

現状入った成果と言えば、依頼達成による金銭と住民からの感謝の言葉だけだ。当初の目的は何も達成されていない。これでは町にボランティアしに来た様な物だ。

一先ずは残りの香辛料を届ける為に「水妖精の宿」に向かう。そ

の施設はこの町一番の高級宿だ。この店のオーナーであるフォス・セルオは、白野に依頼をして来た住民の一人だ。料理に使われる香辛料が不足していた事に嘆いていたので大層喜ぶだろう。

香辛料が詰まった籠を背負い店に入る。オーナーを探して室内を歩いていると、食堂の奥にあるVIPルームから騒ぎ声が聞こえて来た。

？「女の子のファーストキスを奪った挙句、ふ、二股なんて！直ぐに帰ってこなかったのは、遊び歩いていたからなんですか！もしそうなら……許しません！ええ、先生は絶対許しませんよ！お説教です！そこに直りなさい、南雲君！」

何やら背の低い女性が白い髪をした男性を叱っていた。何方も知らない人物だったが、探していたオーナーもそこにいた。白野は物を渡すべく騒ぎの元に近付く。

白野「オーナー様。少々宜しいでしょうか？」

フォス「おや、使徒様ではないですか！もしかすると、その籠に入っているのは香辛料で御座いますか？」

白野「はい。ご依頼にあった物を渡しに参りました。」

フォス「こんなに多く取って来てくださったのですか？ありがとうございます！これだけあればまたお客様に香辛料を使った料理を作ることか出来ます。本当に何とお礼をすれば良いか……。」

白野「報酬は既に頂いておりますので、お礼は不要です。それでは、私はこれで失礼致します。」

？「待つて下さい！」

白野は籠を渡し、用は済んだとその場を離れようとする。しかしそれを止める人物がいた。先程男性に説教をしていた女性だ。青ざめた顔で、僅かに震えた声で白野に話し掛けてくる。

？「……その声、もしかして玖珠木さんですか……？」

白野「……？はい。クスキとは私の事ですが、貴女は何方様ですか？」

？「——ッ」

白野の言葉に女性は両手で口を抑える。後ろにいる若い男女も狼

狼狽してる様子だ。その様が、初めて生徒達にあつた時の姿と重なる。

白野「貴女は、私の知り合いだった方ですか？」

愛子「……はい、私は教師の畑山愛子です。貴女の先生でもありませんでした。」

白野「そうでしたか。これは失礼致しました。」

白野は被っていた兜を外し、顔を出す。

白野「改めまして、神の使徒をさせて頂いております。クスキハクノと申します。以後宜しくお願い致します。」

そう言つて、白野は愛子達に頭を下げお辞儀をする。その他人行儀な姿に、愛子達は哀しげな視線を向ける。

カラン……と、コップが倒れる音がした。音がした方向を見ると、先程愛子に説教されていた男がいつのまにか席に座っており、その手からコップが落ちて中の水がテーブルに広がっていた。その男は飲み物を零した事にも気付かず白野を見つめたまま固まっている。その様子は悲しんでいると言うよりは、単純に見たものに驚いている様だった。

？「ハジメ……？」

？「玖珠木……？お前が……？」

白野「……？貴方も私の知り合いだった方ですか？」

お互いの視線が重なり合う。これが、後に魔王と呼ばれる男との出会いだつた。

## 6. 奢り

白野「つまり、ハジメさんは四ヶ月程前に行方不明になっていた生徒で、他の方は道中でお会いし恋人になった方々という認識で宜しいでしょうか？」

ハジメ「宜しくねえよ。俺の恋人はユエだけだ。」

予め神の使徒の死亡事件の概要を聞いていた白野の、強ち間違いでも無い質問に、黒いコートを着た白髪の男性、南雲ハジメは不服そうに返答する。

皆が落ち着いた後、白野とハジメ一行、愛ちゃん親衛隊、デビッド達神殿騎士はVIPルームに集まっていた。ハジメは一方的に初対面となる白野に軽い自己紹介をした後、旅の疲れを癒す為注文した食事を楽しんでいた。

だが、今迄死んでいたと思っていた生徒がこの数ヶ月の間何をしていたのか気になるのか、愛子と他の男女もハジメに質問し続ける。しかしハジメは答えるつもりは無い様で、かなり端折った返事しかない。その様子に愛子専属護衛隊長のデビッドが怒り、拳をテーブルに叩きつけながら大声を上げる。

デビッド「おい、お前！ 愛子が質問しているのだぞ！ 真面目に答える！」

ハジメ「はあ……。食事中だぞ？ 行儀よくしろよ。」

全く相手にされていない事が丸分かりの物言いにプライドを傷つけられたのか、怒りに顔を赤く染め、ハジメの隣に座っている兎人族のシアを睨め付ける。

デビッド「ふん、行儀だと？ その言葉、そっくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前の方が礼儀がなってないな。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？ 少しは人間らしくなるだろう。」

その侮蔑を多分に含んだ目を向けられ、シアは怯えて体を震わせる。どうやら亜人族を下等種族と差別する聖教教会の中枢に近い存在であるデビッド達神殿騎士と近衛騎士は、シアがこの場に居る事自

体が気に入らない様だ。

怒り心頭のデビッドに、俯くシアの手を握った金髪の少女、ユエが逆に体の芯まで凍りつきそうな絶対零度の視線を彼に向ける。デビッドは一瞬たじろぐも、見た目幼さを残す少女に気圧されたことに逆上する。

デビッド「何だ、その眼は？ 無礼だぞ！ 神の使徒でもないのに、神殿騎士に逆らうのか！」

ユエ「……小さい男。」

思わず立ち上がるデビッドに、ユエの嘲りの言葉が刺さる。唯でさえ怒りで冷静さを失っていたデビッドは、その言葉で忍耐が切れた。

デビッド「……異教徒め。そこの獣風情と一緒に地獄へ送ってやムグツ!? ンーーッ!?」

腰に吊り下げた剣の柄を手に持ち、引き抜こうとした瞬間、白野が立ち上がり横から手を伸ばし、デビッドの口を塞いだ、……鼻も一緒に。

白野「参考にお聞きしたいのですが、ハジメさんは、私とはどういう関係でしたか？」

ハジメ「あ？あー。別に殆ど関わりは無かったぞ？ 精々事務連絡で話し掛けられた程度だ。友達でも何でもねえ。」

白野「そうでしたか。」

デビッドが呼吸困難でもがいている中、白野はハジメに過去の関係性を聞く。どうやら失われた記憶を集める為に、嘗ての知人にあれこれ聞いておきたい様だ。

白野「地球で暮らしていた頃の私は、どう言う人物でしたか？」

ハジメ「どうも何も、唯のお人好しだったぜ？ 俺にも嫌な顔一つしないで話し掛ける変人だった。」

白野「お人好しとは変人の事を指す言葉だったんですか。後学の為記録しておきます。」

ハジメ「待て、よせ。言葉の綾だ。真に受けるのはやめろ。」

ハジメの言葉を、腰につけた鞆から取り出したメモ帳に書こうとする白野を止めるハジメ。デビッドは顔が青くなり、もがく力も弱く

なっている。

ハジメ「はあ。ご馳走さん。言っておくが、今までの事とかこれからの事を報告するつもりはない。ここには仕事に來ただけで、終わればまた旅に出る。そこでお別れだ。後はお互い無関係といこう。さつきみたいに急に斬りかかれでもしたらひとたまりもないんでね。」

愛子「南雲君……。もう私達の元には戻らないつもりなんですか？」

ハジメ「ああ、戻るつもりはない。明朝、仕事に出て依頼を果たしたら、そのままここを出る」

白野「お待ち下さい、ハジメさん。」

食事を終えた後、南雲達三人は借りた部屋に戻ろうとする。しかし、それを白野が止める。デビッドは無事呼吸が止まり、顔が白くなっている。白野は手を離しハジメに体を向ける。

白野「まだ私が注文した料理が届いておりません。折角なので一緒に食って行かれませんか？」

ハジメ「何言ってるんだ？そんなもん自分で食い切れればいいだろ。もう食事は終わったし、これ以上食うつもりは——」

フォス「お待たせしました。ご注文頂いたガラスク十人前になります。」

ハジメの言葉を遮り、料理がテーブルに置かれる。それは——

ハジメ「……鍋？」

白野「鍋？いえ、ガラスクと言う煮物料理ですよ。」

土鍋一杯に、出汁がよく染み込んだ旬の野菜や魚介類等の具が敷き詰められた鍋だった。保温の為か、容器の下には簡易なコンロのようなものが置かれている。グツグツと食欲を掻き立てる様な香ばしい香りが辺りに広がる。

ハジメ「……つまり、食い物で話す時間を稼ぎたい訳だな？」

白野「はい、私も先生達も貴方にお聞きしたい事がありますので、食べている間でも構いませんから答えられる事だけでも離して頂けませんか？」

白野の魂胆が包み隠さず本人の口から暴露される。ストレートな要求にハジメは何度目かの溜息を吐く。

ハジメ「アホか、頭数は充分あるんだからお前らで食べばいいだろ。付き合う理由は「遠慮なさらずに」熱ツツツツツツフウ!」

溶岩の如く熱された大根擬きが、ハジメの口に突っ込まれる。限界を超えて鍛えられた耐久力も、口の中までは強くしてくれないようだ。

白野「これは所謂奢りと言うものです。無下にするのはよく無いですよ。」

ハジメ「人の口に熱い物を突っ込むのはもつと良くねえよ!?南極条約違反だろうが!!」

ユエ「ハジメ、今この料理に、悪魔の実を入れたら美味しく——」

シア「ならねえよスワツテロ。」

ユエ「ハイゴメンナサイ。」

常識人の様な至極まともな事を言う白野サイコに、何とか大根擬きを胃に入れた涙目のハジメがキレル。

店員が丹精込めて作った料理を闇鍋にしようとするユエ料理下手に、先程まで悲しみに暮れていたシアがキレル。

何とかハジメ達を留まらせる事に成功した後、白野は鍋をお椀に寄せて全員に配る。神殿騎士達はデビッドの介抱の為、全員が部屋に戻っていったのでここにはいない。

ハジメ「...それで、玖珠木は何があったんだ?記憶失ってるし髪が白くなってるし、イメチェンでもしたのか?」

白野「聞いた話によれば、ハジメさんが橋から落ちたのと同じ日に、私も行方不明になったそうです。皆様と合流したのは、その一月程後になります。」

ハジメ「つまり詳しい事は何も分からないままってところか。」

白野「そうなります。」

何だかんだ言いつつ白野の身に何があったか気になったのか、ハジメは渡された鍋料理を箸で摘みながら質問した。隣には先程迄の暗い雰囲気吹き飛ばす様に、ユエとシアの二人が美味しそうに鍋を

食べている。それを見たハジメは安心した様に僅かに目尻を緩める。二人の仲良さげな食事風景とハジメの見た目では分かりづらい和やかな雰囲気を見た白野は、カメラを取り出して三人を撮る。カシヤリと、シャッターを切る音が食卓に響く。

ハジメ「それ、カメラか？態々王国の錬成師に頼んで作ってもらったのか？」

白野「いえ、王国の雑貨屋で購入した物です。使い方の分からない骨董品として売られていたので、製作者は分かりません。」

ハジメ「そうすると、トータス製か？見せてもらっていいか？」

白野「どうぞ。」

錬成師の血が騒いだのか、渡されたカメラを若干目を輝かせながら弄る。そして、下に刻まれたオルクスの紋章に気付き驚くが、何事も無かった様に表情を戻す。一通り弄り終えて満足したのか、白野にカメラを返した時、彼女の視線がハジメの太腿に向く。

白野「貴方が太腿に付けているものは何ですか？」

ハジメ「あ？目敏いな、これは俺の武器だよ。お前もよく知ってるだろ。」

そう言つて、ハジメはホルスターから銃を引き抜き白野に見せる。この世界には存在しない筈の兵器に、生徒達は驚く。

淳史「それって…、もしかして銃か？」

優花「嘘でしょ…？何で南雲はそんなもの持ってんの…？」

白野「ジユウ…？」

ハジメ「あ、そうだ。玖珠木に返す物があるんだった。」

ハジメが地球の現代兵器を持っている事に生徒達は驚くが、本人は気にもせず、思い出した様に指輪を光らせ物を出す。

白野「これは？」

ハジメ「覚えてねえか。お前の持ち物だったんだが、お互い行方不明になった日に橋から落としてたみたいでな、俺が落ちた所で偶然見つけて、序でに直しといたんだよ。俺もこの銃作る時に色々参考にさせて貰った。」

それは「P95」自動装填式拳銃だった。傷が多く年季が入ってお



り、よく使い込まれていたのが見て取れる。

白野「これを私が持っていたのですか？初耳ですね。」

ハジメ「そりやそうだろ。当時ですら何で持ってたのか本人しか知らねえし、記憶の無い状態で伝えても混乱させるだけだ。」

白野はそれを受け取り、興味深そうに見回したり銃口を覗いたりする。そしてハジメの推測を聞き、視線を園部達生徒に向ける。

優花「・・・その日の事はどこまで聞いているの？」

白野「ダイスケさんがトラップを起動してしまい、生徒と騎士団全員をトラウムソルジャーとベヒモスが集う部屋に転移し、その際に起きた事故でハジメさんが橋から落ちたという事までは聞きました。」

昇「・・・そのトラウムソルジャーに襲われて皆が滅茶苦茶に戦ってた時に、玖珠木がその銃で魔物を攪乱して俺達を助けてくれたんだ。誰も玖珠木がそれを持ってなんてその時まで知らなかった。」

玉井「あの時の玖珠木、凄かったよな。射撃は上手いし、何時もの穏やかな雰囲気が無くなってさ、かなり冷たい目になってた。」

白野「そうでしたか。情報の提供ありがとうございます。ハジメさんも、私の持物を返して下さりありがとうございます。」

ハジメは気にするなと言う風に手を振る。と、話が途切れた所で鍋が空になった。話は終わったとばかりに、ハジメ達は立ち上がり軽い挨拶をして今度こそ部屋に戻っていく。場が静まった所で、愛子が白野に話し掛ける。

愛子「えと、玖珠木さんはどうしてここに？メルド団長から送られた手紙では、天野河君達と迷宮攻略をしていたそうですが？」

愛子はメルド団長からの便りで、白野の生還を耳にしていた。記憶を失い、地球での暮らしも含め何も覚えていないことも。その報告を聞いて直ぐにでもホルアドに向かいたがっていたが、丁度その時離れた町にいた為、今の今まで会うことが出来ずにいた。

白野「北山脈で探しているものがありまして、捜索の間泊まる場所を求めて、数日前にこの町に来たんです。」

愛子「私達が来る頃にはいらしてたんですね・・・。それでしたら、玖珠木さんは私達以外に黒い髪をした男の人を見かけませんでしたか

？」

白野「いいえ、その様な方は一人も見えておりません。それがどうかしたのですか？」

愛子は少し俯き、一人の男子生徒について話し始めた。清水幸利と言う、数日前に迄先生達と共に行動していた生徒が、ある日忽然と姿を眩ませた事を。先生や騎士達も八方手を尽くして情報を集めているが、近隣の村や町でもそれらしい人物を見かけたという情報が上がってきていない。北山脈に向かった白野なら何か知らないかと思いを確認したが、返事はこの通りだ。

愛子「清水君、一体どこに言ってしまったのでしょうか……。」

探す宛が無くなり、愛子が思い詰める様に下を向く。そんな彼女を生徒達が慰める中、あらぬ方向を見ていた白野が希望になり得る情報を話す。

白野「北の山脈辺りに、黒髪かは分かりませんが、人の姿がありました。」

愛子「……え？」

白野「もしかすると、皆様が探している方かもしれません。」

優花「え、本当なの!？」

優香の言葉に、白野は頷く。そして愛子の顔に明るさが戻っていく。それならば自分達が進むべき道筋は決まる。愛子達は急いで明日北山脈へ出発する為の段取りを始める。そこで、白野が淳史に話し掛けた。

白野「ところでアツシさん。このジュウという物はどうやって使うのですか？」

淳史「人に銃口向けないで!?!脅さなくても教えるから!?!」

## 7. 搜索

清水「クソツ、クソツ!!お前何逃してんだよ!!バレてたらどうするんだよ!!役立たずがツ!!」

北山脈にある、とある洞窟。その中で一人の男と、二人の魔人族がお互いの報告のために集まっていた。黒髪の男、清水は我儘な子供の様に癩癩を起こし、白野を取り逃がした魔人族に怒鳴り散らしていた。

レイス「案ずる事は無いだろう、清水殿。貴殿が諜報用に使役した鼠によれば、どうやら私達の事は町に知れ渡っていないのだろうか?何も問題はあまい。」

清水「そうじゃねえよツ、馬鹿が!!お前が連れてた魔物で捕まえられなかった事がマズインだよ!!アイツが畑山を連れて逃げられたら追えねえって事だろおが!!そんな事もわからねえのか!」

「豊穰の女神」の抹殺。それが、彼が魔人族に「勇者」として加わる為の条件だった。ここで愛子を始末し損ねて、次の機会迄に魔物の軍勢に対抗する準備をさせたら、それだけでも彼女を殺せる確率は減る。

?「尚更問題無いだろお?勇者サマが用意した6万の軍勢、しかも私が手を貸せば死に絶える事もない。これ程の戦力があれば、何が来ようが捻り潰せば良いだけの話だあ。」

喚き散らす清水に、もう一人の魔人族がどうでも良い様に語り掛ける。それでも清水の怒りは収まり切らず、苛立った様子を隠しめせずに男を睨みつける。思わず手が出そうになるが、意味が無いと考え直し踏み止まる。彼の力と清水の軍勢はかなり相性が良い事は頭では理解しているが、正直言ってその男の煽る様な態度は気に食わなかった。

清水「……お前、つい最近大軍引き連れてた癖にアイツに負けたんだろうが。勝てる見込みあるのかよ?」

?「勿論あるとも。この間は不意を突かされただけだしねえ。それに、この指輪さえあれば、私は無敵さあ……。」

そう言いながら魔族の男は、左手の人差し指につけた指輪を愛おしそうに撫でながら、継ぎ接ぎだらけの顔に笑みを浮かべた。

.....

愛子「……という訳なので、厚かましいのは充分承知ですが、南雲君達と同行させてくれませんか？」

ハジメ「却下だ。行きたきゃ勝手に行けばいい。が、一緒に断る」翌日の夜明け。ハジメ達は依頼を受けた行方不明者の搜索の為、北門に向かっていた。しかし、そこには既に愛子と生徒達七名が待ち伏せする様に佇んでいた。要約すると、ハジメ達が仕事で北山脈に向かう事を聞いていた愛子は、清水幸利の搜索と白野の探し物の目的地が同じ事を理由に、彼等について行きたいと言い出したのだ。だがその願いはあっさり断られる。

愛子「な、なぜですか？」

ハジメ「単純に足の速さが違う。先生達に合わせてチンタラ進んでなんていられないんだ。」

優花「ちよつと、そんな言い方ないでしょ？ 南雲が私達のことよく思っていないからって、愛ちゃん先生にまで当たらないですよ。」

愛子を庇う園部の発言に、ハジメは呆れた顔を向けた後、面倒臭そうに指輪を光らせ、トータスには存在しない二輪がついた馬、魔力駆動二輪を取り出す。

それは地球で言う所の大型バイクだった。愛子達は突然虚空から現れた乗物に目を剥く。

ハジメ「理解したか？俺はお前等の事は心底どうでもいい。だから、八つ当たりをする理由もない。そのままの意味で、移動速度が違うと言っているんだ。」

白野「生気を感じられない奇妙な馬ですね。まるで道具の様です。」昇「玖珠木さん、それ馬じゃないし道具そのものだから。バイクだから。」

白野「馬逝苦？辛そうな名前ですね。」

昇「いや何をどう変換したらそうなるんだよ!?!」

何やら外野が騒いでいるが、ハジメはそれを無視してバイクに跨り出発しようとする。しかし、バイクを観察していた白野に引き止められる。

白野「お待ち下さい、ハジメさん。」

ハジメ「何だ玖珠木？今度はどんな素敵な物を口に突っ込むつもりだ？」

白野「いえ、今はその様な事はしません。どうしてもハジメさんにお伝えしたい事があります。貴方が探している行方不明者の居場所についてです。」

昨夜の出来事を若干根に持っているのか、皮肉を込めて返事をするハジメだったが、白野の言葉に疑問の視線を向ける。白野は北山脈の方向に指を指して説明する。

白野「私が今指を指している方向に人影が見えます。もしかすると貴方が探している人かもしれません。私ならそこまでの案内も可能ですし、移動手段さえどうにかすれば先生方を同行させても問題は無い筈です。」

ハジメ「アホか、何をどうしたら山脈越えて人影が見えるんだよ。信用出来るか。」

白野「遠視魔法で確認したんです。それと、確かに昨日会ったばかりの私では信用たり得ないでしょう。ですが、私を信用した先生方ならば違うのでは無いですか？」

その言葉に、ハジメはこんな妄言を信じるのかと胡乱げな視線を愛子達に向ける。しかし愛子は怖気付かず、ハジメに真っ直ぐ決意の宿った瞳を向け、尚も同行を申し出る。

空回りこそすれど、彼女の行動力は本物だ。ここで誤魔化したり、逃げたりすれば、それこそ護衛騎士達も使って大々的に搜索するかもしれない。それに、肝心の探し人を宛てもなく探し回って時間を掛ける訳にはいかない。探索用のアーティファクトもあるが、目星が付いているならばそこに向かった方が生存の可能性も上がる。

ハジメ「…わかった。同行を許そう。だが玖珠木、もし情報が間違っていて手遅れにでもなったら、責任は取ってもらおうからな。」

白野「はい。」

親衛隊と白野の同行が決まり、仕方なくハジメはバイクをしまうと、代わりに車型のアーティファクトを取り出した。しかし、ここで人数が増えた事による問題が起きた。

ハジメ「乗れない奴は荷台な……あ、荷台使っても定員オーバーだな。一人余る。」

愛子「えっと、それではさっきのバイクを使うのはどうですか？」

愛子の提案に頷き、シアにバイクを運転させて何人か分けるかと考えるが、もう一つ提案が出て来た。

白野「それでしたら、私は走って皆様を追いかけますよ。」

ハジメ「……あのなあ、こいつは馬よりも早く走るんだぞ？走って追いかけられる訳無いだろ。」

白野「身体強化魔法で脚力を増強させれば、問題は無いでしょう。」ふと、愛子達が用意していた馬を見る。数えると一匹、生徒達の数と合わない。まさかとは思いつつ白野に質問する。

ハジメ「……お前、ホルアドからココまでどうやって来た？」

白野「走って来ました。」

.....

前方に山脈地帯を見据えて真っ直ぐに伸びた道を、魔力駆動四輪が走る。道は街道とは比べる迄もない程酷い道ではあるが、大抵の衝撃は車の装置によって無くなる為、車内は勿論、車体後部についている荷台に乗っている男子生徒も特に不自由さは感じていないようだ。

不自由は感じていないが、目の前の光景に途轍もない違和感を感じていた。

ハジメ「……なあ、シア。身体強化ってあんなに速く走れるものなのか？」

シア「うーん、出来ないことも無いんですけど、あんな風にずっと走り続けるのはちょっと厳しいですね。」

ハジメ「そうか、出来ないことも無いのか……。」

白野だ。彼女は今、案内の為魔力駆動四輪の前方を先導して走って

いる。鎧を着て、武器を背負ったまま、車と同じ速さで、少しも速度を緩めず、何処その目隠し型ゴーグルをつけた戦闘アンドロイドの様な綺麗なフォームで。

優花「何であんなに速く走れるのよ……。」

ユエ「…… シアと同じバグキャラ？」

ハジメ「怖い事を言わないでくれ、ユエ。そんなのが何人もいてたまるか。」

シア「お二人共近くにいる人に向かって好き放題言い過ぎじゃないですか!？」

その異様な光景に各々が小声で話していると、白野が急に速度を緩めて運転席の横まで来て並走する。話があるのか窓を軽く叩いているので、ハジメはドアを操作し窓を開ける。

白野「少し先の麓からは道が無くなるので、そこからは徒歩で移動しましょう。引き続き案内します。」

程無くして、白野が言った通り一行は山の麓に到着した。そこには黄色や紅色、色取り取りの紅葉を織り成す山脈が広がっていた。生徒達が故郷を思い出す様な風景に息を呑む中、ハジメは魔力駆動四輪を指輪にしまい、白野に話し掛ける。

ハジメ「それで？お前が見えてるって言う人影は何処にあるんだ？」

白野「少々お待ち下さい。地形を確認して来ます。」

そう言うと、白野はその場から高く飛び上がり、山頂を越える程の高さまで飛んでいく。高飛び選手顔負けの高さを跳んだ彼女に皆啞然とするが、直ぐに白野が降りて来る。このままでは地面に衝突すると生徒達が慌てるが、彼女は風も起こさずに、羽毛が落ちて来たかのようにゆっくり着地する。

白野「お待たせ致しました。山を登って行った先に川があります。上流に行くと滝があるのですが、そこに目標の人物がいるそうです。」

ユエ「…… 今のは、重力魔法？」

白野「はい、そうです。」

ハジメ「マジか？いつの間にライセン迷宮なんて攻略したんだ？あ

んなクソうざったい迷宮、よくクリア出来たな。」

白野「……？いえ、覚えている限りではオルクス迷宮以外の迷宮には行っておりません。」

シア「え？」

白野の発言に三人が驚く。神代魔法は迷宮を攻略し踏破した者にはか習得出来無い。なのに彼女は、迷宮にも行っていないにも関わらずその内の一つ、“重力魔法”を使っている。

ハジメ「確か玖珠木は、覚えちゃいないが一ヶ月くらいの間、魔人族に捕まってたんだよな？その時に何かされたんじゃないか？」

ユエ「……何か思い出せる事は無い？神代魔法の習得法が他にあるなら聞いておきたい。」

白野「思い出せる物はありません。ただ……。」

白野が珍しく言い淀む。視線は地面に向き、俯いている。

ユエ「……ただ？」

白野「……ただ、何か思い出してはいけない事をされていた様な、そんな覚えがあるんです。それだけは確かです。」

ふと、彼女の左手を見ると、素手なら血が出ている程の強さで手が握り締められていた。まるで、何かを堪える様に。何かに耐えるかの様に。思考に集中しているのか、本人はそれに気づいていない。

ハジメ「……そうか、まあどうやって魔法を知ったか覚えて無いなら、聞いても仕方ないだろ。捜索に戻るぞ。案内してくれ。」

白野「わかりました。」

ハジメは話を戻し、白野に先行する様に促す。一行は白野の案内に従い、山の中へと入って行った。

.....

山を登り始めて半日後、彼等は件の滝壺に到着していた。休憩の間はとっていたが、殆ど全力疾走で付いて来たからか、ハジメ達と白野以外のメンバーは体力を使い果たし、息も絶え絶えになり四つん這いになっていた。

シア「ここが、ハクノさんが言っていた滝壺ですか？立派な滝で



すね〜！」

白野「はい。探していた人影はこの滝の裏にいます。」

ハジメ「みたいだな。気配感知に引つ掛かった。デタラメを言つてた訳じゃ無かったんだな。」

白野「貴方に嘘をつく理由がありません。」

ハジメ「そうかい。ユエ、頼む。」

ユエ「……ん。『波城』『風壁』」

ユエが右手を振り払い魔法を唱えると、圧縮された水の壁が滝を二つに割り、水流が風の防壁により遮られる。すると滝の奥に洞窟が現れた。どうやら件の人物はここで何かから逃げのびていた様だ。二つの属性魔法を無詠唱で行使する少女に生徒達は啞然とするが、ハジメ達が滝に入つて行く姿を見て慌てて追い掛ける。

洞窟の奥には、齢二十前後の男性が一人横倒しになっていた。目立った外傷は無く衰弱している様子では無いが、顔色が悪く青白くなっている。

愛子「清水君、ではありませんね……。」

期待していた人物とは違い、愛子が少し気落ちする。すぐに気を取り直し容体を確認しようと動くが、先に白野が青年に近付き、脈を確認する為に籠手を外し首筋に手を当てる。

? 「うひい！冷たい!!」

白野「あ、ごめんなさい。」

が、急に首に冷たいものを当てられたせいで、青年は飛び起き白野から後退る。状況が掴めず混乱している彼に、ハジメが名前を尋ねる。

ハジメ「お前が、ウィル・クデタか？ クデタ伯爵家三男の」

? 「えっ、えっ!? 君達は一体、どうしてここに……?」

ハジメ「質問に答えろ。答え以外の言葉を話す度に、その鎧を着た奴にシメてもらうからな。お前は、ウィル・クデタか?」

ウィル「えっと、うわっ、はい！ そうです！ 私がウィル・クデタです！ はい！」

青年が言葉に詰まっていると、ハジメの眼が剣呑な光を帯び、白野

の右手が彼の首に伸びていく。それに慌てた青年が自らの名を名乗る。どうやら見つけたのはハジメが探していた人のようだ。

ハジメ「そうか。俺はハジメだ。南雲ハジメ。フューレンのギルド支部長イルワ・チャングからの依頼で捜索に来た。生きていてよかった」

ウイル「イルワさんが!? そうですか。あの人が……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕なのですね。」

尊敬の眼差しと共に礼を言うウイル。それから各人の自己紹介と、何があったのかをウイルから聞いた。

ウイル含む冒険者達は、五合目の辺りで魔物に遭遇たらしい。逃げながら応戦していたが数は次々と増えて行き、そうこうしている内にこの滝の上流に差し掛かかり魔物に包囲された。抜け出す際に二人の冒険者が犠牲になり、追い立てられながらも走り続けるが、その先に新手が現れた。

巨大な漆黒の竜だった。竜はウイル達に向かってブレスを放ち、それによって一人が消しとばされた。その攻撃で吹き飛ばされたウイルは、この滝壺に流され、この洞窟にたどり着いたようだ。

ウイル「わ、わだじはさいでいだ。うう、皆死んでしまったのに、何の役にもただない、ひつく、わたじだけ生き残つて……それを、ぐす……喜んで……わたじはっ!」

話している内に、感情が高ぶったようですすり泣きを始めた。悲観、屈辱、劣等感、安堵、様々な感情が駆け巡り涙となって溢れ出す。一同はどう声を掛けたらいいか見当がつかず、悲痛そうな表情をウイルに向ける。すると、ハジメが歩き出し、ウイルの胸倉を掴み吊り上げる。

ハジメ「生きたいと願うことの何が悪い? 生き残つたことを喜んで何が悪い? その願いも感情も当然にして自然にして必然だ。お前は人間として、極めて正しい。」

ウイル「だ、だが……私は……。」

ハジメ「それでも、死んだ奴らのことが気になるなら……生き続け

ろ。これから先も足掻いて足掻いて死ぬ気で生き続ける。そうすりや、いつかは……今日、生き残った意味があつたつて、そう思える日が来るだろう。」

ウイル「……生き続ける。」

会話が終わると、ハジメはウイルを放り出し、気恥ずかしくなったのか、或いは自己嫌悪に陥ったのか、軽く頭を振るい外方を向く。慰める為かユエとシアが彼に近付くが、白野から警告が上がった。

白野「皆様、ここから離脱しましょう。敵が来た様です。」

ハジメ「敵？こんな洞窟の奥に何の用だ？」

白野「申し訳ありません。どうやら先刻私が搜索の為に跳んだ時に、敵にも気付かれたそうです。真っ直ぐこちらに向かっています。」敵を見ているのか、白野は洞窟の入口に目を向けながら荷物をまとめ、逃げる準備をする。一同も慌てて用意を済ませ、入口に駆け出す。

ハジメ「敵の数と種類は？」

白野「竜人が一人だけです。他はいませんが、全員が逃げるのは難しそうです。」

ハジメ「了解……。待て、今竜人つて言ったか？」

ハジメが白野に質問するが、答えが出る前に入口に辿り着く、そして――

――グウルルルル

空に佇む竜がいた。ウイルの話に出てきた黒い竜が、獲物を待ち構える様に飛んでいた。

その黒竜はウイルと白野の姿を確認すると、その鋭い黄金の瞳を向ける。そして、硬直する人間達を前に、おもむろに頭部を持ち上げ仰け反ると、鋭い牙の並ぶ顎門を開き、口に魔力を集束しだした。

キュウワアアア!!

不思議な音色が昼下がりの山間に響き渡る。ハジメの脳裏に、川の一部と冒険者を消し飛ばしたという話が脳裏に浮かぶ。

ハジメ「ッ！退避しろ！」

ハジメの警告で、ユエとシアはその場から跳びのき退避する。だが、他のメンバーは恐怖で体が動かず逃げ遅れる。ハジメは急ぎ愛子

達を庇おうとするが間に合わない。  
そして、黒い魔力の奔流が、彼等に放たれた。

## 8. 竜人

黒竜のブレスが、動けずにいる生徒達に向かう。その奔流と彼等の間に割って入る者がいた。

白野だ。彼女は左腕にある盾を展開してブレスを受け止める。その攻撃と比べると余りにも小さいそれは、見た目に反して完全にブレスを受け止め、圧力や高熱すらも吸収している。

余波だけで地面が融解し人が消し飛ぶ程の威力。普通なら、あの程度の装甲で防げるものではない。ハジメが疑問に思う中、白野が構えている盾の裏側に嵌め込んである青白く輝く結晶が見えた。

ハジメ（まさか、神結晶か？）

それは嘗て、奈落の底で散々お世話になった、今もハジメの右目に使われている神結晶だった。何故見つけ出す事すら困難な幻の結晶を白野が持っているのか疑問が残るが、それを確かめる時間は無い。彼女が愛子達を守っている内に手を打たなければならぬ。ハジメはドンナー・シユラークの銃口を黒竜に向け撃つ。

——グルウオオオ!!

弾丸は竜の頭に直撃し、放たれ続けていたブレスを中断させ巨体を後方に吹き飛ばす。

ユエ「禍天」

シア「止めですう〜!」

竜がすぐ様起き上がろうとするが、重力魔法で作られた渦巻く球体に押し潰され、地面に這い蹲る。そこに撃発を利用して上空から更に加速しながら、シアがドリユツケンを頭に向けて振り下ろす。

しかし、黒竜は圧倒的な膂力を持って最小限の動きで回避し、ユエに向かって火炎弾を放ち重力魔法を中断させる。更にその場で高速で一回転し、遠心力の加わった大質量の尾をシアに叩き付けた。

シア「あつぐう!!」

間一髪、シアはドリユツケンを盾にしつつ自ら跳ぶことで衝撃を殺すことに成功するが、大きく吹き飛ばされ、木々の向こう側へと消えていった。

体勢を戻した黒竜は、ハジメを無視して生徒達の前に立っている白野を睨みつけ、彼女に向かって火炎弾を撃ち放った。

白野「“天絶”」

白野は焦りもせずに障壁を張り、火炎弾を霧散させ全て防ぐ。そして“天絶”を一部解き障壁を潜り抜けると、その場から一飛びで黒竜に近付き頭に向かって回し蹴りを放つ。

その攻撃を、黒竜は翼をはためかせて後方に飛び回避すると、白野に向けて火炎弾を連射する。白野は重力魔法を使い視線外に落ちる事でそれを回避し、地面に降りる。

グルアアア!!

すると黒竜は翼を止めて質量に任せ落下しながら、鉄すら容易く切り裂きそうな鋭い爪を白野に振り下ろす。白野も身体強化を使い大きく跳び退く事で回避するが、黒竜は執拗に彼女に攻撃を続ける。ハジメも銃弾を当て続けてはいるが、鱗が薄く碎けるだけでこちらには見向きもしない。

ハジメ「玖珠木！そいつの狙いはお前だ！回避に専念しろ！」

白野「わかりました。」

白野は近くの大きな岩を掴み、重力魔法で加速させながら黒竜に投げる。頭に直撃した黒竜は一瞬怯み、その隙に白野に距離を取られる。それでも尚火炎弾を放ち白野を追撃するが、別の方向から邪魔が入る。

ハジメ「ここまで無視されたのは初めてだ……なら、どうあっても無視できないようにしてやるよ！」

大型の狙撃銃、シユラーゲンを取り出したハジメは、“纏雷”による充填を終えると黒竜の頭部に撃ち放つ。シユタル鉱石製フルメタルジャケットの弾丸が黒竜の後頭部に当たるが、頭が大きく前に傾くだけで致命傷にはならなかった。だが、目論見通り黒竜は漸くハジメを脅威と見做したのか、視線をハジメに向け口元に魔力を収束させる。

しかし再びブレスが放たれる前に、白野が側面から黒竜に突っ込み、先程のブレスにより溜め込まれた魔力を衝撃波に変換し黒竜の右

膝にぶつける。

——グルアアア!!

それにより体幹を崩された黒竜は横転し仰向けになり、口元に溜めていた魔力も消える。その隙にハジメは“空力”飛び上がり、黒竜の腹に向けて“振動粉碎”を発動させた義手を打ち込んだ。腹に亀裂が走り、内臓を痛めたのか口から盛大に血が吹き出る。

回避の為に、黒竜は片翼に魔力を込め暴風を巻き起こし、その場で仰向け状態から強引に元の体勢に戻る。“空力”で空中に逃げたハジメを撃墜しようとするが、その前に腹の下で彼が置いて行った手榴弾が爆発し、爆風で黒竜が浮かび上がる。

——クウワアアア!!

同じ場所への更なる衝撃に、悲鳴も上げられずぐもった唸り声を上げることしか出来ない。耐えるように頭を垂れて蹲る黒竜の口元からは血が流れ出している。

ハジメ「あ？何だありやあ？」

しかし、ハジメ達の追撃はここまでだった。突如、日光とは違う光が降り注ぎ黒竜を照らす。すると黒竜が負っていた傷が瞬く間に癒え、竜の瞳に力が宿る。戦う前より威圧感が増し、心なしか一回り大きくなった様に見える。

ハジメは“空力”を解き地面に降りながら、シユラーゲンに弾を装填する。すると白野が彼に駆け寄り、目の前の現象の詳細を語る。

白野「あれは、再生魔法と昇華魔法ですね。何者かが傷を癒し、竜の力を増強させたようです。」

ハジメ「神代魔法を使える奴がいるのか？チツ、やってくれるな。下手人は何処にいる？」

白野「申し訳ありません。搜索はしているのですが、それらしき人物は見当たりません。」

——ゴオアアア!!

黒竜の咆哮と共に、全方位に向けて凄絶な爆風が発生する。その竜

巻の如き暴風により二人が動けずにいると、黒竜は一瞬で口元に莫大な魔力を収束させ、白野に向かってブレスを放った。

二人は即座に横に跳ぶ事で魔力の奔流を紙一重で回避し、直ぐに体勢を立て直す。しかし、黒竜は攻撃を外したと知ると砲撃を止め、白野に向かって大量の火炎弾を放つ。その数は数百に昇り、彼女の頭上を炎で埋め尽くし辺りを紅く染め上げる。

白野は黒竜に向かって高速で走り抜けながらそれらを避ける。獲物を捉え損ねた火球が川に撃ち込まれ、水が蒸発し周囲が白い水蒸気で覆い尽くされる。白野は尚も走り続け黒竜の足元に到達すると、ステイレットを竜の足に突き刺し動きを止めようとする。だが、鱗を貫き刺さったものの、元来の質量と昇華された臂力により容易く砕かれ、目論見は失敗に終わる。

ハジメ「コイツならどうだ？衝撃までは消せねえだろ。」

水蒸気で作られた霧の中、ハジメは宝物庫からロケット&ミサイルランチャー・オルカンを取り出し、ロケット弾を撃ち込む。しかし、突如竜は地面に手を突き刺し、振り上げる。すると巻き上げられた大量の石礫が霧を吹き飛ばしながらハジメに飛来し、まだ空中を飛んでいる弾頭も障害物に当たり、道半ばで爆発する。

ハジメは急ぎ大楯を取り出し岩石を防ぐと、シユラーゲンを構え、全力の“纏雷”で加速させた銃弾を撃つ。弾頭は再び竜の頭部に当たるが、容易く弾かれ相手はびくともしない。

ハジメ「クソツ、こうなると効きそうなのはパイルバンカー位しか無えな……。」

シユラーゲンと大楯を仕舞いパイルバンカーを取り出す。そこに白野といつの間にか戻って来ていたシアが集まる。

白野「効き目のありそうなものがあるんですか？」

ハジメ「まあな。だが奴に張り付かねえと当てられない。」

白野「それでしたら、私が動きを止めます。貴方は準備をしておいて下さい。」

ハジメ「方法はあるのか？ありやあそう簡単には止まらねえぞ。」

白野「幾つか宛はあります。」



シア「私も手伝いますよ。やられっぱなしでは終われませんからね！」

ハジメ「決まりだな。シア、奴の足を狙え。体勢を崩せばコツチのもんだ。」

シア「了解です！」

打ち合わせを終え、三人は動き出す。

相手が地面にいる今、狙いは後ろ足だ。シアは黒竜に向かって地を滑る様に跳んで行き、ドリユツケンに魔力を込めて振り被る。すると黒竜は翼をはためかせて後ろに飛びシアの攻撃を避ける、そして無数の火炎弾を白野とハジメに向けて放とうとする。

ユエ「禍天”！」

白野「禍天”！」

黒竜の頭上に二人の重力魔法が重なり大きく膨れ上がる。増強された魔法は黒竜を捉え、再び地面に叩きつけ動きを封じる。

シア「もらいました！」

何とか着地した黒竜だったが、シアがその場で回転しドリユツケンを後ろ足に投擲する。遠心力に加え、重力魔法を付与された重量物が片足に当たり、それを突き抜けもう一方の足も打ち抜き飛んでいく。黒竜はあっさり体勢を崩し仰向けに倒れた。

白野は大きく飛び上がり、黒竜の頭上に行く。そして両腕に計4本のステイレットを作り、魔力を注ぎ込み効力を上げる。推定5mまで伸びたそれを大きく振り被り、黒竜に投げ付け四肢を穿つ。

ハジメ「存分に食らって逝け。」

ハジメが黒竜の首元に飛び付き、パイルバンカーのアームを喉に組み付け固定する。内蔵された4トンの杭が“纏雷”により激しく回転し、鱗殻を貫かんと加速し射出される。

ゴオガガガン!!

ハジメ「ツツつウ!？」

しかし、鱗を僅かに削る程度に終わり、射出された杭は跳ね返されパイルバンカーが砕け散る。

——グウガアアアア!!

そして、動きを封じていた鎧通しが砕け散り、黒竜がうつ伏せになり体勢を戻す。その前にハジメは飛び退き地面に降りるが、視線を戻した瞬間彼の目の前に黒竜の顎が現れる。既に魔力が溜まり切っており、直ぐにでもハジメを焼却せんと高火力のブレスが放たれるだろう。

次の瞬間、白野が黒竜の頭に駆け寄り、右目を切り裂いた。

——グウウオオオオオ!

痛みに仰け反り、ブレスが霧散する。時間を稼げたハジメはその場から退避出来たが、白野はそうはいかなかった。

黒竜は直ぐに白野に向かって腕を振り上げ彼女を捕らえる。白野も回避しようとしたが、避け切れず体を掴まれ動きを封じられる。黒竜は白野を頭上に持ち上げ、地面に向かって勢いよく振り下ろし叩き付けた。

シア「ハクノさん!!」

白野が川に投げ付けられ、水飛沫が上がる。重力に従って跳ねた水が落ち、白野の姿が見えて来る。そこには四肢があらゆる方向に曲がり、鎧が大きく凹んだ騎士の姿があった。

最早既に事切れている様に見えたが、辛うじて息があるようで、無理矢理体を動かそうとしているのか身を振っている。

黒竜は生きていると判断したのか、容赦無く腕を振り上げる。ハジメ達も応戦しようとするが、無数の火球がばら撒かれ、それに気を取られ対応出来無い。そして、黒竜の鋭利な爪が白野に振り下ろされた。

拳が白野に叩き付けられた瞬間、彼女を起点に川の水が巻き上がり凍り付く。竜の上半身が氷に覆われ、動きを封じた。

シア「うえ!? な、何ですか!？」

ハジメ「これは、玖珠木がやったのか?」

黒竜は拳を振り下ろした姿勢で固まっている。何とか動き出そうと躓いているようで、段々と氷山にヒビが入っていく。

ユエ「っ!“凍樞”!」

上級魔法が重ねてかけられ、黒竜が更に氷に覆われて行く。する

と、上空に飛ばされたパイルバンカー用の杭がハジメと黒竜の間に突き立った。ハジメは、地面に深々と突き刺さる杭を引き抜くと肩に担ぐ。

ハジメ「今しか無えな。」

黒竜の尻尾の付け根の前に陣取り、槍投げの選手のような構えを取る。

ハジメ「ケツから死ね、駄竜が。」

そして、パイルバンカーの杭が勢いよく突き刺さった。

「アッーッーッーなのじゃあああッーッーッー!!!」

目を見開いた黒竜がDMの産声悲痛な絶叫を上げて目を覚ました。

.....

愛子「玖珠木さん!!」

戦闘が終わったと判断したのか、愛子が竜に向かって駆け出す。同時に、激戦に魅入っていた生徒達も気を取り直し、慌てて愛子を追いかける。彼等を護衛していたユエも、竜が喋り出した事に興味を持った為、追従する。

ハジメ「お前……まさか、本当に竜人族なのか?」

「む? いかにも。妾は誇り高き竜人族の一人じゃ。偉いんじやぞ? 凄いんじやぞ? だからの、いい加減お尻のそれ抜いて欲しいんじやが……そろそろ魔力が切れそうなのじゃ。この状態で元に戻ったら……大変なことになるのじゃ……妾のお尻が。あと、氷も溶かしてはくれぬか? 妾、寒いのは苦手での…… このままでは凍え死にしていまいそうなのじゃ」

そこには白野が言っていた情報通りの、意外な事実には呆然とするハジメとシア、そして自らを竜人族と名乗る竜の姿があった。拳を振り抜いた状態で氷に覆われ、尻に杭が刺さった状態で固まっている。

愛子「南雲君! 氷を溶かしてくれませんか!? 玖珠木さんが!」

ハジメは愛子の言葉で、白野が今も冰山の下にいる事を思い出す。黒竜がまた暴れだす可能性もある為本来なら拘束は解きたくないが、ここまで来る時にも世話になった義理もある為愛子の意見を承諾す

る。

ハジメ「……………仕方ないか。ユエ、頼めるか？」

ユエ「……………ん。」

ユエが炎系統魔法で氷を溶かす。氷が無くなり拘束が解けた竜は、体に力が入らないのか巨体がぐらつき、白野が潰れないようにそのまま地面に倒れた。

「はああん！」

倒れた衝撃が尻にいったのか、黒竜が情けない喘ぎ声を上げる。

障害物が無くなり、愛子達は急ぎ黒竜の拳があつた辺りに駆け寄る。そして――

愛子「……………玖珠木……………さん……………？」

優花「……………嘘でしょ……………そんな……………。」

――そこには、頭が無くなり、胴体がひしゃげ、腹の辺りで二つに裂かれた、騎士甲冑姿の白野があつた。

？

## 9. 化物

愛子達は目の前のものが理解出来なかった。同級生が一人、惨たらしい死体に変わり果てた事もそうだが、それだけでは無かった。

「はあああん！ゆ、ゆつくり頼むのじゃ。まだ慣れておらつあふうん！」

四肢は砕け、頭が吹き飛び、体が裂かれているのに、血が一滴も流れていない。それどころか、露わになった首や胴体の断面には、肉は愚か臓器も骨も見当たらない。唯々黒い霧が、白野の体内を埋め尽くしていた。

その理解出来無い異物に生徒達が呆然としてみると、その黒い霧が蠢きだし、断面から溢れ出た。愛子達は動き出した霧に驚き、思わず後ろに下がり武器を構えた。

「やつ、激しいのじゃー！こんな、ああんっ！きちやうう、何かきちやうのじゃー！」

霧は別れた両方の体から湧き出ると、お互いが絡まり合い結合した後、ゆつくりと半身同士を動かし始めた。同時に霧が頭を形作り、曲がった四肢は音も無く元の状態に戻り、凹んだ鎧は内側から風船の様に膨れ上がり、強引に修復される。

「あひいいー！！す、すごいのじゃ……優しくつてお願いしたのに、容赦のかけらもなかったのじゃ……こんなの初めて……」

やがて、首から湧き出た霧が白野の頭に変化し、胴体が繋がり怪我が全て治る。そして目を覚ましたのか、白野は虚な表情のままゆつくり体を起こす。

明人「化物……っ」

思わず声が出たのだろう。白野が声に反応しそちらに顔を向ける。そこには、怯えた様子で武器を構え、自分に向かって武器を構える生徒達がいた。

白野「……？どうかしましたか？」

自分の身に何があったのか気付いていないのか、彼女はまるで何事も無かったかの様に、先程迄と変わらない声音で生徒達に話しかけ

る。

愛子「… 玖珠木さん。」

白野「はい。」

愛子は怯えているのか青ざめた顔のまま、恐怖に震えた声音で——  
愛子「一旦休みましょう…。先生は頭に入って来る情報が多過ぎてパニックしそうです…。」

白野「わかりました。」

休憩を申し出た。異様な光景と脳に直接響く喘ぎ声で頭がこんがらがったようだ。その案に生徒達も疲れた表情で同意する。

白野は着ている鎧が壊れている事に気付き、錬成を使い元の状態に戻し、落としていた剣を拾い鞘に入れる。

ハジメ「そっちは終わったか？」

優花「… 南雲、視界に入らなかったから聞きたいんだけど、今の変な声って何？」

ハジメ「あー、杭が刺さったままだと死ぬから抜いて欲しいって煩いから、さつき迄引っこ抜いてたんだよ。その時にソイツが喚いていただけだ。」

そう言うとハジメは、親指で背後にいる着物の様な服を着た女性を指差す。

腰まで伸ばした黒い髪に、金色の目をした女性がいた。どうやらこの女性が先程まで戦っていた竜の正体のようだ。

愛子「えっと、そちらがさつきまで竜になってたと言う…。」

ティオ「そうじゃ。妾の名はティオ・クラルス。最後の竜人族クラルス族の一人じゃ。先刻は面倒を掛けてしまい、本当に申し訳無かった。」

竜人族の女、ティオはそう言って深々と頭を下げる。

白野「この方の処遇はどの様に致しますか？」

ハジメ「一先ずはコイツから情報を引き出す。話はそれからだ。」

白野「わかりました。ティオさん、怪我されていますが大丈夫ですか？」

ティオは竜に変身していた間に負った傷が反映されている様で、白

野の攻撃により右目が切り裂かれ、血が流れている。

ティオ「構わんよ。寧ろ心地良い……と言いたいところじゃが、ちとこの傷は洒落にならん。まあ、治る物でもあるまいし、これも無様に操られた妾の戒めとしておこう。」

白野「いえ、私がやった事ですし、治療も可能ですので宜しければ治しますよ。」

ティオ「む？欠損を直す様な治癒魔法があつたかの？出来るのであれば有難いが……。」

白野「“絶象”」

白野が再生魔法を唱え、ティオの右目が元に戻り、血が止まる。治癒魔法は愚か、神水でも治せない欠損を容易く修復した魔法に、ハジメを含め全員が驚く。

白野「目に異常はありませんか？」

ティオ「う、うむ、問題無い。寛大な待遇に感謝する、騎士殿。失礼は承知じゃが、一体その魔法は何なのじゃ？」

白野「再生魔法と呼ばれるものです。先程の戦闘の際に、貴女にも掛けられていた魔法ですね。」

ハジメ「そういや、他の神代魔法らしき物もコイツに使われてたな。おい、駄竜。誰がそれを使ったのか、きりきり吐け。」

ティオ「んっ、んっ！そうじゃの、何故妾が汝らを襲つたのかも含めて、順番に話そう。」

ハジメの暴言に何故か頬を染め、呼吸を荒げながらも、ティオは事情の説明を始めた。

.....

彼女の話を要約すると、異世界からの来訪者、勇者達について調べ、る為に遠く離れた里から来たティオは、休息をと思いいこの山脈に身を隠し休んでいた所を、黒いローブを羽織った人間族の男に洗脳等の闇系統魔法を掛けられてしまった。

その後、彼女は目撃者を殺すべく、山脈へ調査に来たウィル達と白野を追いかけていた。そしてハジメ達に遭遇し、後の事はご覧の有様

だ。

ウイル「……ふざけるな。」

話が終わると、ウイルが怒りを押し殺した様な声音で喋り出した。拳を握り締め、瞳には激しい怒りが宿っている。

ウイル「……操られていたから：ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを！ 殺したのは仕方ないとも言うつもりかっ！ 大体、今の話だって、本当かどうかなんてわからないだろう！ 大方、死にたくなくて適当にでっち上げたに決まってる！」

ティオ「……今話したのは真実じゃ。竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない。」

ティオの言葉に、怒りが収まらないのか尚も言い募ろうとするが、横から口を挟まれた。

ユエ「……きつと、嘘じゃない。」

ウイル「っ、一体何の根拠があつてそんな事を……。」

ユエ「……竜人族は高潔で清廉。彼女は『己の誇りにかけて』と言った。なら、きつと嘘じゃない。それに……嘘つきの目がどういうものか私はよく知っている」

ユエはそう言い、目線をずらして過去を思い出す様に遠くを見る。嘘をつき続けられた事でもあつたのか、その表情は少し暗くなっている。

ウイル「……それでも、殺した事に変わりないじゃないですか……どうしようもなかったってわかつてはいますけど……それでもっ！ ゲイルさんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって……彼らの無念はどうすれば……」

白野「……それでは、殺しますか？」

ウイル「え？」

白野「宜しければ此方をどうぞ。」

白野は背負っていた剣を引き抜き、ウイルに持ち手を向け差し出す。急な提案に戸惑いながら、流されるままに剣を握る。

ウイル「!？」



剣を手にとった瞬間、白野に腕を引かれる。剣の切っ先が、テイオの首に持っていたいかれた。

ウイル「な、何を…!?」

白野「後は、このまま剣を押しせばテイオさんは死にます。首から血が吹き出る感覚を味わいながら、ゆっくり息を引き取るでしょう。そうしたら、彼女は永遠に誰にも会えなくなり、貴方は復讐を果たせます。」

ウイル「そ、それは…！」

白野の行動に生徒達は目を剥き、テイオは「これもまた償いか」と言わんばかりに、落ち着いた様子でウイルを見ている。

白野「どうしました？ 彼等の無念とやらを晴らすのではないんですか？ 彼女が生きていれば、また洗脳されて貴方を襲うかも知れませんよ？」

ウイル「私は……っ。」

ウイルの心情を表す様に剣が震え、体が硬直する。やがて、人を殺すと言う重荷に耐え切れなかったのか、ウイルは悔しそうに歯を食い縛りながら俯き、剣を落とした。

ウイル「……っ。」

白野「…。一つ、助言を言わせて貰えますか？」

ウイル「…… 何ですか？」

白野「無念とか遺志とか、死んだ人の思想を汲み取る様な言葉がありますが、死んでしまえばその人の精神は形を失います。唯、何も感じないまま、ひたすらに漂い続けるだけ。要は、そんな物は生きている人の都合に合わせた物でしかありません。晴らそうとした所で、意味はありません。」

誰も望んでいませんから。まるで、死んだらどうなるかをよく知っているかの様な言葉を付け加え、白野は落とされた剣を拾い、鞘に戻す。その言葉にウイルは反論しそうになるが、死人が何も言わない事も事実と考え直す。結局何も言えなくなり、黙り込んだ。

ハジメは訝しげな視線を白野から外し、話を戻す。

ハジメ「それで？ 神代魔法を使っていたのは誰だ？」

ティオ「うむ、使っている所を見た訳では無いが、妾の推測通りならば隣にいた魔人族であろうな。他に心当たりが無いと言うのもあるが・・・」

ハジメ「こんな辺境に魔人族がいるのか？ 根拠は？」

ティオ「ローブの男の隣におったからの。しかも騎士殿と同じく、見た事の無い魔法を使っておったのじゃ。妾も魔法の知識は豊富だと自負しておるが、風も起こさずに飛ぶ様な魔法は知らないのでな。」

ユエ「…… 多分、重力魔法。」

ハジメ「だろうな。ソイツの外見は？」

ティオ「たしか、同じ様な黒いローブを羽織った、初老の魔人族じゃったな。顔が違う種族の皮を縫い合わせたのか継ぎ接ぎだらけでの、左目があらぬ方向に向いておった。」

白野「……？それはおかしいですね。」

ティオの発言に、白野が首を傾げた。その容姿は、白野が知る人物とよく重なる。

ティオ「おかしい、とは？」

白野「その人物は、私が殺して焼き払った筈なんです。逃げ延びているとは思いませんでした。」

ハジメ「何だそりや、神代魔法を使える上に不死身なのか？ 遠くにいる奴が見えるのに、何で今迄気付かなかった？」

白野「申し訳ありません。何故か彼だけは他の人よりかなり薄く見えるんですよ。なので、死んだと考えていた事もありますが、見つけ出すのは難しいんです。」

白野のよく分からない説明に、ハジメは不機嫌そうな表情をする。ふと、愛子が思い出した様に今度は白野に質問を始める。

愛子「そう言えば玖珠木さん。どうして最初からティオさんが竜人だと分かったんですか？ あった時は竜に変身されていたので、人かどうかは分からない筈ですが？」

白野「竜の体の中に、人影が見えたんです。一般的な竜であればそういうものは無いので、竜人族しかいないと考えたんです。」

白野の発言に皆が首を傾げる。魔眼石を持つハジメでも、竜の体内

にそんな物は見えなかった。肉眼なら尚更だ。

ティオ「ううむ。如何やら騎士殿には、只人には見えない物を見ているようじゃな。お主の視界には物理的な物ではなく、何か別の物が写っているのやも知れぬ。」

白野「…別の物、ですか。」

心当たりはあるのか、白野は俯き思案するが、答えは出て来ない。

ハジメ「…もう一つ質問がある。玖珠木の体についてだ。中身が黒い霧とか、どうなってるんだ？」

白野「中身？」

シア「…その、言い難いのですけど、ハクノさんはティオさんに潰されて、体が半分に別れていたんです。」

どうやら生徒達が見ていた光景は、ハジメ達も確認していた様だ。黒い霧について聞き出そうとしてくる。

しかし、本人は自分の体がどうなっているのか気付いていない様だ。見かねたシアが事の顛末を説明する。

白野「そうでしたか。」

話を聴き終えると、白野は徐に左腕の籠手を外し、剣を引き抜くと

愛子「玖珠木さん!？」

自分の左手を斬り落とした。

やはり断面は黒い霧が詰まっております、やがて霧が切断された手首まで伸びて行き、再び結合する。

白野以外の人物は、何の躊躇いも無く、痛みに顔を歪める事も無く腕を斬り落とした彼女に驚愕し、生徒達は顔を青ざめさせている。

ユエ「……………痛く無いの?」

白野「特には何もありません。皆様には申し訳ありませんが、私はこの霧については何も知りません。」

白野は左腕を軽く動かし、感覚を確かめる様に手を握ったり開いたりしている、確認を終えたのか剣を戻し、籠手を付ける。

何事も無かった様に振舞う白野を見て、愛子が白野に近付き、その

手を両手で優しく包み、怒っている様な目を白野にむける。

白野「先生？」

愛子「… 玖珠木さん。直ぐに治るからと言って、自身を使い捨てる様な事をしてはいけません…。自分の身はもつと大切にしてください。」

愛子は悲しんでいた。腕を容易く切った事もそうだが、テイオを捕縛する時だって、あの冰山は自分を巻き込む事を前提に使われていた事は、素人の愛子でも分かっていた。だからこそ先生として、これだけは伝えなければならぬ。

白野「何故ですか？ 大切にされる理由がありません。」

愛子「そんな事はありません！ 貴女が傷付けば、死んでしまったら、悲しむ人達がいるんです！ 先生だって、その一人です。だから、自分の事も大切にしてください…。先生との約束です。」

白野「… わかりました。」

例え生徒が化物になろうと、その生徒の為に優しく、時には厳しく接する。彼女にとっては、大切な生徒である事には変わらないのだろう。

その熱意が伝わったのかは分からないが、白野は首を縦に振り約束する事を誓う。

ハジメ「話を戻すぞ。その黒いローブの男は何を狙っているんだ？」

質問されたテイオが、再び情報を話し出す。

話によれば男は魔物を集め大軍を作り、町を襲うつもりの様だ。その男の容姿は黒髪黒目の、未だ少年位の年齢らしい。そして、勇者に対して恨言を呟いていた事から察するに、彼等と何かしらの関係があるとも。

その容姿と、闇系統魔法に適性がある事。その情報が、愛子達の脳裏に探している人物を思い浮かばせる。

ハジメ「玖珠木、男の位置と大軍の居場所は分かるか？」

白野「はい、それらしき人物と大軍は、既に町に向けて進軍しているようです。数は、大凡4万程かと。」

白野の報告に全員が驚く。このまま行けば町に到達するのに1日も掛からないだろう。そうなれば住民は一人残らず始末される。

ウイル「あの、ハジメ殿なら何とか出来るのでは……?」

皆が動揺する中、ウイルの希望的な提案が呟かれる。その言葉に生徒達がハジメに期待の眼差しを向けるが、彼は仕事を優先すると答え、ウイルを引き摺り出す。

しかしここで、愛子が残り黒いロープを着た男が、清水なのか確かめたいと言い出した。魔物の大軍が迫る場所に置いていく訳にも行かず、生徒達が必死に説得しだし、様々な意見が錯綜する。そこに、白野から提案が出た。

白野「皆様に一つ、提案があります。要は、ここで魔物を押し留めて、誰かが報告に戻れば良いんですよ?」

愛子「えっと、はい、そうなります……?」

何か良い案があるのかと、生徒達の目に希望が宿る。全員の視線が白野に向かう。

白野「私がここに残り、他の方々を町まで投げ飛ばします。そうすれば解決です。」

「「え?」」

前言撤回、紐無しバンジーと同じレベルの提案だった。

優花「…… 投げ飛ばすって?」

白野「言葉通りの意味です。体を掴んで、町に投げ飛ばします。」

優花「…… 着地は?」

白野「その為の道具はご用意します。ですが、何らかの理由で着地に失敗した場合町に向かって地面に赤い線が――」

愛子「南雲くん! 皆で戻りましょう! ええ、先生は大賛成ですよ!」

ハジメ「賢明な判断だ。」

意見が纏まり、魔力駆動四輪にハジメ達と生徒達が、魔力駆動二輪にシアとテイオ、白野が乗り込み、一行は町に急いだ。

•

.....

町に到着した後、白野は一人別行動を取っていた。報告に全員が向かう必要も無いと考え、彼女は大軍に備える為に準備をしていた。

白野「すみません。この鉄棒と木材を下さい。」

店員「あいよ！ 全部で2,000ルタだ。」

白野「ありがとうございます。」

多数を相手にするには武器が合わない。魔法で相手するのも良いが、対抗できる手段は多い方が良い。

白野「すみません。このクロスボウを下さい。後、金属の廃材があるなら、それもあるだけ下さい。」

店員「毎度あり！ 廃材はとってくるからちよいと待っていてくれ。」

白野「ありがとうございます。」

その為にまず、材料を集める。先に武器を作る為の物を集め、それを終わると白野は町を出て、外壁を作るべく大量の岩を集め始めた。

白野「『禍天』。」

重力魔法で岩を持ち上げ、列になる様に積み上げる。足りない分は地面から引き出し、高度5メートル程の防壁を作り上げて行く。

しかし、一人でやるには人手が足りない。効率を上げるべく大急ぎで取り掛かっていると、白野に声を掛ける者が現れた。

ハジメ「よお、忙しそうだな。」

白野「ハジメさん？ 此処を離れるのではなかったのですか？」

ハジメ「そのつもりだったんだが… まあ、色々あったんだよ。手を貸すぜ？」

ハジメ達一行だった。ウィルを連れてフューレンに戻ると言っていたのに、何があつたのかここに留まり、大軍に応戦するつもりの様だ。

白野「それでしたら、岩を持って来るので、それを使って錬成で外壁を作ってください。」

ハジメ「お安い御用だ。」

ハジメはそう言い、不敵な笑みを浮かべた。

程なくして外壁を作り終わると、白野は鉄棒と廃材を錬成し、武器の作成に取り掛かる。

作った物は、穂先が三角形に尖った戦斧、バルディツシュだ。これに生成魔法で限界まで魔力を込め、雷系統魔法を付与する。

ハジメ「お前、生成魔法まで使えるのか？ 何でも出来るな。」

白野「それでもありません。知識があるだけです。」

ハジメ「充分だろ。お次は何を作るんだ？」

白野「クロスボウの改造とボルトの作成です。大量の敵を相手にする以上、可能であれば多く射手が欲しい所ですが。」

「どうやらボルトに魔法を付与し、殲滅用の物を作るつもりの様だ。しかし、クロスボウや弓の強さを引き出すには数が必要だ。元々観光地であるこの町ではそれを扱える人の数など高が知れている。」

ハジメ「…貸せ。」

白野「ハジメさん？」

ハジメ「お前の正体は分からんし、信用出来ない。それでも世話になったからな。武器を作る序でに改造位はやってやる。」

白野「…ありがとうございます。」

そう言うと、ハジメは自分の作業に取り掛かる。白野もそれに合わせ、ボルトの作成を始める。

シア「あの、ハクノさん。ちょっと良いですか？」

白野「はい、何でしょう？」

その前に、シアが白野に話し掛けて来た。白野が向き直ると、彼女は頭を下げた。

シア「昨日は、庇ってくれてありがとうございます。」

白野「庇った、とは？」

シア「えつと、ほら、私がデビッドさんに絡まれた事があったじゃないですか。あの時ハクノさんがあの人を止めてくれましたよね？ そのお礼がしたかったんです。」

白野「お礼は不要です。あれは、ハジメさんから私の過去の話を聞く為に、妨害して来た彼を止めただけですよ。」

シア「それでも、ですよ。お陰様で美味しいご飯が食べられました！」

白野「そうでしたか。どういたしまして。」

そこで会話が途切れる。白野は、話は終わったと作業に戻り、木を削り、鉄屑を矢尻に変え羽を取り付け、ボルトを作って行く。シアはそれが気になったのか、作り終わったボルトに手を伸ばす。

白野「それに触ると、体が爆発しますよ？」

シア「ええ!？」

白野の物騒な警告に驚き、慌てて伸ばした腕を引く。

シア「あ、危なかったですう。随分と恐ろしい物を作ってますね…。」

白野「これには、刺した対象の魔力を起爆させる魔法が付与されています。迂闊に触れると爆死しますよ？」

シア「は、はい、反省しますう。」

そう言いながら、シアはウサミミをシヨンボリと垂れ下げた。白野は気にした様子もなく、黙々と作業を進める。

シア「あの、ハクノさんは、私の事を気持ち悪いとか思わないんですか？」

ふと、昨日の罵倒を思い出し、思わず尋ねてしまう。他の生徒達はそんな感情は表さなかったが、もしかすると全員がそうではないのかもしれないと思ったのだろうか、若干不安に揺れながら質問する。

白野「気持ち悪い、とは？」

シア「え？それはほら、見ていて気分悪いとか、なんかこう…気持ち悪い？とか？です？」

白野「申し訳ありません。私にはそういった感情の類は分かりません。なので、貴女を罵倒する様な事はしませんよ。」

シア「え、と、そう…ですか？」

感情が分からないとは、どう言う事なんだろう？と、シアは疑問に思うが、「ひょっとして、心が無い？」とも聞けず、話が続かなくなる。

すると、白野が急に作業を止め、再びシアに顔を向けた。

白野「感情は分かりませんが、相手がどう言う気分にいるのかは分かりません。」

シア「ハクノさん？」



白野「なので、また悲しそうにしていたら、何度でも助けますよ。」  
シアは思わず目を見開く。この人は、種族が何であろうと変わら  
ず接してくれるつもりの様だ。亜人族が迫害される中、この言葉を言  
われる事は滅多に無い。シアの顔に、自然と笑顔が浮かんだ。

シア「ありがとうございます！ ハクノさん！」

白野「お礼は不要です。」

.....

そして明くる日。

ハジメ「！.....来たか。」

遂に、町の前に大軍が現れた。到達する迄30分は降らないだろ  
う。多種多様な魔族の混成部隊が、ハジメが飛ばした偵察機の下に広  
がる。

ハジメ「玖珠木、準備は良いか？」

白野「いつでも。」

白野が戦斧を構え、ハジメはガトリングガンを持ち上げ、ユエが手  
に魔法を構築する。後ろから愛子を称える歓声上がる中、各々が己  
の得物を手に、大軍にたちはだかる。

ハジメ「じゃあ、やるか。」

## 10. 指輪

ハジメ「終わった……。」

肉の焦げた匂いが辺りに撒き散らされ、鼻腔を擦る。戦闘が始まり15秒。今回のハジメ達の戦いは終わった。

別にハジメがNuke<sup>ヌケ</sup>な爆弾を使ったとか、シアが元気○を使ったとか、そういう訳では無い。

白野「何か問題がありましたか？」

白野だ。

彼女が持っている雷系統魔法を付与したバルディツ<sup>戦</sup>シュ、これは目標に向けて雷を落とす事が出来るもので、込めた魔力量により威力が変化するようだ。

そして戦闘が始まると共に、白野が戦斧を天に突き上げ、自らの膨大な魔力に物を言わせ、地面が揺れる程の轟音を響かせながら巨大な落雷を引き起こした。

雷に呑まれた6万にも及ぶ魔物の軍勢は、自分が攻撃を受けた事にも気付かぬまま、一瞬で己の肉体を炭へと変えた。

ハジメ「いや、問題は無えけどよ、秒で終わっちゃったぞ。時間かけて準備してた清水が可哀想になって来るな……。というか生きてるのかアイツ？」

白野「存命ですよ。彼の乗っている魔物と本人には当てていませんから。」

ユエ「……何処からそんな規模の魔力が出るの？」

シア「うわー、やる事無くなっちゃいましたねえ。これ、私達が用意していた意味あったんですか？」

敵が殲滅された以上、ハジメの仕事は終わりだ。精々残っている作業は、清水の回収位だろう。しかし、白野の言葉に全員が構え直す事になる。

白野「彼がいる以上、これで終わりとは思えません。」

シア「え？ 誰の事で——!?」

言葉が続かなかった。目の前の光景に再び目を奪われる。

既に事切れた筈の、全ての魔物の死体が蠢いている。否、死体が元の形に戻って行き、骨が組み直され、炭から肉体へと再生し、瞬く間に魔物達は蘇生する。

蘇った魔物は生前より更に屈強な肉体へと変わり、全ての個体から尋常では無い密度の魔力が迸っている。

苦境を乗り越えたと喜びに浸っていた住民が、終わりの無い絶望に顔を歪める。この現象を引き起こせる者は彼しかない。

ハジメ「まあ、案の定例の魔人族も居るよな、そりゃ。神代魔法には蘇生させる様な物もあるのか？」

白野「はい、恐らく魂魄魔法かと思われます。以前相對した時この様な事がありました。」

ハジメ「知ってたなら先に言え！」

報、連、相のほの字も無い白野にツツコミを入れるが、そんな事をしている場合では無い。不死の軍勢が、町に向かって進軍を再開した。基礎能力を引き上げられたからか、先程よりも速度が上がっている。既にその強さは奈落の上層に生息する魔物と大差無い。今直ぐに迎撃しなければ、あつという間に大量の魔物が町を蹂躪し尽くすだろう。

白野「私が本命を叩きます。恐縮ですが、ハジメさん達は防衛をお願い致します。」

ハジメ「言われなくともそれ位はしてやる。それと、コイツを使え。」

ハジメは指輪から武器を取り出し、白野に投げ渡す。

それは、先日ハジメが改造を施していたクロスボウだった。弓の後ろにボルトの詰まった車輪が取り付けられており、引金を弾くだけで連射が出来る様、各所を強化している。

白野「ありがとうございます。ハジメさん。」

礼を言った後、白野は戦斧を背負い、クレイモアを引き抜き大軍に向き直る。剣の柄を逆手に持ち、槍投げの様に構え重力魔法を込めると、全力で剣を投げた。

投げられた剣は身体強化と重力魔法が合わさり、音速の如き速さで

魔物の群れを突き抜け、強引に大軍を縦に掻き分けて行った。白野は空いた道筋を強化した脚力で駆け抜けながら、クロスボウを両脇の魔物に向けて放つ。

ガガガガガガガガガガガガ!!

機関銃並の連射速度でボルトが魔物に打ち込まれて行く。魂魄魔法を応用した、魔力を強制的に爆破させる魔法が付与された必殺の矢が次々に敵を撃ち殺し、死体が周りの魔物を巻き込みながら爆発して行く。

ハジメ「…魔力量の底が知れねえな。」

ユエ「…魔力お化け。」

群れを殲滅しつつ、白野は目標に向けて走り抜ける。途中、投げ飛ばした剣を重力魔法で手元に戻しながら対象に近付いた頃、重力魔法を使い飛び上がり、我が者顔で空に佇む男に向かって飛んで行った。

途中、鳥型の魔物が咆哮を上げながら彼女に襲い掛かる。白野は飛んで来る魔物を踏み台にしつつ“禍天”で左右に落ちながら回避し、時折ステイレットを投擲し敵の頭を穿つ。そして、目標の男、清水に接近し、彼に向けて鎧通しを投げた。

清水「うわ!?! な、何だ!?!」

放たれた鎧通しが清水に刺さる。突然の攻撃に動揺するが、直ぐに痛みが無い事に疑問が湧く。突如、刺さったステイレットが消え、代わりに彼の前に何も無い所から白野が現れる。

清水「ひっ!?! な、何なんだよお前!?!」

白野「継ぎ接ぎだらけの魔人族は何処ですか?」

清水「ふ、ふぎ、ふぎけんな! 俺の質問に答えろよ! 何様のつもり——!?!」

白野「質問に答えて下さい。」

吃りながらも反論する清水の首に剣を添え尋問する。しかし、清水はその行動に憤り、白野に罵声を掛ける。

清水「邪魔してんじゃねえよ、モブ風情が! テメエみたいな奴は大人しく俺に殺されてりや良いんだよ!」

白野「そうですか。」

白野は剣に炎系統の魔法を一時的に付与し、竜に跨る清水の足に突き刺した。裂かれた部分から肉の焼ける匂いが漂い、流れる筈の血が蒸発する。

清水「ギャアアアアア!?」

白野「答えて下さい。魔族の男は、何処にいますか?」

再度清水に質問するが、プライド故か恨めしい視線を向けるだけで、質問に答えない。情報を引き出す為に剣を足から引き抜きつつ再生させ、今度は腕に刺そうとするが――

キンドル「ここにいるともお。」

突如白野の背後から、背筋が凍りつく様な殺気と共に声を掛けられる。それは、白野が知っている声だった。

声の出所に向けて躊躇いなく剣を横に振る。しかし、予想されていたかのように上体を逸らす事で容易くかわされ、逆に回し蹴りを叩き込まれ竜から蹴落とされる。

慌てる事無く重力魔法で落下速度を落とし、下にいる魔物に向けてクロスボウを放ち、近くにいる魔物を爆発させ殲滅する。

そして白野が地面に降り立つと、突如彼女の前に現れた光の膜の中からキンドルが、王様気取りの様に仰々しく、ゆっくりと出て来る。

白野「生きていたんですね。焼き殺したと思っていました。」

キンドル「ああ、お陰様でゴミの仲間入りをする所だったよお。その前に素材に紛れて逃げ出したから何ともなかったがねえ。落とし前はきっちり付けさせて貰おうかあ。」

片目に怒りを宿しながら、キンドルは腰に挿したバトルアックス(斧)を引き抜く。有難い事に、今回は手下を使わずに直接白野を手を掛けるつもりの様だ。周りの魔物も彼等を見捨て町に進軍を続けている。

白野「戦う前に、少し話をしませんか? 私としては聞きたい事もありますし、貴方にとっても悪く無い情報もあるのですが…。」

自分から斬りかかった事を棚に上げ、交渉が可能かどうか対話に出る。案の定、キンドルはそれを詰まらそうに鼻で笑い――

キンドル「“黒天穿”」

嘗て己を圧殺した魔法を白野の背後に放った。やられた事の報復のつもりなのだろうか、現れた黒い球は白野を殺すべく引き摺り込もうとする。

白野「『界穿』」

白野は黒天穿と自身の間に空間魔法を出す事で、重力に引かれるまま光の膜に飛び込み、逆にキンドルの背後に現れ袈裟斬りに斬りかかる。

突如、何の前触れも無くキンドルの体が消え、白野が振り下ろした剣が空を斬った。

キンドル「甘いんだよお！」

否、完全に消えた訳では無い。白野の目には、確かに剣が彼の体を斬り裂いた様に見えていた。しかし、手応えがまるで無い。

剣をその場にいたまま回避したキンドルは、振り向きながら白野に向かって斧を振り下ろす。白野は左に転がる事で斧を避け距離を取る。連射クロスボウを構え弾幕を貼るが、必殺のボルトはキンドルの体をすり抜け、後ろにいた魔物達に当たり爆発する。

白野「これは一体…？」

キンドル「どうだい、私の研究成果はあ？ 最早誰も、私に触れる事すら出来ない！ まるで神の御神体そのものだとは思わないかね？」

キンドルは自惚れる様に恍惚な表情を浮かべ、余裕な態度でゆっくり白野に歩み寄る。白野はバルディッシュを抜き魔力を貯め、小規模の雷を放つが、それすらも容易くすり抜けられる。対象を貫き損ねた落雷が地面を焦がす。

戦斧を仕舞い、近付いてきたキンドルが振り下ろす斧を剣で防ごうとするが、斧が剣を何も無いかの様に通り抜け、白野の右腕を肘の辺りで切り落とした。

キンドル「!？」

しかし、白野は剣を握ったまま切り落とされた腕を左手で掴み取り、その場で回転しキンドルの首を狙って腕ごと剣を振る。

剣は例の如くキンドルを通り抜けるが、予想外の攻撃だったのか、

動揺した様子で動きが止まる。

白野は素早く右腕を結合させると、ステイレットを生成し腹に突き刺す。

キンドル「っ!! このっ!」

やはりと言うべきか、肉を刺す手応えは無かったが、鎧通しの効能は発揮されている様だ。白野は無力化するべく更に鎧通しを生成し、キンドルの腕、足、頭と、立て続けに突き刺し動きを封じて行く。

キンドル「調子に乗るなあ!! 人形風情があ!!」

しかし、反撃もそこまでだった。キンドルの体から膨大な魔力が放出され、体に刺さった鎧通しと白野を吹き飛ばす。

そして、体勢を崩されたまま飛ばされている白野に、キンドルは身体強化ではあり得ない速度で近付き彼女の横に現れる。白野の両足を斧で斬り落とし、空いた左手で彼女の頭を殴り地面に叩き付けた。金属が撓む音が響きヘルムの鼻っ柱が凹む。地面に崩れ落ちた白野の胸を更に蹴り付け、町とは反対方向に蹴り飛ばす。

白野「——っ。」

重力魔法で速度を落とし停止するが、両足が無くなった為立ち上がれない。再生するにしても元が無くなった分時間がかかる。そして足が生える前に、怒り心頭のキンドルが白野の前に現れる。

キンドル「いい加減にしろもうかあ。お前は、大人しく私の実験材料になっていけば良いんだよお。」

とどめを刺す様に、右手に持った斧を振り上げる。魔法、物理、全ての攻撃が避けられる以上、彼女に対抗策は無い。白野はキンドルに見えない様にボルトを取り出し、右手に隠し持つ。彼が斧を振り下ろした瞬間、これを指に刺し自身を爆発させられれば、最低でもこの男は巻き添えに出来る筈だ。魔力を持っている以上、この身も充分起爆剤になる筈だ。

——直ぐに治るからと言って、自身を使い捨てる様な事をしてはいけません……。自分の身はもっと大切にして下さい。

ふと、愛子と交わした約束が思い出される。しかし、ここでキンド

ルを止めなければ今も尚殲滅戦を繰り広げているハジメ達にもいずれ限界が訪れる。そうなればウルは地図から消える事になる。逃げの方法もあるが、攻撃が通じない以上ここで逃げ延びた所で結果は変わらない。

キンドルに抵抗出来ないフリをしながら、起爆のタイミングを見計らう。その様子に気付いていないキンドルは、勝利を確信した表情を浮かべ、斧を振り下ろした。

突如、彼の左手から、指輪が抜け落ちた。

キンドル「何!?!」

白野「...?」

落ちてきた指輪が白野の手に収まる。すると、斬り落とされた足が瞬く間に再生し、進軍を続けていた魔物達の進行が止まる。動力が切れた様に崩れ落ち、僅かにも動かなくなる。

白野は急ぎ転がる事でキンドルの下から離れ、左手の籠手を外し指輪をつける。

まるで、今迄自分の中で足りなかった物が取り戻された様な感覚が、彼女の体を駆け巡る。それ共に、自分の知らない知識が頭に入り込んで来る。先程迄キンドルが使っていた不可解な現象も、指輪をつけた今なら分かる。

キンドル「そ、それをオ、か、かか、返せエ!」

声が出た方向を見ると、そこには麻痺しているかの様に足を引き摺り、心なしか一回り老け込んだ様子のキンドルがいた。手はカタカタと震え続け、声はかなり嘎れている。

白野「それは出来ません。」

白野は要望を蹴り、剣を抜き魔力を込めると、キンドルに向けて、袈裟斬りに剣を振り下ろした。

キンドル「やめろオオオ!!」

剣から伸びた魔力の斬撃が地を滑り、キンドルの体を縦に切り開



く。枯れた老人の叫びが止まり、事切れた肉体が音を立てて地面に倒れる。

白野の周囲に、魂の抜けた死体だけが広がる。こうして、ウル防衛戦は終わり、町は守られた。

.....

白野「よお、無事みたいだな。」

泣き別れした具足を見つけ鎧を修復していると、魔力駆動二輪に乗ったハジメが死体を掻き分け声を掛けて来た。側面に付いている車には気絶した清水が雑に括り付けられている。

白野「ハジメさん、ご無事で何よりです。」

ハジメ「その後ろで縛られている奴が、例の神代魔法を使う魔人族か？ 現代アートのみたいな見た目してるな。いや、ブラック・ジャックか？」

白野「はい。と言っても、指輪をしていない今は何も出来ない様です。」

ハジメ「指輪？」

あの後、キンドルの死体は何もしていないにも関わらず肉体の再生を始めた。どうやら不死の力は指輪による物では無い様だ。今は両手足を縛られ、口には詠唱出来無い様に猿轡をはめられている。

ハジメの質問に、白野は手に付けた指輪を外し、ハジメに渡す。それは、魔人族の魔法陣が刻まれた、仄かに青白く輝く指輪だった。ハジメは鉱石鑑定を掛けてみるが、何も判明しなかった。どうやら使われている物は鉱石では無く、何か別の物質の様だ。

好奇心を刺激されたのか、目を輝かせて構造を把握しようとするが、その前に指輪が独りでに手を離れ白野に飛んでいった。

ハジメ「何だそれ？ 生物か？ 随分気に入られているな。」

白野「分かりません。ただ、この人は指輪の力で神代魔法と無制限の魔力を持っていた様です。」

ハジメが視線を向けると、キンドルは恨めしそうな目で睨め付けてくるが、ハジメは興味を失った様に顔を背ける。

ハジメ「俺はコイツの始末を付けてくるが、お前は どうするんだ？」  
白野「幾つか聞きたい事があるので、暫く残ります。」

ハジメは何をするか色々察したのか「そうか」と軽く返事をし、町に向かつて魔力駆動二輪を走らせて行つた。再び、この空間にいる人は白野とキンドルの二人だけとなる。

白野は指輪を嵌めた上で取られない様に籠手を付けた後、キンドルの口から猿轡を外す。

白野「聞いての通り、貴方に聞きたい事があります。貴方は以前から私の事をご存知の様ですが、知っている事を話してくれませんか？」

キンドル「バ、バカを、言うなア。答えるとしても、思っているのかア？」

嫌味つたらしい表情を浮かべながら、辿々しく口を動かす。

白野は口を軽くさせる為にキンドルが使っていた斧を振り上げ、背中に叩きつけた。

キンドル「がああああ!!」

白野「質問に答えて下さい。貴方は死に辛い様ですから、このままずっと殺し続けてもいいんですよ？」

脅しをかけるが、キンドルはこちらを睨むだけで、答えようとしな  
い。仕方なく、話を変える事にする。

白野「貴方が死なない理由。魂の大半を魔人族領の辺りに置いて  
来ている事と関係があるんですか？」

キンドル「!? な、何故それをオ!!」

白野「貴方が寝ている間に、闇系統魔法で頭の中を探らせて頂き  
ました。記憶は読めませんでしたが、別の事は判明しました。」

キンドルの持ち物を強奪し体を調べてみた所、彼の魂は人を動かす  
には不十分な量の、一部分しか体に残っていないかった。しかし、その  
魂からは、何やら魔人族領まで伸びる線の様な物がある事が判明し  
た。

その話を聞き、観念したのか諦めたのか、渋々仕掛けを話し始めた。  
キンドル「... お前が見たものの通りだア。魂を別の器に入れ、現

世に、己と言う存在を縫い止める。それが、私が死なない仕掛けだア。」

つまり、その入れ物を壊し魂を抜いてからで無いとこの男は死なないという事になる。

肝心の器の場所を聞いた所で、彼の口が更に硬くなるだけと推測し、白野は別の質問を続ける。懐から鉱石とは違う、白く透明な水晶の様な物を取り出し見せる。

白野「貴方の持ち物から妙な石を見つけました。これは何ですか？」

キンドル「持ち主の前で、堂々と窃盗かア？ 異界の使徒サマも、いい趣味をしている。」

キンドルの皮肉を無視し、答えを待つ。

彼によれば、この水晶は「魂結晶」と呼ばれる物らしい。と言っても元来人工物の様だ。最初に作り出したのはキンドル自身の様で、便宜上この名前を使っているだけらしい。

名前の通り、この石は魂との親和性が高く、人や魔物の魂を入れる。恐らくキンドルが言っていた器と言う物にも、この石が使われている可能性が高い。

白野「次、貴方は戦力を蓄えて、何をするつもりですか？」

神代魔法、無尽蔵の魔力、そして不死。どれか一つでもあれば、最早並みの軍勢では太刀打ち出来ない物だ。この指輪とて、量産が可能なら子供でもかなりの戦力になる。

そして、キンドルは個人的な軍隊を作り出そうとしている。明らかに個人が所有する戦力では無い。その質問を聞き、キンドルは嗜虐的な笑みを浮かべた。

キンドル「決まっている。私が、神になるんだよオ。」

白野「神に？」

キンドル「この力さえあれば、私は全てを凌駕する事が出来るウ。我が物顔で、世界を牛耳るエヒトも、他人の体で、魔王を気取るアルブも、私の踏み台でしか無い。」

そう言い、キンドルは白野に視線を向けながら、提案をして来る。

キンドル「なあ、私と手を組まないかア？ 誘いに乗るなら、お前の事も、全部教えてやろう。悪い提案では、無いだろう？」

鬱屈した笑い声を上げながら、キンドルは白野の答えを待つ。

確かに、彼女にとっても悪い提案では無い。元々魔人族とは手を組むつもりでもあったし、何やら胡散臭い神の話を聞いた手前、唯魔人族に取り入るだけでは負けるだろう。記憶とて、事の張本人から直接聞けると言うのは良い近道にもなる。

——嘘つきの目がどういいうものか、私はよく知っている。

白野「結構です。」

キンドル「ああ？」

断られると思っていなかったのか、キンドルは惚けた声を上げる。そして、慌てた様子で交渉を続けようとする。

キンドル「な、何を、言っているウ？ お前の事は、私しか知らないんだぞオ!? ここで手を拒めば、二度と手に入らなくなるぞオ!?」

白野「嘘ですね。」

白野の言葉に、息を詰まらせる。何故、分かったのだと。彼の背中に、嫌な汗が流れる。

白野「私は、平気な顔で味方に嘘を付く人とは手を組めません。貴方から聞きたい事も、もうありません。」

白野は右手でキンドルの頭を掴み、魔力を込める。

キンドル「や、やめろ。何をやる気——

変性魔法と言う物がある。動物や植物、それに由来する食料や飼料等の、有機的な物に干渉出来る魔法だ。

そして、この世界には武器に炎や雷を宿す様な魔法もある。炎ならば当然、付与した武器は燃え盛る。つまり、肉体に同じ事をすれば——

キンドル「う あア!! アアアアア!? アアアアア

アアアアアアアア——!!!」

対象は永遠に燃え上がる。骨肉が炭素に変わり、端から再生し、ま

た燃え上がる。短期間で崩壊と再生を繰り返せば、彼はもう何も出来ない。

キンドルは全身から炎を吹き出し、勢いよく燃え盛る。周りの死体や物は避けたので、延焼する事も無いだろう。やがて心を壊したのか、程無くして絶叫も聞こえて来なくなる。

白野はそれを見届けた後、武器と強奪した品を背負い、キンドルを放置して町に引き返して行った。

## 11. 服従

目の前の光景が、理解出来なかった。

撃たれた衝撃で倒れる中、視界の端にこちらに向けて手をかざす魔族が見える。魔族（味方）が放った魔法が、自分の体を貫いていた。

幸利（嘘だ……。）

到底受け入れられる物では無かった。「オルクス大迷宮」で死の恐怖に落ち入り、適性のある闇系統魔法による洗脳に希望を見出し此処まで来た。

そして魔族と協力し条件を満たした後、自分は勇者へと振り返り咲き、理想を叶える。

その夢を抱き駆け抜けた結果が、この状況だ。使役した魔物は一瞬で全滅し、キンドルに直様復活させるも、ある筈の無い兵器を使う厨二野郎に妨害され、その間に彼が敗北した事で又も手下を失った。必死になって死体に躓きながらも逃げようとしたが捕まり、標的の筈の踏み台愛子の前に跪がされる。

幸利（こんなの……嘘だ……。）

それでも愛子を人質にして、始末しようと足掻いた。なのに結局、魔族にとつて清水は唯の使い捨ての駒に過ぎなかった。取引も所詮は、清水を小手先で動かす為の程のいい物でしか無かったのだ。

幸利「し、死にたくない……だ、助け、で……っ。」

こんな所で死んでられ無い。ここまで来たのに、モブのまま終わる人生なんて認められ無い。

ここに彼の味方は一人もいないにも関わらず、清水は謔言の様に助けを求め、弱々しく虚空に手を伸ばす。

その手が、怪物に掴まれた。

.....

白野「大丈夫ですか？ハウリアさん。」

シア「あ!? ハクノさん待って！ 治さないでえ！ 私もハジメに

口移しして欲しいんですう！」

キンドルを始末して町に戻っていると、そこには胸を撃ち抜かれ血を流す清水と、同じく横腹に穴を開けられたシア、毒を盛られたのか顔色が悪い愛子がいた。

攻撃を仕掛けて来た魔族を殺そうとしているのだろう。ハジメが銃を引き抜き空に向かって乱射している。その内の何発か当たり下手人の魔族は腕をもがれる。重症を負いながらも男は遁走し追撃を逃れて行った。

ここで彼を追いかけて治療する事も出来るが、下手をすると魔族と繋がりとがあると疑われてしまう。本来の目的は果たせ無くなるが、あの男の事は放置するしか無い。

愛子の解毒はハジメが取り掛かったので、白野はシアの治療にあたる。

白野「何があつたんですか？」

ユエ「……あの男に愛子が人質に取られている隙に撃たれた。アイツは魔族と取引してたみたい。」

ユエの言葉を確認する様に、清水に向き直る。心臓を貫かれ、血が多く流れ出ている。このまま放置していても勝手に死ぬだろう。

ぶつぶつと、聞き取りづらい声で助けを求め、何も無い方向に手を伸ばしている。しかし、その助けを否定する様に全員が清水から目を逸らした。

この男は自分の都合で先生を、町の住民諸共殺そうとした外道だ。クラスメイトとは言え、助ける道理が無い。

優花「……白野？」

白野「“絶象”」

そんな時、白野が清水に歩み寄り、手を掴んだ。そして、再生魔法を唱え清水の傷を癒す。敵を助ける行動に全員が目を見開き、猜疑の視線を向ける。

ハジメ「何のつもりだ。玖珠木。」

ハジメはドンナーを構え、場合によってはお前も殺すと言わんばかりに照準を清水と白野に向ける。

白野「治療しただけです。助けを求めていたので。」

ハジメ「助け？ ソイツは自分の都合で魔族と取引した上に先生を殺そうとしたんだぞ。唯の鉄砲玉みたいだし、情報も何も持って無い。生かす必要あんのか？」

白野「助けを呼んでいただけでも、私には手を差し伸べる必要がありません。」

そう言っつて白野は清水の腕を掴んだまま、血溜まりから引き上げる。清水は全快した事に混乱しているのか、縛れながらも引かれるままに体を動かす。

白野「助けないといけないんです。頭の中でずっと聞こえる、声が聞こえなくなる迄は。」

感情の見えない機械の様な視線が、スリットの奥から清水へと向けられる。清水はその視線に怯えて後退ろうとするが、腕を掴まれたままなので、強引にその場に座らせられる。

幸利「な、何だよ……？ はな、放せよ……っ。」

白野「これからどうするつもりですか？」

幸利「はあ？ ど、どうするって……？」

白野「助けはしましたが、貴方がまだ敵である事に変わりはありません。」

助けられておいて、また暴れられるのは不本意なのだろう。返答次第では痛い目を見ると言う様に、ステイレットをいつでも突き刺せる様手に握っている。

彼女が一先ずは清水を敵と判断していると分かると、ハジメはドーナの照準を清水のみに向ける。

白野「貴方は、私達の味方ですか？」

幸利「……み、味方だ。お、俺、どうかしてたんだ。何でもする。助けてくれたら、あ、あんたの為に軍隊だつて作るさ。……ち、誓うよ、あんたに忠誠を誓う。何でもするから……だから……。」

漸く命を握られていると分かった清水は、慌てて命乞いをする。引きつった顔を見せながら、必死に味方になると申し出る。その瞳は酷く澱んでいた。嫉妬、不満、憎悪、凡ゆる負の感情が混ざり合った目



が、白野に向けられる。

幸利「……………だから……………おい……………手を、放せよ……………」

白野は清水の腕を掴んだまま、彼の目を見つめている。振り解こうと弱々しく抵抗するが、ピクリとも動かない。

白野は視線を外さないまま、鞆から白い水晶を取り出す。そして白野は清水の首を掴み、握力で締め付けながら釣り上げた。

幸利「かつ!? うあ……………っ!?!」

愛子「玖珠木さん!?!」

慌てて愛子達が止めに入ろうとするが、ハジメが手で制する。

白野「嘘をつきましたね。ユキトシさん。」

白野が腕に魔力を込めると、清水から何かを吸い出され、白い水晶に入って行き黒く染まる。それが終わると白野は首から手を離し、清水を地面に落とす。やつこの思いで呼吸が出来た清水は、咳き込みながらも白野に噛み付く。

幸利「ゲホッ! ゲホッ! な、何だよ!? 何しやがった!?!」

白野「序でに、少々試してみようかと考えまして。」

白野はクレイモアを引き抜き、狙いを定める様に切っ先を清水の喉に向ける。清水は慌てて逃げ出そうとするが、酸欠と目眩で上手く体を動かせずにいる。

愛子「待って! ダメエ!!」

そして、何の躊躇いもなく清水の首に剣が刺さり、その命を絶った。同級生が、クラスメイトを殺した。その光景に生徒達が息を飲む。

白野は剣を首から抜くと、鞆から布を取り出し血を拭う。そして、何かを観察する様に清水の死体を見つめている。

愛子「……………どうして?」

愛子は目の前の光景が理解出来なかった。呆然とした様子で清水の亡骸を見つめながら、白野に疑問を掛ける。

白野「どうして、とは?」

愛子「……………答えて下さい……………どうして……………清水君を殺したんですか?」

白野「嘘をついたからです。後は、実験も兼ねてでしょうか。」

愛子「……嘘？ そんな、何を持って清水君が言っていた事が嘘だと分かるんですか……？ それに、実験つて……？ 何を……言っているんですか？ そんな物の為に、清水君を殺したんですか!？」

白野「死んではいませんよ。」

白野の言葉に全員が驚き、清水に顔を向ける。そこには、首からの流血が止まり、ゆつくりと、微々たる早さで首の傷が塞がっていく姿があった。

白野「キンドル……件の魔族から不死身の原理を聞き出せたんです。これはその試験ですね。予想より随分と再生速度が遅い様ですが。」

白野は再生魔法を唱え、清水の傷を治す。すると、突如清水が咳込み呼吸を始める。荒い呼吸を繰り返し、あるものを確認する様に喉笛にふれている。

幸利「ハアツ……ハアツ……!?!? く……首が……斬れ……!?!」

白野「もう一度聞きます。味方になりますか?」

幸利「ひっ!? や、やめろ。味方だ、味方になるから……っ!」

白野「嘘ですね。」

先日ハジメから渡された銃を靴から取り出し、清水の両足を撃ち抜く。五発分の乾いた銃声と共に鉛弾が飛んで行き、清水が悲鳴を上げて地面に転がる。彼の両足を、三発の弾丸が貫いていた。

白野は尚も止まらず銃を撃ち続ける。銃声と悲鳴が上がり、清水の血肉が辺りに飛び散る。

愛子「……ダメです……玖珠木さんっ。お願いです! もう止めて!」

目の前の光景に呆然としていた愛子だったが、正気に戻ると白野の胴体に掴み掛かり、必死に凶行を止めようとする。

白野「それは出来ません。彼が味方にならない以上、ユキトシさんを安全な状態で先生の下に戻すには、彼を服従させるしかありません。その為には、完全に従う迄彼を痛め付けるしか無いんです。」

愛子「そんな!? そんな物の為にやる事がこれですか!? 人を殺し続けるなんてあんまりです! 無理矢理従わせるなんて事をしなく

ても、他に方法は幾らでもあるでしょう!？」

愛子が必死に白野がもつ銃を抑えようとするが、片腕で軽くあしらわれ、尚も立て続けに銃弾が放たれる。何発かは見当違いの方向に飛んで行くが、それでも清水の体に次々と銃傷が付けられていく。

白野を止められないと判断すると、愛子は身代わりになつてでも清水を守ろうと、射線を遮る為に清水の前に走り出そうとする。

チエイス「……申し訳御座いません。愛子さん。」

愛子「う……っ!？」

だが、チエイスが愛子の鳩尾を殴り、気絶させる事でそれを止める。崩れ落ちる愛子の体を腕で受け止め、そのまま肩に担ぐ。

白野を止めず、更には愛子の護衛に付いている筈の神殿騎士が護衛対象を気絶させた事に同僚は愚か生徒達からも抗議が上がるが、本人の血涙を流すかの様な、苦渋に満ちた顔を見て息を呑む。

チエイス「宜しいですか？ これ以上の事は愛子さんには荷が重すぎます。皆さんもこの場に留まれば、決して浅く無い傷になりません。……原理は理解出来ませんが、少なくとも清水君が死ぬ事もあります。後の事は玖珠木さんに任せましょう。」

優花「でも、だからってあんなの!？」

チエイス「……私とて、こんな方法を取るのには容認しかねます。ですが、清水さんを生かしたいのであれば、それこそ奴隷にするか、彼女が言った様に服従させるしかありません。清水君にとって愛子さんはもう、自分が成り上がる為の生贄でしか無いのでしょうか。」

だから、不本意であっても非道な手段を取る。騎士に勤めていれば、敵を限界まで痛めつけて情報を引き出す様な事だつてある。今回が、偶々味方だった人物が対象に変わったただけだ。

チエイスは清水の悲鳴から目を逸らし、愛子を生徒達に抱えさせて、町に引き返す様強引に背中を押して行く。残りの神殿騎士達も渋々とそれに追従し、ハジメ達も続いて町に戻って行く。

残ったのは白野と清水の二人きりとなった。清水が嘘をつき続ける限り、ここに彼を味方する者はいない。尚も拷問紛いの虐殺が続いて行く。

白野「味方になりますか？」

幸利「やめろッ、もうやめてくれッ！ 味方になるから、だから――」

白野「嘘です。」

クレイモアが振り下ろされ、清水の四肢がなます斬りにされる。

再生魔法で治療される。

白野「忠誠を誓いますか？」

幸利「誓う！ 誓うからッ！ 助け――」

白野「嘘です。」

バルディツシュが清水の腹に突き刺さり、内側から雷で肉を焼かれる。

再生魔法で治療される。

白野「私達を守りますか？」

幸利「があ……ッ！ う……守……る……ッ！」

白野「嘘です。」

拳が清水の全身の骨を砕き、肉を裂く。

再生魔法で治療される。

殺す

治す

殺す

治す

殺す

治す

殺す

治す

殺す

治す

・  
・  
・  
・

どれ程の時間が経っただろうか、悲鳴が止み、静寂が訪れる。

辺りに清水の血肉だった物が広がり、地面の色が変色している。弾痕や斬撃が土を抉り尽くし、惨たらしい拷問の跡が散見される。

その中心に、清水が倒れている。全く動かず、側からみれば死体にも見えるそれは、まだか細い呼吸があり、生きている事が分かる。

白野は清水の頭を掴むと、無理矢理顔を自分に向けさせる。焦点があわない、光を映さない虚な瞳が虚空に向けられる。

白野「貴方はこれから、どうするつもりですか？」

飽きる事も無く、白野の質問が投げられる。

幸利「……………いや……………だ……………しにたく……………な……………」

帰って来た返答は、謔言の様に繰り返される、嘘偽りの無い、生を願う言葉だけだった。

白野「わかりました。ユキトシさん。」

その言葉に漸く首を縦に振ると、白野は清水の首に手を当て、魔力を込めながら魔法で首筋に刺青を彫って行く。

それは契約者に反抗、ないし危害を加えると効果を発揮する魔法陣だ。一般的には奴隷に使われる物で、大抵は相手に苦痛を与える程度の威力の攻撃性魔法が使われるが、勿論調整次第では死ぬ事もある。しかし、今回使われているものは独自の改造が加わっている。

白野「貴方が私や先生達に従う限り、貴方は死にません。ですが、もし貴方が私達を裏切った場合——」

懐から取り出した魂結晶を見せる。これは先刻、清水の魂を吸い出した物だ。魂の一部は清水の中にある為、この結晶が壊れない限り清水が死ぬ事は無い。

白野「それに連動して、この結晶が砕かれます。そうなれば貴方はその時点で死にます。」

魂結晶から抜けた魂は霧散し、勝手に本来の宿主に戻る事は無い。そうなれば、魂が中途半端な量しか残っていない肉体は朽ち果てる。

清水は意味の無い呻き声を上げながら、震える手で魂結晶を掴もうとするが、その前に白野が立ち上がり、清水の手が空を切る。

白野「ねえ、ユキトシさん。——死にたく無いですよね？」

白野の手が契約を迫る様に手を差し出す。無機質な視線が清水を貫いている。その視線に恐怖で強張りながら、清水は覚束無い口取りで話出す。

幸利「う、あ……死に……たく、ない……。あんたたちに……従う、から……たすけて……っ。」

清水の手が白野を掴む。

清水は永遠の生命を手に入れ、白野は従順な駒を手に入れた。ここに、契約は為された。

.....

ハジメ「……何でも出来るんだな、お前。」

戦いが終わり、日がとうの昔に沈んだ頃。勝利の美酒の余韻に浸る間も無く、住民達は戦後処理に悩まされる事になった。

汚染された土壌は“作農師”の愛子の活用により解決する見込みがあるが、大量の死体が残った事が問題になった。解体しようにも数が多過ぎるし、放置すれば辺りに腐臭と感染症が撒き散らされる事になる。

白野「何でも出来る程万能ではありません。出来る事は知っている物だけです。」

ハジメ「神代魔法を知っているだけでも充分だけどな……。この御時世“宝物庫”を作れるのはお前だけだろうよ。」

その問題は、白野の手により解消される事となった。キンドルの持ち物から新たに見つけられた、魔法陣が刻まれた黒い結晶。どうやらこれも魂結晶の様で、中には大量の魂魄が詰め込まれていた。

量から察するに、これは今回の戦闘で使役されていた魔物達の魂なのだろう。恐らくキンドルは魂を集める為に今回の作戦に参加していたのだろう。

これを魂魄魔法で死体に戻す事で蘇生し、魔物の軍勢を自陣に取り

入れる事が出来たが、この数を連れ歩く事は不可能だった。そこで白野はハジメが持っている物と同質の“腕輪型宝物庫”を作り上げ左腕に装着し、それに死体を収容する事でいつでも軍勢を呼び出せる様にした。

如何言う訳か魂から精神と記憶が抜け落ちており、自立で動く事は無いが、清水がやっていた様に闇系統魔法で指示を出せば動かせる様だ。キンドルが変性魔法と昇華魔法で強化した事もあり、かなりの戦力が期待できる。

白野「ハジメさん。装備品の技術提供の件、ありがとうございます。お陰様で戦術の幅が広がりました。」

ハジメ「おう、たっぷり感謝しろ。いつか必ず取り立ててやる。」  
防衛戦の前に白野が新たに作成した武器だが、何を思ったのか全てをハジメ達に売り払おうとして来た。曰く、これ以上武器を増やしても持ち切れない、との事だ。

宝物庫を作れるのだからそれに入れたら良い、と受け取りを拒否したが、どうも宝物庫の扱いが下手らしく、任意の場所に出来無い様だ。試しに使う所を見せて貰うと、右腕に付けられた腕輪が光った瞬間、ハジメの目と鼻の先に、ボルトのみが矢先をこちらに向いた方向で現れて来た。

あと一歩ズレていたら爆死していたと言う洒落にならないスリルを味わったハジメは、このままでは街中で死人が出ると戦慄し、宝物庫に魔法陣を付け加え指向性を持たせる事を提案したのだった。

これにより出現させる場所は固定されるが、魔力を通すだけで瞬時に物を取り出せる様に改造された。白野は新たに宝石を用意し、指向性の宝物庫を武器の数に合わせて量産した後、剣帯等に飾り付ける事で瞬時に武器を切り替えられる様にした。

つまりハジメがやった事は助言の一言のみで、別に何かを手伝った訳では無い。闇金業者もビックリな高利貸しだ。被害者は嫌な顔どころか、顔色一つ変化していないが。

白野「それでは、用事も済みましたので私はこれで失礼致します。」  
シア「・・・その、愛子さん達の事は良いんですか？」

清水を服従させた後、白野は彼を背負い愛子達の前に連れ出した。清水が俯きながらブツブツと「死にたくない」と呟き続けている様子を見て、愛子達は青ざめた顔で呆然とした。これが人のやる事なのかと、クラスメイトをこんな目に合わせたのが、あの分け隔て無く優しかった白野なのか、と。

愛子は清水をそっと抱き締めると、泣きながら謝り続けた。守れなくてごめんなさい、気付いてあげられなくて、ごめんなさい、と。

その後、結局愛子の強い志願と彼の精神状態の事もあり、清水の身柄は愛子達が預かる事になった。白野も清水が愛子達に危害を加える事は無いと判断し、それに同意した。

案の定先刻の事もあり、白野を見る親衛隊達の視線は苦々しく、彼女もその目からは心なしか、これ以上関わらないでくれと言っている様に見える。それ以降白野は愛子達の前に顔を出さず、今の今ままで死体の撤去作業に専念していた。

白野「今は私がいけない方が宜しいかと。この状態で何を言っても、お互いに亀裂が深まるだけでしょう。」

シア「それは、そうですね。」

どこか釈然としない。シアはそんな表情をしていた。このまま放置して良いものかと言う様に。

白野「他に良い方法があったんでしょうか？」

シア「え？」

白野「ユキトシさんの事です。私は、彼を先生の下に帰らせるには、あの様にするしか無いと考えました。それしか、考え付かなかったんです。」

ただ傷を治した状態で愛子に引き渡せば、清水は愛子を殺しただろう。それでは本末転倒だ。双方が生きた状態で事を済ませる為の最善策が、あれしか出なかったのだ。

白野「洗脳すれば良かったのでしょうか？ それとも、降霊術で使役したら良いのでしょうか？ 私には分かりません。」

シア「ハクノさん……。」

シアが悲しそうな目で白野を見る。彼女の言葉からは、後悔の念は



感じ取れない。

どちらかと言えば、それは判断を間違えた様だから他の案が無いか探している、一つ目の案が駄目だったから二つ目、三つ目の案を試す。そんな微かな情動も感じられ無い、機械的な考えをしている様に見える。

ハジメ「さあな。それぐらい、自分で考えろ。」

白野「そうですか……。忠告、ありがとうございます。」

ハジメが関係無いと、投げやりな返事を返す。言葉を聞いて一先ずは納得したのか、白野は荷物を纏めて終わると、ハジメ達に向き直り頭を下げる。

ハジメ「またホルアド迄走って行くのか？　ご苦労なこった。」

白野「いえ、帰りは別の方法を取ります。」

ハジメ「あ？」

何か他の交通手段があったか？　と、ハジメは首を傾げる。白野は腕を前に伸ばすと、その先に光り輝く膜が現れた。

白野「お土産等の荷物も増えたので、帰りは空間魔法を使います。これならホルアドに直接帰られます。」

「……………うん？」

白野「それでは失礼致します。」

白野はそう言い、光のカーテンに入って行った。白野の姿が見えなくなるとその光も消え、後には星が煌めく夜景が広がる。

ハジメ「…………… 最初からそれ使えよ。」

ハジメの言葉が夜の空に発せられ消えて行く。そのツツコミに、全員が頷いた。

## 12. 報告

### 12. 報告

惠理「ふくん。結局魔人族とは何も連絡取れずに帰って来たわけ？」

白野「はい。ご期待にお応えできず、申し訳ありません。」

ホルアドに戻り、ウルにて報酬代わりに貰っていた作物等のお土産を勇者達に配り終えた後、白野は惠理の部屋に向かい、事の顛末を報告していた。

とは言ったものの、目的の魔人族とは取引すら出来ず、得られた成果と言えばキンドルか持っていた指輪と魂結晶、香辛料の納品で給料代わりに支払われた特産品の菓子と農作物位だろう。

その内の菓子は今、惠理の目の前に紅茶と一緒に並べられている。炊いた米が餡子で覆われた牡丹餅の様な物だ。

惠理は報告を聞きながらそれを手に取り、無然そうな顔をしつつゆっくり味わいながら食べている。表情こそ不機嫌そうだが、心なしか目元は和らいでいる様に見える。何だかんだ言いつつ、甘い物は好きな様だ。

惠理「ま、いいよ。焦らなくても時間はあるし。遅かれ早かれ魔人族とは関わる事になるだろうし。それまでに下準備を済ませれば良いだけの事だよ。」

惠理は如何と言う事は無いと言う様に、のんびりと菓子を舌鼓を打ち、紅茶を口に含む。

惠理「それよりも、南雲が生きていた事には驚いたね。まさか香織が愚直に迷宮攻略に勤しんでいる間に、とつくの昔に自力で地上に出てたなんてねえ？」

惠理はクスクスと、面白い冗談を聞いたかの様に笑い出す。

ハジメが存命していた事については、メルド達や勇者一行には話していない。本人達から口止めをされていたからだ。曰く、彼等を通じて教会の連中に存在を知られるのは面倒だ、との事だ。

しかし、白野はこの事を惠理だけには報告した。彼等の戦力の事も

あり、契約者である恵理に報告しない訳にはいかないからだ。

ハジメが写った写真を見せた時は、容姿が余りにも違う事から別人だと思われたが、銃の存在を話すと恵理もこの話を信じた。トータスで銃の存在を知っているのは、自分達召喚者だけだからだ。

白野「彼等とは敵対しない方が宜しいかと。その気になれば、軍隊は愚か国ですら滅ぼせる存在です。」

恵理「随分高く評価するね。そんなに強いのか？」

白野「彼は単独でも大軍を相手に出来る存在です。道具だけで無く、推定ではありますか素の身体能力も相当な物かと、現状私達の戦力で敵う相手ではありません。」

恵理「うへえ、冗談みたいな奴だな。あの最弱がそこまでねえ？まあ、今の所はアイツもこっちに関わるつもりは無いんでしょ？だったら、向こうから来ない限りは放置した方が良さそうだね。」

一先ず、恵理はハジメ達の事は置いておく事にする。白野もその判断に賛同し、首を縦に振る。

恵理「それにしてもその指輪、得体の知れない物だね。最初からあのフランケンシュタインが持ってたのに、今更になって君に飛んで来るなんてねえ？」

白野の指に付いている指輪を眺めながら、

皮肉気に語る。

恵理の言う通り、変な話だ。原理は分からないが白野の元に飛んでくるならば、初めてキンドルに会った際に手に入ってもおかしくは無い。なのにこのアーティファクトは、まるで計った様な頃合いで白野の手に渡った。

白野「何か、切っ掛けがある筈なんですけど……。」

恵理「切っ掛けねえ。ありきたりだけど、何かの拍子に指輪に触れたとか？」

白野「接触、ですか？」

触れたと言えば戦闘の際に、キンドルが指輪を付けた手で白野の顔を殴り付けた事があった。触れたと言うより当たった、と表現する方が正しいが、指輪に触れたのはそれ以外は無。

白野「つまり、私の体に何かしらの反応が起きて、このような現象が起きたと。」

恵理「さあねく。ぶつちやけ、どうして手に入ったかなんてどうでも良いよ。他に何か分かった事は無いの？」

白野「詳しい事は何も。唯、変わった事が出来ます。」

恵理「どんな？」

質問されると、白野は詠唱する事も無くその場から消えて見せた。高速で移動した訳では無い。椅子に座ったまま、音も無く煙の様に見えなくなった。

どこに行つたのかと辺りを見回していると、突然恵理の真横に白野が現れる。

恵理「うわ!? ……何で脅かす様に現れるのかなあ？」

白野「申し訳ありません。その様なつもりは無かったのですが。」

恵理が不機嫌そうにジト目を向けるが、白野はどうと言う事は無いとでも言うように、無表情のまま謝罪する。

白野曰く、どうやら指輪をつけている間は、様々な知識が頭に入ってくる他、肉体を変質させて霊体になる事が出来るらしい。これを応用して姿を消したり、変質率を変えて半分霊体になる事で、高速で移動する事も可能になるそうだ。

恵理「へえく、便利なもんだ。量産とか出来ないの？」

白野「はい、キンドルの持ち物を漁りはしたんですが、製造法に関する事は何もありませんでした。指輪を付けてから判明しましたが、霊体化につきましても魂魄魔法を使われれば、攻撃は通じてしまいません。」

恵理「あつそ。まあ、現物が手に入っただけでもマシか。その霊体化つてのも、その指輪からの知識のおかげ？」

白野「いいえ、違います。」

恵理「え？」

恵理が不思議に思ったのか、指輪から目を離し白野に向く。

白野「この力は知識で知つたと言うよりは、霊体の性質が体感で分かつたと言つた方が正しいかと。」

恵理「あー、つまり頭じゃなくて体で分かったって事？ 普通の体じゃ無いのにそう言うのは分かるんだ？」

皮肉混じりな恵理の返事を気にもかけず、白野はその返答に頷く。

恵理「ハア、何かこうして見ると、君の素性って幽霊じみた物ばかりだね。」

白野「幽霊、ですか？」

恵理「だってそうでしょ。消えたり、冷たかったり、失われた知識を知ってたり。差し詰め神代に滅んだ亡者って所かな。」

指輪も白野の体についても、亡霊に関する様な能力がある事から鑑みるに、恐らくこれらの力には魂に関係する物なのだろう。

指輪について探って行けば何か分かるかもしれない。今迄はなんの糸口も掴めなかったが、今回の一件で進捗を得られたのは僥倖だ。

白野「そういえば、エリさんに一つ聞いておきたい事があります。」  
一連の報告を終え、白野は鞆から物を取り出し机に置く。

恵理「あれ？ 無くしてたのに戻って来たんだ。」

白野「はい、ハジメさんと会った際にこれを渡されました。どうやら彼が奈落に落ちた際にこれも落とされていたそうです。」

それは先日、鍋を奢った際に返却された銃だった。薬莖と銃弾はハジメから予備が支給されており、弾の込められた弾倉が幾つか並べられる。

恵理は弾を抜かれた銃を手に取り、興味深そうに様々な角度から鉄の兵器を眺める。

恵理「何？ これを天職でも無いのに十八番になった錬成で量産したりでもするの？ 世界観崩壊しそうだね。」

白野「それは難しいかと。精密な機構の複製までは何とかできますが、ダンガンとやらを作る為の材料が集めにくいんです。」

銃を錬成するにはそれこそ手作業で精密機器を一から作る様な錬成精度と、銃弾を作る為の希少な材料が必要だ。手元にある物では、それらを作る為の物資も無い。量産など夢のまた夢だ。

白野「エリさんなら、何かご存知かと思いましたが。これは誰でも所持が可能な物なんですか？」

惠理「まさか。こんなのが持てるのは警察——トータスで言う所の憲兵とか、兵隊でしか取り扱えないよ。一般人が手にしてたら速攻で捕まるね。」

海外ならともかく、武器の取締りが厳しい日本では免許でも無い限り所持するのは難しい。一介の女子高生なら尚更だ。

しかし、トータスに銃の存在しないのと、錬成師に製作技術が無い以上、白野は召喚される前から銃を携帯していた事になる。

白野「何故、私はこれを持っていたんでしょう？」

惠理「僕もそれについては知らない。銃を持っていたなんて、それを使った時に初めて知ったからね。存外、物騒な奴だったのかもねえ？」

惠理も白野が銃を隠し持っていた事は知らなかったらしい。裏の顔も含めて親しかったと語る惠理が知らない以上、この事を知っている人物はいないだろう。

白野「宜しければ、エリさんが知っている過去の私について聞かせてくれませんか？ 何か手掛かりがあるかも知れません。」

惠理「そうは言われてもねえ。何処から話したらいいかな？」

白野「取り敢えずは、エリさんが初めて顔を合わせた所から聞かせていただけませんか？ その後は要所だけで構いません。」

惠理「はいはい、分かりました。長くなるから、紅茶でも淹れてくれない？」

惠理からカップを渡され、白野は魔法で手に火を宿し湯を沸かす。ランタンの灯だけが薄暗い部屋を照らす中、惠理の回想劇が始まった。

時は暖かい陽気漂う春。

入学式が終わり、恵理達新入生はこれから一年世話になる教室に集まっていた。

担任の教師が教卓に立ち、全員が各々の席に座っている。担任はこの時期恒例である自己紹介を終えると、生徒達の名前を覚えるという目的も含めて、彼等に自己紹介をさせた。

五十音順に一人一人が、名前、趣味、出身の中学、得意科目、特技等を話していく。その途中、少し変わった話を始めた生徒がいた。

白野「珍珠木 白野と申します。趣味はバイト、学業経験はありません。特技は射的です。皆様、これから一年間、どうぞ宜しくお願い致します。」

黒い髪を肩の辺りで切り揃えたセミショート少女、白野と名乗った人物は満面の笑みでそう答え、深々と頭を下げた。

全員が一つの単語に疑問を浮かべる。学業経験が無いという事は、これまで学校に通った事が無いと言う事だ。政策で義務教育が進められるこのご時世、この事実はかなり珍しい。

どうやら白野は現在、アパートで一人暮らしをしている様だ。生活費を稼ぐ為にバイトも掛け持ちしているらしい。周りが動揺する中、白野は気にした様子も無く席につく。ヒソヒソと生徒達が騒めいているが、着々と自己紹介が進んで行く。

時代錯誤な変な奴。それが、恵理が最初に彼女に抱いた印象だった。

.....

鈴「ハクノン！ 一緒にお弁当食べない？」

それから数日が経った頃、殆どの生徒が交友関係を作り上げた頃。学校での勝手が分からずにいたのか、白野は一人の時間を過ごしていた。

そんな折、誰とでも仲良くなるスーパーコミュニケーションクリエイター

鈴が突撃し、白野に話し掛ける。

白野「……………」

しかし気付いていない。白野は先程迄の授業を振り返っているのかノートを眺めている。鈴の方には見向きもしない。

鈴「は、ハクノ〜ン。聞こえてる〜?」

白野「……………」

鈴「むむ! この鈴様を無視するとはいい度胸だ! そんな悪い子には〜〜こうだ!」

鈴は白野の背後に回り込み、胸を揉むべく驚掴みにしようとする。だが――

白野「!!」

鈴「ふムギユ!!」

その前に白野が後ろに向かって高速で頭を振り、鈴に頭突きをかます。後頭部が綺麗にエロおじ鈴さんのおデコに入り、大きく仰反る。

鈴「あいつた〜!? おデコが、鈴の愛しいおデコがあ!」

白野「え、谷口さん? あ、ごめんなさい! 大丈夫ですか!」

鈴が額の痛みに転げ回り、白野が慌てて怪我をしていないか確認する。騒ぎで周りから視線が集まるが、鈴による何時もの百合騒ぎだと分かると、各々の会話に戻って行く。

鈴「うう、酷い目にあつたあ。良いじゃん別に、おっぱおを揉むくらい。」

白野「巷では他人の胸を触るのは常識何ですか? 社交辞令の一貫

でしょうか?」

恵理「いやいや、それは流石に無いよ。そんな社交辞令あつたら日本のもラル丸潰れだつて。」

後ろで控えていた恵理が白野にツツコミを入れつつ、苦笑しながら慰める様に鈴の頭を撫でる。

白野「ごめんなさい、谷口さん。怪我はありませんか?」

鈴「それは大丈夫だけど、ハートに傷がついちゃったなく。お詫びと一緒にお弁当を食べる事を所望する!」

白野「食事ですか? 良いですよ。」



脈絡も無い突飛な要求だが、白野は対価としては容易いと判断したのか要求を受け入れる。そして自分の鞆から今日の昼ご飯を取り出した。

——どう見ても水にしか見え無い、透明な液体が詰まった2ℓのペットボトルだけを。

鈴「… うん？」

恵理「… え？」

白野「…？ どうかしましたか？」

二人が予想外の光景に硬直している間にも、まるで当然と言う風にキヤップを開け、水を飲み干そうとする。貧乏学生宛らな行動に、鈴達は勿論見守っていた生徒達も硬直する。

恵理「… お昼ご飯、それなの？」

白野「え？ はい、そうですけれど？」

鈴「いやいやいや、おかしいよね!? 昨日までちゃんとしたコンビニ弁当持ってきて来たじゃん！ 何で水!？」

白野「えつと、今月はちよつと懐が厳しくて、節約の為に昼食はこれで済ませようかと思ひまして。でも凄いですよ、これ。空腹は紛れる上に公園の水道から取って来たんで実質無料です!」

鈴「クラスメイト全員集合！ ハクノンに弁当を分けてくれ〜！」

ドヤ顔で熱弁する白野に、周りはそんな事になる程に金欠なのかと嘆き、中には同情して涙を流す輩までいる。

鈴は持ち前のコミュ力を発揮して集めた繋がりをつるに使い、何処から取り出したのかプラスチックのトレーに即席の弁当を拵える。材料は教室にいる生徒達のお裾分けだ。ご飯、梅干し、卵焼き、タコさんウインナー、プチトマト、次々に食料が乗せられて行く。

白野「えつと、良いんでしょうか？ こんなに貰ってしまつて…。」

鈴「良いの良いの。今日はクラスの皆からの奢りだよ！ 鈴からもこのハンバーグをあげよう！」

鈴から更にハンバーグが追加され、恵理からもコロッケを渡される。大量に乗せられたお裾分けを前に、白野が困った様な表情をす

る。

生徒達は彼女に気にするなど返事をして行き、遠慮なく食べてくれと食事を勧める。中には勿論あわよくば仲良くなりたいたいと、下心を持つ者もいるが。

白野「うくん、タダで貰うのは申し訳ないので、何か手伝える事はありますか？ 私に出来る事なら何でもしますよ？」

鈴「ん？ 今何でもするって言ったかな？ じゃあお礼に、その程良い大きさのお胸をうへへえく。」

白野「ごめんなさい、体を弄られるのはちよつと……。」

鈴「まあまあよいではないか、よいではないか。鈴にお嬢ちゃんのだニヤララな秘密をつへぼう!？」

鈴の手が名伏し難い動きをしながら白野に近付くが、直後に背後から雫の手刀を喰らい撃墜される。

雫「まったく、真昼間に何をする気よ……。騒がしくしてごめんないね、玖珠木さん。」

白野「え？ いえいえ！ 気になさらないで下さい。八重樫さんが謝る様な事ではありませんよ。」

鈴の提案にほんの少し表情を暗くしていた白野だったが、直ぐに笑顔になり、雫に微笑み返す。その後ろでは頭を押さえて痙攣している鈴と、それを苦笑しながら慰めている恵理の姿があった。

白野「ところで谷口さん。その“はくのん”と言うのは誰の事ですか？」

鈴「え？ ああ、分かってなかったから、さつき鈴に反応しなかったんだ。あだ名だよ。白野のあだ名。」

白野「あだ名、ですか？ 呼びかけるのであれば、本名で良いのでは？」

鈴「ほら、本名じゃなくて別の呼び方してたら、なんか親しい感じがするでしょ？ だから、白野改めハクノンってね。」

白野「親しみ……ですか。それは、良い物ですね。」

その呼び方が気に入ったのか、白野の顔に笑顔が広がる。この日から白野との交友が始まり、いつの間にかお互いの呼び名も下の名前で

呼ぶ様になっていた。

.....

時は移り、そろそろ下校時刻になる9月頃。恵理は図書委員の仕事で図書室に残っていた。大量の貸出した本の管理と、返却された本を棚に戻す作業が残っていたからだ。

量が多く恵理一人では今日中に終わりそうに無い。他の図書委員は映画会の準備に駆り出されている為、救援は望めない。しかし、ここには一人助っ人が来ている。

白野「恵理さん。本棚の整理が終わりましたよ。」

恵理「ありがとう白野。忙しいのにごめんね。」

白野「いえいえ、気にしないでください。私が好きでやっている事なので。」

白野は普段、学校にいる間は色々な所で手伝いをしている。クラスの行事は勿論、部活の助っ人、委員会の仕事の補助、果ては教師からの頼み事、他多数。嫌な顔どころか嬉々として雑務に励んでいる。

今回もその一環だ。図書委員が人手不足で作業が回らなくなり、恵理が白野に手伝いをお願いしたのだ。

恵理「でも、無理してない？ 他にも機材の運搬とか頼まれてるんだよね？」

白野「あ、それなら先程終わりました、後はこの仕事が他にあればそれをやる位ですかね。」

恵理「え、もう終わってたの？」

生徒も教師も、上下問わず白野を頼る。外面は良いし、仕事も丁寧で早い。運動部からはマネージャーをしてほしいと頼んでいる所もある様だ。バイトの事もあり、それは断っているそうだが。

恵理「取り敢えず残りの作業は明日でも良いから、今日はもう帰っても大丈夫だよ。手伝ってくれてありがとう、白野。」

白野「こちらこそありがとうございました、恵理さん。色々勉強になりました。」

そう言うと、白野は荷物を纏め始める。恵理も残りの書類整理に取

り掛かり、きりの良い所迄進めようと筆を進める。

その時、白野から話しかけられた。

白野「そう言えば、隣のクラスの女子生徒が一人、遠くにお引越しをされるそうですね。」

恵理「ああ、そう言えばそんな話があったね。それがどうかしたの？」

白野「あれって、恵理さんが一枚噛んでますよね？」

恵理「え？」

思わず、手が止まる。動揺が顔に出そうになるが、持ち前の演技力で隠し通す。

その女子生徒は光輝に惚れていた人物だった。その感情に従い光輝に告白したが、返事はNOだった。それでも尚女子生徒は諦めず、度々光輝にアプローチを続けていた。

それを恵理が見逃す筈も無く、その女子生徒を秘密裏に脅迫し、精神的に叩きのめし、二度と光輝に近付かないよう釘を刺したのだ。

結果その女子生徒は不登校になり、程なくして隣の県に移り高校を変えたと言うのがこの事件の顛末だ。無論、光輝はこの件を知らない。否、聞いてはいたが信じなかった。皆が、そんな事をする筈が無い、と。

恵理「一枚噛んでるって、何の事？」

白野「あれ？ 件の女子生徒を脅迫したのは恵理さんですよ？」

バイトの途中で、偶々貴女が変装してその子を脅していたのを見かけまして。多分それが原因だと思ってたんですよ、」

不登校になった時期もその頃ですし、と付け加え、白野は恵理を真っ直ぐに見つめる。その表情は普段と変わらず笑顔だが、瞳は少しも笑っていないかった。果てし無く無感情で、僅かな情動も見受けられない。

緊張と同様で鼓動が早まる中、恵理は顔色一つ変えず、本当に知らない様子で話す。

恵理「わ、私そんな事しないよ？ 体力も無いし、人を脅すなんて事、怖くて出来ないよ。」

白野「あ、今この部屋にいるのは私達だけなので、演技をしなくても大丈夫ですよ？」

気付かれている。恵理の顔が僅かに引きつった。

恵理「え、演技って、何の事？ 私はこれが素の——」

白野「嘘ですね。」

恵理「——え？」

白野「私、これでも読心術には心得があるんです。演技もそうですが、よく他人を見ている人には感づかれますよ、それ。」

今度こそ、恵理の顔に動揺が現れた。もう、取り繕う事は出来ない。相手は完全に裏の顔に気づいている。今迄誰にも見破られ無かったのに、まさか出逢って半年も経っていない世間知らずにバレるとは、思っても見なかった。

恵理「へく、気付いてたんだあ。いつから？」

白野「最初に顔を合わせた頃ですね。言う事は嘘ばかりですし、いつも作り笑いしかしてませんし。結構分かりやすい人なんですよ？」

恵理「…君こそ、随分と良い性格してるね。それで？ デマの元凶として僕を吊し上げるつもり？ 証拠なんて何処にも無いのには？」

白野「今回だけで無く、恵理さんは今迄も何人か手を下してる方がいますよね？ そちらの証拠は上がってるんですよ。脅迫なら其方を使わせていただきます。」

恵理は内心で舌打ちする。いつも自分が観察する側だと思っていたのに、気付かぬ間に観察される側に回っているとは。

無論白野についても探りは入っていた。しかし、わかった事は世間知らずな事とお人好しな事だけだった。素顔を隠す手腕は向こうの方が遥かに上手だ。

だからこそ、最後の言葉が理解出来無い。

恵理「脅迫するなら？」

白野「はい。別に貴女を取って食おうだなんて思っていない。唯聞きたい事があっただけです。」

白野は恵理を弄べるだけの情報を持っている。それをネタに脅せば顎先で使う事も出来れば、単に司法機関に届出て捕らえる事だつて

出来る。

なのに、白野がそれを使ってやりたい事は、唯の質問だけ。余りにも胡散臭い。

恵理「・・・いいよ、別に。お望みの事を聞けばいいじゃん。」

白野「では、お言葉に甘えて・・・何で光輝さんに取り入ろうとしていた人だけを狙っていたんですか？」

言わずもがな、恵理が今迄手に掛けていた連中は全員光輝に気がある女性だけだった。

どうやら白野には、恵理が彼女達を追いやった理由が分からない様だ。

恵理「ここまで来て聞きたいのがそれ？ それだけ調べ上げてたなら分かるでしょ。」

白野「いえ、私にはさっぱり分かりません。」

恵理「・・・洞察力はあるのに、思ってたより鈍いな。」

適当に出任せを言えば見破られる為、正直に話す事にする。

途中、根掘り葉掘り動機や過去の出来事を質問された為、光輝を手に入れた事だけで無く、彼に初めて会った時の事や恵理の家庭環境も含めて洗いざらい言わされた。

白野はそれらが興味深いのか、終始熱心に聞いていた。

恵理「・・・とまあ、こんな所かな。」

白野「そうだったんですか・・・それにしても、知りませんでした。」

恵理「何が？」

白野「恋愛って実在するんですね・・・。」

恵理「そこ!? 君は夫婦とか恋人が何で出来ると思ってるの!？」

白野「ええっと、政略とかデキ婚？」

恵理「うわっ、最低っ。」

白野が恵理の動機が分からなかったのは、恋愛が絵空事だと思っていたからだろう。だから恵理が光輝に好意を抱いている事も、生徒達が光輝に惚れている事にも気付いていなかった。

話を聞き終えた白野は、今迄の人生で一番の衝撃を受けたかの様な表情をしていた。

白野「つまり、恵理さんは天之河さんの恋人になりたいから、彼に惚れていた人達を始末していたんですね。漸く話が繋がりました。」

恵理「・・・それで、君は僕をどうするつもり？　警察にでも突き出す？」

白野「そうですねえ・・・。」

白野は悩まし気に、目線を上に向けて考え込んでいる。

一方、恵理は焦っていた。正直に言つて、この場で白野を手懐ける事も、脅迫する手段も持つてはいない。恵理の今後を左右するのは、白野がどうするか次第だ。

仄暗い、自分勝手な実情を知つたなら、彼女が恵理に協力する事はあり得ない。精々警察等に報告され、少年院に送られるのが関の山だ。

白野「協力しましょう。」

恵理「・・・なんて？」

白野「恵理さんの恋路に協力します。勿論、貴女がやっていた事とは違う、もつと穏便な手段で、ね。」

そう言い、白野はチャラける様にウイंकをする。

あり得ない出来事に、恵理は困惑した。

恵理「協力で、何？　同情でもした？　『辛かったね。私が助けるよ』とでも言うつもり!？」

白野「まさか。過去の事は関係ありません。単純に貴女の恋を応援したいだけです。」

白野は微笑を変えず、あくまで裏が無い様に話す。その表情から真意は読み取れ無い。

恵理「・・・胡散臭すぎる。信用出来ない。」

白野「仕方がありません・・・。協力させてくれないのであれば、この事を皆にバラすしか——」

恵理「脅迫の仕方それかよ!?　ああもうっ、分かったよ、組めばいいんでしょー!」

白野「ありがとうございます♪」

白野が言っている事は、背中から銃を突きつけ、仲間になれと脅す

のと大差無い。恵理は彼女の背後に悪魔の羽と尻尾を幻視した。

白野は満面の笑みで礼を言う。その表情は先程迄の腹黒さを微塵にも感じさせ無い。人の事は言えないが、白野も大概猫被りのようだ。

恵理「それで、君の言う穏便な方法ってのは何なの？ 協力するからには、まともな計画性はあるんだよねえ？」

白野「方法は幾つか検討がついているものがありますが……。端的に言えば先にやったもの勝ちですね。」

恵理「……やるつて、まさか。」

白野が握り拳を作り、人差し指と中指の間に親指を入れている。そのハンドサインが表す事はつまり――

白野「やれば（恋人が）できる。」

恵理「言い方！」

白野「まあまあ、そう言わずに。こう言うのは先に子供が出来た者が勝つんです。既成事実さえ作れば、天之河さんも無下にはしないでしょう。」

恵理「既成事実の何処が穏便なの……？」

白野「何を言いますか、脅迫するより遥かに穏便でしょう。」

恵理「当社比だよ……。」

方や近寄る女を脅す。方や「認知して」と言い寄る。やっている事は何方も大差無い。

しかし、その方法を聞いた恵理は表情を暗くさせる。その瞳は、何やら嫌な過去を思い出しているかの様だった。

白野「おや？ 恵理さんはこう言うのは苦手ですか？」

恵理「あゝ、うん、そうだね……。キスとかそこら辺はやりたいたいけど……。」

昔、再婚相手の男に襲われた事もあり、生殖行為には苦手意識があった。キス等の恋人がする様な行為は平気だが、それとて過去を上書きする為の物でしか無い。

白野「そうでしたか。まあ、私もその手の話は苦手ですし、気持ちには分かります。愛し合っている仲なら、こう言うのは平気だと思っ



のですが……。」

恵理「言い出しつpegが何言ってるの。取り敢えず、後の事はまた別の機会にでも話合おうか。そろそろ時間だし。」

白野「そう言えばそうでした。あ、その前に……。」

白野が恵理に向けて右手を差し出す。手には何も握られておらず、唯手を伸ばされているだけだ。

恵理「……？ 何？」

白野「握手ですよ。契約成立の握手。今後とも宜しくお願いします、す、と言う意味も含めて、ね。」

恵理「…… あっそ。」

困惑した表情のまま、恵理は差し出された手を取る。

これが、恵理と白野の協力関係の始まりだった。

白野「つまり私とエリさんは、以前から協力関係があつたんですね。」

恵理「そう言う事。と言つても、組んでからはゴミ掃除は自粛させられたし、『顔は広くしておいた方が良い』とか言つて色々手伝わされたし、関係を築いてからは散々だったけどね。」

回想に区切りが付き、休憩も兼ねて紅茶を淹れ直す。恵理は強制的に連れ回された当時の事を思い出しているのか、苦虫を噛み潰したような表情をしている。

恵理「利点と言えば情報収集が上手かったから、それには困らなかつた位かなあ。お陰様で、他人の弱味を握るのは容易くなつたし。」

白野「話を聞く限り、昔の私については不可解な事が多いですね。何者だつたんですか？」

恵理「知らない。余り自分の事は話したがらなかつたからね。分かつてるのは精々、表の面が関係を作る為の物つて事ぐらいか。要は唯の八方美人だね。」

恵理は本人が目の前に居るのにも関わらず、嘲る様に笑う。案の定、白野は気にした素振りも見せず、淹れ直した紅茶を恵理の前に置く。先程とは違う茶葉の香りが、恵理の鼻腔を撥る。

白野「次は、私が銃を取り扱っていた時の事を聞かせて下さい。」

恵理「ああ、君が行方不明になつた時の事か。なら、それも含めて話そうか。」

.....

メルド「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

時は遡り、勇者一行がオルクス大迷宮の20階層を攻略していた頃の事。一人の生徒が嫉妬による独断で罫を起動してしまい、生徒達と王国の騎士達は強制的に転移され、石造りの大橋に連れ去られてい

た。

そこ迄ならば何も問題は無かったが、迷宮の罠が生易しい筈も無い。次の瞬間には橋の両端に魔法陣が現れ、片方からは骨格のみの四肢を持つトラウムソルジャーが、もう片方には嘗て最強と謳われた冒険者でさえ歯が立たなかつた魔物、ベヒモスが出現した。

幾ら素のステータスが高いとは言え、勇者一行は未だ迷宮を攻略し始めたばかりの新米だ。トラウムソルジャーならまだしも、ベヒモスは荷が重すぎる。本来ならばベヒモスを抑えつつ、恐怖でパニックを起こしている生徒達を纏め上げ骸骨の集団を殲滅し、退路を確保するのが最善策だ。

しかし、ここで一行のリーダーを務めている光輝の悪癖が出る。ベヒモスを抑えているメルド達を置いて行く事が納得出来ず、光輝は自身の力を過信してベヒモスを討とうと立ち止まる。メルドと雫が離脱させようと説得するが、光輝は聞く耳を持た無い。

その間にもトラウムソルジャーは増え続けている。高いスペックを誇る生徒達が隊列を組み、冷静に殲滅して行けば全員生還出来る。だが一介の高校生が、混乱した状況の中でそれが出来るほど場慣れしている筈も無く、皆が我先にと階段に駆け込もうとし、好き勝手に暴れ回る。

そんな時だった。

バアンツッ！ バアンツッ！ バアン！

この世界では聞くことが出来無い、火薬の破裂する音が響き渡る。それは一般人が聞く機会の少ない、銃声の音だった。

響き渡った音の数だけ弾丸が放たれ、トラウムソルジャーの頭蓋を撃ち抜いて行く。弾丸は全て魔物の眼窩に入り込み、容易く頭蓋を貫き後続の魔物も倒して行く。

パニックを起こしていた生徒達はその轟音で我に帰り、全員が音源の方向に視線を向けた。

鈴「ハクノン？」

そこには、トラウムソルジャーの大軍に向けて、銃を構える白野の姿があった。

生徒達は別の意味で動揺する。白野が銃を持っている事もそうだが、一番の理由はその雰囲気だ。顔からは何時もの微笑が消え無表情になっており、瞳は氷の様に冷め切っていた。自分達の知る白野の人物像とは余りにも掛け離れている。

白野「前衛組は前へ、後衛は下がって詠唱を始めろ。隊列を組み直せ。」

恵理「え…？」

礼「お、お前、何言つて——。」

白野の静かな、それでいてよく響く声が生徒達に投げ掛けられる。近藤が混乱して白野に問い詰めようとするが、言葉が続けられる前に再び銃声が鳴り、強引に黙らせられる。

白野「急げ。豆<sup>銃弾</sup>だつてそんなにある訳じゃ無い。少しの間だけ私が時間を稼ぐから、その間に体制を立て直せ。」

白野は残弾が尽きた弾倉を引き抜き、腰に下げた鞆から新しい弾倉を取り出し、流れる様に装填する。とても素人の動きには見えない、熟練した動作だった。

白野「早くしろ！ 訓練を思い出せ！」

白野の怒号で生徒達は正気に戻り、慌てて隊列を組む。前衛組が最前列で各々の武器を構え整列し、後衛組が攻撃性魔法の詠唱を始める。その後ろに負傷者を下げらせ、治癒魔法を使える者が治療にあたる。何とか思考を取り戻した生徒達は、物の数分で体制を立て直し準備を整える。

その間、白野は銃を撃ち続けた。一発の弾丸が複数の敵を撃ち殺し、戦線を維持し続けている。

恵理「白野！ こっちは用意出来たよ！」

恵理の号令で白野は後退し、隊列の最後尾まで下がる。そして、生徒達の強力な武技と魔法の波状攻撃が敵を殲滅して行く。

着々とその数を減らして行くが、魔法陣からも次々に魔物が出現している為、中々思う様に戦線を進める事が出来無い。終わりの見え無い戦闘が精神を疲弊させ、生徒達の士気が目に見えて下がる。しかしそこに、待ち望んでいた救援が来た。

光輝「皆！ 諦めるな！ 道は俺が切り開く！」

純白の斬撃がトラウムソルジャーの群れを駆け抜け、一気に数を減らす。我等が勇者、光輝だ。彼のカリスマに生徒達が活気づく。

そこへ雫やメルド団長と、一行の主戦力が加わる事で活力が戻る。精神的に立ち直った彼らはそのスペックを遺憾無く発揮し、遂に上階への道に辿り着いた。

メルド「白野、その武器は一体……？」

白野「後で幾らでも話します。それより、南雲さんは？」

メルドの質問を一蹴し、この場に居ないハジメの姿を探す。白野から逆に質問されたメルドは、橋の先で動きを封じられているベヒモスを指差す。そこには石橋に体を沈めているベヒモスと、橋に手をつき“錬成”を繰り返し発動しているハジメの姿があった。

これはハジメ本人の作戦だった。メルド達は負傷者を抱え退路の確保にあたり、ハジメは一人でベヒモスの足止めをする。

もう直ぐハジメの魔力も尽きる。これ以上ベヒモスを封じ込める事は出来無い。しかしそれは、生徒達が加勢しなければの話だ。

メルド「前衛組！ ソルジャーどもを寄せ付けるな！ 後衛組は遠距離魔法準備！ アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

メルドの怒号で、生徒達は気を引き締め直し詠唱を始める。中には階段を未練がましく見つめる生徒もいたが、団長の怒声により視線を戦場へと戻す。

しかし突如、後ろの存在に気付いたのか数体のトラウムソルジャーが振り返り、ハジメがいる方向に走り出す。標的は言うまでもなく彼だろう。

魔力の尽きかけたハジメに魔物の対処は荷が重い。しかし、救援に向かおうにも道は既に魔物で埋め尽くされており、ハジメが居る場所に向かう事は出来無い。

白野「暗き炎渦巻いて 敵の尽く…… 恵理さん続きを。」

恵理「私が言うの!？」

白野は道を作るべく、腕を前に出し詠唱を始める。しかし、呪文を

覚え切れておらず途中で途切れた。恵理の助力もあり詠唱を完成させ、群れに向けて炎の竜巻を放つ。

螺旋状に渦巻く炎は、トラウムソルジャーを巻き上げ突き進む。多くの魔物を吹き飛ばし橋から落としていった。白野は少なくなった群れを滑り込む事で通過し、ハジメに向かって走って行った。

銃の残弾は少ない。白野は鞆からトレンチナイフを取り出し、駆け抜けた。剣や槍は使えないが、これだけは使える。

今度は白野に気付いたのか、階段側に振り返る。直後ナイフに付いているフィンガーガードによる、渾身の右ストレートが放たれる。拳が綺麗に魔物の顔に直撃し、そのまま文字通り殴り飛ばす。そして次の標的の腹にケンカキックを入れ、橋から蹴り落とす。

トラウムソルジャーが一体武器を振り下ろして来るが、白野は魔物の武器を持つている手を掴む事で攻撃を逸らし、逆にナイフで背骨の繋ぎ目を狙い切り落とす。

更に向かって来た魔物を、ラフファイト宛らな拳を放ち地面に倒し、顎に蹴りを入れて踏み砕く。下顎が砕け散り辺りに散らばる。尚も魔物は動き出そうと抗うが、白野が素早く銃を引き抜き、銃弾を頭に叩き込まれ即死する。

ハジメ「は、白野さん、意外と荒っぽいね？」

白野「離脱する。急ぐぞ。」

顔を引きつらせてたじろぐハジメに、手持ちの魔力回復薬を飲ませる。

既に後衛組の詠唱が終わり、魔法の一斉掃射が始まっている。殺傷能力のある攻勢魔法がベヒモスを捉え、無傷ではある物の足止めとなっている。白野は退避するべくハジメの腕を掴み、階段へと走り始めた。

その時、白野は気付けなかった。火球が一つ、自分達に向かって飛んで来ている事に。

ハジメ「避けて!!」

白野「!?!」

ハジメの警告で、白野は慌てて腕を離し彼を突き飛ばす。直後、火球は白野とハジメの間に着弾した。衝撃で白野の手から銃が落ち、橋から奈落へと落とされる。

ハジメは吹き飛ばされるだけで済んだが、火球は白野に直撃し、階段側に大きく吹き飛ばす。その衝撃で意識を失ったのか、白野は倒れたまま動かない。ハジメは立ち上がり白野に駆け寄ろうとするが、三半規管をやられ思うように動けない。

そして、とうとうベヒモスが動き出した。角を赤熱化させ、ハジメに突進する。力を振り絞りその場から飛び退く事で何とか避けるが、ベヒモスの突進によって橋に亀裂が入る。度重なるベヒモスの衝突と錬成による変形が、橋の耐久性を大きく下げていた。

そして遂に橋が崩落し、ベヒモスと一人の生徒が奈落に落とされてしまった。

.....

香織「離して! 南雲くんの所に行かないと! 約束したのに!

私があ、私が守るって! 離してえ!」

雫「香織っ、ダメよ! 香織!」

飛び出そうとする香織を、雫と光輝が必死に羽交い締めにして食い止める。それでも尚、香織はハジメを助け出そうと尋常ではない力で引き剥がそうとする。

光輝「香織! 君まで死ぬ気か! 南雲はもう無理だ! 落ち着くんだ! このままじゃ、体が壊れてしまう!」

香織「無理って何!?! 南雲くんは死んでない! 行かないと、きつと助けを求めてる!」

光輝達は何とか落ち着かせようとするが、香織は更に反発して後を追おうとする。周りの生徒達もどうすれば良いか分からず右往左往する。

「... 暗き炎渦巻いて 敵の尽く焼き払わん ゲホッ、灰となりて大地へ帰れ “螺旋”。」

その時、今も尚沸き続けていたトラウムソルジャーの群れに、炎の竜巻が上がった。残りの魔物が全て焼き払われ、骨で敷き詰められていた魔法陣が露出する。彼女は唯一手元に残ったナイフを突き立て、魔法陣を破壊する。これでもう魔物が現れる事は無いだろう。

光輝「白野!?!」

香織「白野ちゃん!!」

そこに居たのは、火球の直撃を喰らい満身創痕となった白野だった。上着は火が付いたからか脱ぎ捨てられ、体には所々火傷を負っている。橋が崩れた時、白野は崩壊していないギリギリの所に居た為、転落していなかったのだ。

突然の出来事に気を取られた光輝達は、思わず拘束を緩めてしまう。香織はその隙に抜け出し、傷を負っている白野に近付き治療にあたる。

香織「白野ちゃん、大丈夫!?!」

白野「思いの外、な…。南雲さんは？ 何で居ない?」

白野は気絶していたからか、事の一部始終を知らない様だ。香織は最低限の治療を終えると、白野を置いて崩落した橋に向かおうとする。しかし、直ぐに腕を掴まれる。

白野「待て、何処に行く気だ。」

香織「離して！ 南雲君を助けないと——!?!」

香織は次の瞬間、強引に腕を引かれ橋から連れ戻される。そして、白野の左腕で殴り飛ばされた。肉が叩かれる音が響き、突然の暴行に生徒達が怯える。

香織は対抗しようと起き上がるが、その前に胸倉を掴まれ地面に叩きつけられる。

白野「話を聞かせろ。あの後、何があった?」

香織「な、南雲君が、魔物から逃げようとして…。でも、橋が崩れて、南雲君が…。そこから、落ちて…。っ!」

話している内に感情が昂ったのか、悲痛な顔で泣きながら説明する。しかし白野は、その様子に微塵も表情を変えず、無表情で話を聞いていた。



白野「南雲さんが、落ちた。それだけ？」

香織「それ……だけ？」

白野「途中で致命傷を負ったとか、殺された訳じゃ無いんだな？」

香織「そんな事無い！ 南雲君は最後まで、足掻いて……！」

白野「なら、まだ生きている。」

香織「え……？」

白野の宣言に、香織は呆然とした顔を向ける。香織はまだ受け入れられていないが、あの高さから落ちれば人は助からない。誰がどう考えても、ハジメは死んでいる。

それでも白野は言い切った。表情こそ無いが、その目には歴とした覚悟と意思が見られる。生きていると盲信している訳では無い。それ程の覇気が感じられた。

白野「遺体を見ていないなら、そいつはまだ死んでいない。だから、ここで死に行くのはやめろ。意味が無い。」

香織「白野……ちゃん……。」

白野「戦え、そして探し続けろ。今ここで進んでも力不足だ。だから、一度戻って鍛え直せ。そして南雲さんを見つけ出せ。いいな？」

白野の言葉で、絶望していた香織の瞳に希望が宿る。それを確認した白野は胸倉から手を離し、香織の手を取り立ち上がらせる。

香織「……わかったよ、白野ちゃん。絶対に、南雲君を助ける！」

白野「……それで良い。早く離脱しましょう。まだここは安全ではありません。」

白野の口調が戻り、いつもの雰囲気に戻って来る。その変化に皆がたじろぐが、今はそんな事を気にしている暇は無い。急ぎ撤退に向けて行動する。光輝とメルドが先導し、生徒達を連れて階段を登り脱出した。

階段を登り切ると、その先に魔法陣が描かれた壁が現れた。メルドが魔法陣に魔力を込め、仕掛けを発動させる。すると壁が動き奥に続く道が現れた。そこは一行が転移される前の、20階層の部屋だった。

帰って来れた事に全員が安堵し、生徒達はその場にへたり込む。し

かしここは未だ迷宮の中。いつ魔物に襲われるか分からない。今の彼等の精神状態では敵うものも敵わない。

メルドは生徒達を鼓舞し立ち上がらせた。光輝も疲労を隠して先導する。そして道中の敵を最低限倒しながら出口を目指した。

——ウオオオオオオン……

光輝「!?! 今のは!?!」

メルド「喋るな!」

しかし、恐れていた事が起きた。突如魔物の遠吠えが洞窟に響き渡る。光輝が動揺し声をあげるが、メルドは魔物に気付かれると判断し光輝の口を塞ぐ。

その声は、この階層に居ない筈の魔物の物だった。この階層に狼型の魔物はいない。そして遠吠えを上げたという事は、群れを集めているか、周りの群れを威嚇しているという事だ。つまり——

気付かれた。彼等の後ろから、複数の足音が近付いている。四つ目の狼の群れが、生徒達に押し寄せていた。

メルド「逃げろ!」

団長の怒声が引金となり、生徒達は一斉に走り出す。メルド達騎士はここで群れを抑えようとするが、四つ目狼は騎士を無視して生徒達に襲い掛かる。負けじと追撃しようとするが、別の四つ目狼が騎士達を囲み、素早い動きで翻弄する。

その間にも、生徒達は出口に向けて走り出す。直ぐ後ろには四つ目狼が牙を剥いて噛み付こうとしている。その行動に更に怯え、騎士達と分断された事にも気付かず、ガムシヤラに走り続ける。幾つかの部屋を抜け、洞窟を必死に駆け抜けて行った。

後ろで、助けを呼ぶ声に気付かぬまま——

命辛々、生徒達は迷宮の出入口に辿り着いていた。複数の階層を全力で走り抜けたのと、先の戦闘による消耗で全員が疲労で倒れ伏し、体力の回復に努めていた。

そして数分後、メルド達騎士団も無事出入口に到着し、生存確認を行う頃には何とか落ち着き始めていた。

恵理「・・・え？」

鈴「エリリン、どうしたの？」

そこで漸く、各々が異変に気が付いた。一人、生徒が足りない。ハジメの分を引いたとしても、数が合わない。ここに居ないのは――

恵理「・・・白野は？」

メルド「・・・まさか、お前達、白野を見ていないのか？」

雫「嘘でしょ？ さっきの襲撃の時に・・・!？」

白野だった。辺りを見回したり、誰か彼女を見ていないか確認するが、誰も知らない。騎士達が直ぐに引き返し白野を探しに行ったが、結局彼女を見つける事は愚か、足取りを掴む事さえ出来なかった。

この日勇者一行は、生徒を二人失った。

.....

恵理「そして一ヶ月後、僕達は君に再会して、たった今南雲の無事が分かった。めでたく全員生きていたって訳。」

白野「しかし、肝心の私が行方不明になった理由が分かりません。」

恵理「まあね。多分あの日襲い掛かって来た四つ目狼とフランケン野郎が関わってるんだろうけど、詳細は魔族を調べないと分からないね。」

話が終わり、白野は内容を頭の中で纏めていた。過去の自分について分かったのは、誰にでも助力していた事、素顔と表の面が違う事、地球にいた頃は一般人の筈なのに、やけに戦場慣れしていたのと武器を隠し持っていた事くらいだ。判明した事は多いものの、不可解な点が多い。結局記憶を失う前の自分の事ですら分からないままで。

もう夜も更けて来た頃だ。これ以上会談を続けると明日の予定に支障を来す。白野は恵理に情報提供のお礼を言うと、席を立ち部屋に戻ろうとした。

その時、白野の鞆からヴァイオリンの様な弦楽器の音が聞こえて来た。その旋律は、何処からどう聞いても「ツイゴイネルワイゼン」の

物だった。恵理が突然鳴り始めたクラシック曲に驚いていると、白野は鞆から何やら水晶玉の様な物を取り出した。

白野「はい、ハクノです。」

恵理「今の着メロなの!？」

愛子『あ、珍珠木さんですか!? 助けて下さい!』

そして、水晶玉に話しかけ始めた。どうやら連絡して来た人物は、作農師として色々な場所へ飛び回っている愛子の様だ。

この水晶玉は、清水が何か起こした際に白野が愛子達に渡していた、連絡用のアーティファクトだ。何やら慌てた様子で白野に助けを求めている。そして二人は、愛子の口から出た言葉に首を傾げる事になった。

白野「何があつたんですか?」

愛子『清水君が、清水君がハムスターになってしまったんです!』

### 13. 変化

事の発端は夜、愛子達が懇意にしている宿にて。

あの壮絶な拷問の後、清水は休養も兼ねて一人部屋に入れられていた。白野が再生魔法で傷を治していた為、物理的な怪我は一つもしていない。

唯、心に負った傷は別だ。白野にしてやられた事により受けた心的外傷は計り知れず、清水は虚空を見つめたままブツブツと何かを呟くだけで、愛子達が話し掛けても上の空だった。結局清水は夕食になっても食堂には降りて来ず、以来部屋に閉じこもっていた。

愛子「清水君……。」

見兼ねた愛子は注文したニルシツシルをトレーに乗せ、清水の部屋に向かった。

正直に言えば愛子自身も気を病んでいた。清水の思いに気付けなかった事、白野が清水を殺し続けた事、彼を助けられなかった事、自責と後悔と白野に対する恨みが、愛子の心を蝕んでいた。

しかし皮肉な事に、白野のお陰で清水が生きているのも事実だ。生きてさえいれば、やり直す事は幾らでも出来る。持っている食事としての一環だ。気休め程度にしかならないかも知れないが、何か美味しい物を食べたら彼も少しは気力が戻るかもしれない。幻想の如き僅かな希望と、清水を助けられなかった罪悪感を胸に抱き、愛子は香辛料の香りが効いた、香ばしい湯気の立つそれを抱え部屋の扉を叩いた。

愛子「清水君、居ますか？ 先生です。」

ノックしながら声を掛けるが、部屋から返事は返って来ない。眠っているのか、未だ今日の悲劇に魘されているのだろうか。仕方無く愛子は扉を開け、部屋に入る事にした。

愛子「清水君……？」

しかし、部屋に清水の姿は無かった。部屋も荒された様子は無く、ベッドの上は平たい事から、人が潜り込んでいると言う事は無い。まさかまた失踪したのかと焦り、窓等を確認するが、そこも鍵が掛かつ

ているままで、荷物も愛子達が部屋に運び置いた場所にあるままで。愛子の心に焦りが募り、冷汗が流れる。今の清水の精神状態で、何を起こすかは検討も付かない。そこに二度目の失踪だ。遺書も残さず自殺か、町から単独で逃走したのか、次々と嫌な憶測が浮かんで消える。

愛子は慌てた様子で部屋中を探し回り、最後にベッドの掛け布団をめぐり上げた。

愛子「え？」

そこには、清水の来ていた服のネックから頭だけ出したまま、両目を瞑り安らかに眠っている、ハムスターの姿があった。

種別はジャンガリアンに近いだろうか、黒と灰色の背中模様、白い腹毛が体中を覆っており、首の右側辺りに独特な刺青模様の毛が入っている。

何故こんな所に小動物がいるのか、と言うか何で清水君の服に潜っているのか。その疑問がまず浮かぶだろう。

愛子「か、可愛いい〜〜！」

そんな事は関係無い。大事な今は今、自分の目の前に、毛玉の妖精が可愛らしい寝顔でスヤスヤと眠っていて、愛らしい姿を見せている事だけだ。今の愛子の頭にはそれしか浮かばなかった。

その姿を見ているだけで、心を蝕んでいた暗い感情が綺麗に消し飛ぶ。愛子の黄色い声が聞こえたのか、親衛隊の面々が集まって来た。

優花「愛ちゃん先生？ どうしたんですか？」

愛子「あ！ 園部さん達、見て下さいよこれ！ とつても可愛いですよ！ あ、でも静かにしましょう。起きてしまったら台無しですからね！」

今の今まで騒いでいた本人が、口の前に人差し指を立てる。園部達は童心に戻っているかの様に目を輝かせ、今にも飛び出さんばかりに喜んで愛ちゃん先生が可愛いと思いつつ、愛子が指差すベッドの上に視線を向ける。

奈々「わあ、可愛い〜！ 何これ、ジャンガリアン？ めっちゃやばい！」

妙子「わ、寝ながら頭搔いてる！ 凄く可愛い！」

親衛隊も眠る小動物を見て陥落し、同じ様に黄色い声を上げながらハムスターを愛でる。彼女達の頭からは、清水の事がさっぱり消え去っていた。

昇「あれ？ この模様、何か見覚え無いか？」

淳史「模様？ あ、本当だ。これって… 玖珠木さんが清水に付けた刺青と同じやつじゃね？」

愛子「え？」

愛子が玉井の発言を聞き、ハムスターの模様を見つめる。確かにこの模様は、清水が白野に付けられた物と一致する。形も模様がある位置も、全く同じだ。

そこで漸く清水を探していた事を思い出た。教師としての根性と、清水を忘れていた事から来た焦りを發揮して頭を高速回転させる。本人の姿は見えない、抜け出した様子も無い、部屋が荒された痕跡も無い、そしてベッドの上にはその場で体だけ無くなった様に置かれた清水の服と、眠っているハムスターがいる。

愛子「え、嘘ですよ？ まさか……………」

明人「そのハムスターって……………」

その時、ハムスターが目を覚ました。ゆっくりと目を開けると、意識がハッキリしたのか視線が愛子達に向く。そして彼女達を見た瞬間、怯えた様に体を震わせると、物凄い速さでその場から駆け出し、枕の裏に飛び込んだ。

明らかにこちらを恐れている。野生のハムスターとて、こんな風な態々怯えてから逃げ出す様な人間臭い反応はしない。そしてその様子が、昼間の尋問されている清水の姿と重なる。

淳史「し、清水が……………」

優香「ハムスターになっちゃった……………」

……………

愛子「玖珠木さん玖珠木さん玖珠木さん!!」

妙子「愛ちゃん、それ詠唱しないと使え無いから！」

ハムスターとなった清水を籠に入れて捕獲し、愛子は白野に渡された通信用アーティファクトを使い連絡を取ろうとする。が、焦りと混乱で先走り水晶玉を叩いて起動しようとしていた。

最早白野が清水にした事を気にしている場合では無い。今この場において、清水の身に起きた事を解決出来そうな人物は彼女しかいない。妙子の言葉を聞き慌てて詠唱を始め魔力を込める。すると数秒後に水晶玉から白野の声が聞こえて来た。

白野『はい、ハクノです。』

愛子「あ、珍珠木さんですか!? 助けて下さい!」

白野『何があつたんですか?』

愛子「清水君が、清水君がハムスターになつてしまつたんです!」

白野『エリさん、はむすたーとは何ですか?』

恵理『は、え? 私に聞くの? えくと、ウオームラットつているでしょ? 王国で飼育用に売られている奴。見た目はあれに近いかな。』

愛子「え? 中村さん? 何で珍珠木さんの近くに?」

ハジメ達から聞いた話では、白野は今日の夕方に町を出た筈だ。幾ら車より足が早いとは言え、ホルアドに着くには余りにも早すぎる。

白野『ユキトシさんがウオームラットになつたとおっしゃいましたか。一先ず状況を教えて頂けませんか?』

白野に質問され、事の顛末を伝える。生徒が突然動物に変化した。正直言つてかなり荒唐無稽な話だ。とはいえ、確証が無いにしろそう説明するしか無いと言うのも事実だ。素直に今判明している事を話していく。

白野『：： 分かりました。原因を探りますので今から其方に向かいます。少々お待ち下さい。』

愛子「え、今からですか? もう夜も遅くなりましたけど、大丈夫なんですか?」

白野『ご心配無く。直ぐに着きますので。それではお休みなさい、エリさん。』

恵理『え? あ、お休み白野。』



急に話を振られたからか、吃りながら返事をする恵理。その言葉を最後に通信が切れる。白野は直ぐに着くと言っていたが、どう言う事

白野「お待ちせ致しました。」

愛子「へあ!?! く、玖珠木さん!?!」

優花「何か出て来た!?! 何なの今の光!?!」

突然光の膜が親衛隊の前に現れ、その中から白野が現れた。王国の魔道士ですら知らない魔法を見て、全員が驚く。

愛子「い、今のは一体何ですか?」

白野「„界穿”と呼ばれている物です。簡単に説明すると、空間魔法による転送魔法ですね。」

愛子「最初からそれを使いましょうよ!?! 北の山脈から町に戻る時にそれ使えば私達だけ戻せましたよね!?! 何で提案した時先に投げ飛ばす方が出て来たんですか!?!」

淳史「と言うか、トータスにそんな高レベルな魔法あったんだな……。」

白野が空間魔法を使えると知っていたならば、ハジメに頼らずにウイルの所にも向かう事のみならず、清水に直接会う事も出来ただろう。最も、清水の場合は会った所でそのまま殺されていただろうが。今迄火球や突風を引き起こす等の原始的な魔法しか知らなかった玉井の眩きがひっそり聞こえて来るが、白野は気にせず問題に入っ

た。

白野「ユキトシさんと思いきネズミは何方に居ますか?」

愛子「は!?! そうでした!?!」

.....

白野が調査を始めて数分たった頃。その間、彼女は鞆から取り出した魂結晶と、ハムスターが入っている籠を見比べていた。ハムスターは白野の視線に怯えて逃げ出そうとするが、籠からは抜け出す事が出来ず隅で縮こまるのみに終わっていた。

白野「確かに、ユキトシさんですね。」

愛子「え、分かるんですか!? じゃあ、そのハムスターは…。」

白野「はい、ウォームラットの影が重なって見えますが、間違い無くユキトシさんその人でしょう。」

愛子「えっと…影、ですか?」

白野「私にはそう見える、それだけです。恐らく皆様には見えない物かと。」

——如何やら騎士殿には、只人には見えない物を見ているようじやな。お主の視界には物理的な物ではなく、何か別の物が写っているのやも知れぬ。

その言葉を聞き、先日のティオの推測を思い出す。もしかしたら、今彼女が見ている物がそうなのだろう。愛子が見た限り、白野が嘘をついている様子も無い。だが、次の白野の発言で表情を暗くする羽目になった。

白野「恐らくユキトシさんがこの様な事になった原因は、私が魂結晶に彼の魂を入れたせいでしょう。」

愛子「珍珠木さんが、ですか? でも、どう言う原理で…?」

白野「説明するには、まず魂の仕組みと肉体との関係性を説明する必要があります。」

白野は鞆から紙とペンを取り出す。分かりやすくする為に図を作成するつもりなのだろう。

白野「魂と言うのは、三つの非物質的な要素で構成されています。皆様はどの様な物で出来ているか知っていますか?」

淳史「え? あゝ、何かこう、精神とか、霊体みたいな?」

白野「大凡その通りです。」

白野が紙に三つの文字を書いていく。それぞれトータスの文字で、記憶、精神、エーテル、と書かれている。

白野「今回の説明におきまして、先ず記憶と言うのは、主に知識、経験と呼ばれる物の総称です。例としてあげるならば、知識であれば魔法の詠唱、経験とは剣術等の技術となります。」

優花「つまり、今迄体験して来た事の記録って事?」

白野「はい。例えるならば個人の記録が綴られた本と言った所で

す。」

記憶の文字の下に本の絵が追加される。筆が次の文字に移り、説明が続く。

白野「次に精神についてですが、これは文字通り喜怒哀楽等に分類される“心”の事です。凡ゆる感情が精神を作り上げており、その人の人格を構成する重要な物です。」

精神の文字の下に、恐らく心を表しているであろうハートマークが描かれた。

奈々「じゃあ、この“エーテル”って言うのは？」

白野「それは魂を構成する基盤となる物です。魂を非物質に足らしめる、或いは生物が保有する非物質全ての情報を記録する大元の存在、それがエーテルです。」

エーテルの文字の下に人の輪郭が描かれる。その絵の胸の辺りにハートが、頭の中に本が描き加えられた。

白野「つまり、この三つが交わる事で、初めて魂が出来ます。これが魂の概要です。」

優花「その、魂に付いては分かったけど、それと清水がハムスターになった事とどう関係があるの？」

白野「魂を構成している要素は、他の要素にも影響が現れる様に出てくるんです。強いトラウマが精神に影響する事もあれば、個人の価値観精神によって経験が変わる事もあります。お互いがそれぞれに影響をもたらす、それは肉体についても言える事です。」

魂の絵画の横に、新たに人が描かれる。肉体を表しているのか、線がハッキリと描かれている。

白野「生物と言うのは、育った環境で大きく生態を変える事もあります。分かりやすい例を上げると、人が狼に育てられると、その人は体毛が身体中を覆う様になり、嗅覚が鋭敏になる等、本来持ち得ない狼の特徴が出る様になります。」

その絵の中に、犬の絵が入る。すると白野は人の絵を消し、犬の絵を覆う大きさの、新しく犬の絵を描く。中身も体も犬の絵に変化した。

白野「これは記憶に狼の要素が加わった事で魂その物が変質し、肉体にまで影響が及んだ事で起こる現象です。ユキトシさんの体にかきた異変は、これの事例と一致します。」

明人「て言うことは、清水の魂にハムスターの情報が混じったって事か？ でも、そんなの何処から？」

白野「その原因がこれです。」

そう言うと、黒い魂結晶を机の上に置いた。それは白野が清水から吸い出した、彼の魂が込められた結晶だった。昼間の惨劇が思い出され、愛子達の表情が暗くなる。

白野「この結晶の中には、どうやらウォームラットの魂が込められていた様です。恐らくこの魂とユキトシさんの魂が混ざった事で、彼の魂にネズミの記憶や精神が書き加えられ、肉体が変化したんでしょう。」

淳史「混ざったって、清水の魂は大丈夫なのか？ 人格が壊れたりとか……。」

白野「小動物の魂は人の魂と比べて脆弱です。清水の魂に度を越した影響は無いでしょう。最も、このまま放って置けばその限りではありませんが。」

白野が言うには、人と小動物では魂の質量が違うらしい。二つの魂が混ざれば、当然量が多い方が勝り、少ない方は吸収される。つまりコットンラットの魂は、全て清水に吸収されたと言う事だ。

しかし、症状が肉体の変化だけで済んでいるのは、魂が完全に混ざり切っていない今だけだ。このまま融合が続けば、運が悪ければ清水の自我が消失し、完全にウォームラットに生まれ変わるだろう。

愛子「と言う事は、最初に言った通り今回の異変の元凶は……。」

白野「はい、私になります。」

まるで明日は雨になると言う様な気軽さで、悪びれる様子も無く自白した。愛子の表情が僅かに険しくなる。

白野「なので私が責任を持ちます。それに、ユキトシさんを元に戻す方法があります。ネズミの魂さえ取り除けば肉体は人の形に戻るでしょう。」

愛子「え、清水君ハムスターじゃ無くなるんですか？」

奈々「え、もうハムスターに戻れなくなるの？」

昇「おかしくないか!? そもそも人に戻す為に玖珠木さんと呼んだら!? 何で先生までそんなに哀しそうなんだよ！」

どうやら女性陣は、清水ハムスターが相当お気に召した様だ。清水が殺された時よりも深く絶望した表情をしている。愛子だけは「いけない! そうでした!」と、何とか正気を取り戻していたが。

淳史「でも、人に戻さなかったら清水が壊れるかも知れないんだろ? 他に方法なんて——」

白野「あります。」

淳史「あるの!?!」

白野「はい。違う精神が混ざる事が問題なだけであって、それさえ取り除けば、ユキトシさんは任意で人とネズミの姿に変化する事が出来る様になります。勿論、肉体の方にも多少手変性魔法を加えなければなりません、それも大掛かりな物ではありません。」

思わぬ援護射撃に男性陣は顔を引きつらせ、女性陣は顔を輝かせる。可愛い物への執念に駆られた女性達を止める術を、男達は持ち合わせていなかった。

作業は白野が全て執り行うと申し出た為、親衛隊達は明日に備え休む事にした。白野に任せるのは不安が残ってはいたが、自分達に出来る作業がある筈も無く、結局彼女に一任する形となった。

.....

愛子「玖珠木さん、少し良いですか？」

親衛隊達が部屋に戻り、小一時間程時間が経った頃。愛子は清水に渡す筈だったニルシツシルを持って、白野が作業の為に居座っている食堂に来ていた。深夜という事もあり、愛子達以外に人は居ない。

白野「どうぞ。どうかしましたか？」

愛子「その、お腹空いてませんか? 清水君の分のニルシツシルを注文していたんですけど、余らせてしまいました。折角だから二人で分けて食べませんか？」

白野「貰います。作業も終わりましたので、明け方にはユキトシさんも人に戻っているでしょう。」

ニルシツシルは既に愛子の魔法で温められている。白野は愛子の言葉に頷くと、作業を中断して机の下に仕舞われていたスプーンを取り出した。

愛子は白野の対面に座り、白野から差し出されたスプーンを受け取ると、ニルシツシルと米を掬い口に含む。時間を掛けて煮込まれた肉が口の上で崩れ、特有の味が、慣れ親しんだ故郷の味が口の中に広がる。

愛子「… 白野さんは、どうして清水にあんな事をしたんですか？」

白野「あんな事とは、清水を何度も殺した事ですか？」

愛子「… つ… つ… そうです。」

こんな時間まで起きてでも白野と二人きりで会話をしているのは、如何しても彼女に問い質したかったからだ。お互い、腹を割って話を付けたかった。

白野は食事を続けながら、質問に答える。

白野「先生が望まれていた、ユキトシさんの保護の為です。」

愛子「… 保護？」

白野「はい。先生はユキトシさんに会いたがっていた様子でしたので、彼を見つけ次第貴女の元に連れ出すつもりでした。」

本来ならばそれだけで済んだ筈の話だった。しかし清水は魔人族と取引し、利己的な理由で愛子を殺そうとしていた。

白野「連れ戻したせいで貴女が死んでしまえば、彼を連れ戻した意味が無くなります。それでは貴女を助けられません。」

愛子「助けつて、もしかして私が清水君を探していた事ですか？」

白野「そうです。ですがユキトシさんは此方に危害を加えて来たので、あの様な手段を取らせて頂きました。」

愛子「それって… 玖珠木さんは、私を助ける為に… 清水君を殺したと言う事ですか？」

白野「結果的に言えば、そうなります。」

愛子は清水を探していた。それを聞いた白野は、清水の意思に関係

無く愛子の元に連れ戻した。要は助けを求めた人（愛子）の為に、目標の人物（清水）を犠牲にしたと言う事だ。

白野「そのつもりだったんですが、如何やら私は先生を助けられない様です。」

愛子「・・・え？」

白野「貴女の表情を見れば、それくらいは私でも分かります。とても、哀しそうな表情をされていますので。」

愛子は俯いていた顔を上げる。白野はいつの間にか食事の手を止めて、愛子の目を見ていた。愛子には彼女の表情から感情は窺えないが、それでも責任を取ろうとしている事だけは分かった。

白野「私はあの時、どうすれば良かったんですか？」

愛子「それは・・・。」

白野「私は、どうすれば貴女を助けられますか？」

愛子の心から少しづつ暗い感情が消え、思考が晴れて行く。白野は今、償おうとしているのだ。自分がした事の責任を、背負おうとしている。

愛子「私は・・・私は玖珠木さんに、清水君の事も助けて欲しかったんです。彼を、救って欲しかった。でも、もうそれは過ぎてしまった事でもあります・・・。」

ならば教師として、彼女の先生として道を示さなければならぬ。ここで白野を非難してしまえば、自分は二度と生徒達に顔向け出来なくなる。

愛子「だから玖珠木さん、誰かを助けたいのなら、誰かを切り捨てる様な事はしないで下さい。勿論、それが出来無い場合もあります。が、それでもあえて見捨てる様な事は、もうしないで下さい。先生との・・・約束です。」

愛子の言っている事は理想論だ。それは彼女自身も分かっている。それでも、白野にはその道を目指して欲しかった。それが、白野が笑って過ごせる未来に繋がっている事を信じて。

白野「・・・誰かを助けると言う事は、他の誰かを捨てると言う事です。先生が仰っている事は、幻想に等しい物です。」

愛子「う…：、そうですね。玖珠木さんもそう思われますよね…。」

白野「ですが、それを目指して進む事は出来ます。」

白野が愛子の手を、両手でそつと握る。死人の様な冷たい手だが、それでも愛子は振り払う様な事はしなかった。

白野「先ずは、それを目標にします。」

愛子「玖珠木さん…：。ありがとうございますー！」

白野の手を握り返し、満面の笑みを浮かべる。自分の言葉が、大切な生徒に届いた事に。彼女とわかり合う事が出来た事に、この時愛子は喜んでいた。

その言葉が、後に彼女を傷付ける事に気付かずに。皮肉にも、自分の言葉で意図せず報復を果たす事になるとも知らずに。



## 14. 深淵

光輝「ふう、次で90層か……この階層の魔物も難なく倒せるようになったし、迷宮での実戦訓練ももう直ぐ終わりだな。」

時は進み、オルクス大迷宮の89階層。勇者一行は着々と攻略を進め、迷宮攻略も終盤に差し掛かっていた。

とは言え、この階層を含め以降は前人未到の危険な場所だ。今いる階層の敵を一掃し、次の階層に移る前に消耗品の確認と負傷者の回復を行う。

鈴「カツオリくん!! そんな野郎共じゃなくて、鈴を癒して〜!ぬっとりねっとり癒して〜。」

香織「ひやわ! 鈴ちゃん! どこ触ってるの! っていうか、鈴ちゃんは怪我してないでしょ!」

傍らであられも無い光景が繰り広げられているが其方には視線も向けず、回復要員を兼任している白野は黙々と治療を進めていた。

白野「他に怪我はありませんか? コウスケさん。」

浩介「ありがとうございます、玖珠木さん! 俺に気付いてくれるのは貴女だけだっ。」

腕にあった傷が治ると、遠藤は歓喜に震えながらを両手で白野の手を取っていた。

白野が治療している者の中には、影が薄い事で有名でありながら、直ぐに忘れられる永山パーティーの一員である遠藤もいた。この数ヶ月間、白野は皆から時折忘れ去られる影の薄さを誇る彼を、ただ一人忘れる事無く接していた。何故彼女は遠藤に気が付けるのかは、本人曰く「単純に、視界に写るから」との事だ。何がともあれ自分に気付ける貴重な存在が出来たと、遠藤は咽び泣く勢いで喜んでいった。

一通り準備を整えた勇者達は先へと進み、90階層に到達する。早速歩いて来た道筋を記録しつつ、探索を始めた。到達した階層の節目という事もあり、罨や敵に警戒しながら進むが、時間が経つにつれて一人、また一人と怪訝な表情をする者が増えて行く。

探索を始めて数時間経っているのに、罨は愚か魔物の一匹も現れ

無い。視界だけで無く、感知系スキルや魔法を用いた探知を掛けても、一切索敵に掛からなかった。これまで多くのフロアを戦い抜いた彼等だが、この迷宮の性質上こんな現象は起こり得無い。

彼等の精神に困惑が募る中、恵理が突然、代わり映えし無い部屋の壁を指差した。

恵理「あの壁、何かおかしくない？」

光輝「どうした、何か見つけたのか？」

恵理「うん、あそこの壁だけ周りとは色が違う。」

開けた部屋の壁に、恵理が言う通り一部変色した壁が見えた。灯りを近づけ良く見比べて始めて気付ける程の違いでしか無いが、人が一人通れるだけの範囲で色が変わっていた。

白野「どうやらこの壁だけ、新しく作り直された様ですね。この部分だけ材質が間新しくなっています。」

雫「それって……つまり、誰かがこれを作ったという訳ね？」

雫の発言で、一行の間に緊張が走る。その言葉の通りならば、自分達以外にこの階層に来た者がいた事になる。人族で此処に到達した者はいないし、魔物に周りに合わせた壁を作る知能も無い、だとすれば、この壁を作ったのは――

光輝「まさか、魔人族が？」

白野「可能性としては、あり得るか。」

龍太郎「でもよお、態々こんな所まで来て壁なんて作るか、普通？」

香織「龍太郎君、幾ら暇でもここにきて壁だけ作るなんて事しないよ？」

ずれた事を言い始めた龍太郎に、香織の突っ込みが入る。どういう事が未だに理解出来ないのか首を傾げる脳筋に、白野から解説が入った。

白野「壁の全体の長さから察するに、この区画はそれなりの大きさがあります。壁を壊して中を掘り進めば、時間は掛かりますがある程度の広さを持った部屋を作る事が出来る筈です。」

龍太郎「あゝ、つまりあれか？ 壁の後ろに隠し部屋か何かがあるってか？」

白野「恐らくは。或いは元々あった部屋の出入口を塞いで隠した物かも知れません。」

恵理「取り敢えず、壁を壊して中を見てみない？ 罨は無いみたいだし、少しずつ壁を壊して——」

——ドゴオン!!

突如壁の前に立っていた白野が横蹴りをかまし、色が違う部分の壁を蹴り碎いた。轟音に反しない威力があったのか、変色していた壁全てが崩壊し、人が通れるだけの入口が出来る。その後ろには、更に向へと続く通路が隠されていた。

思わぬ行動に全員が驚き、白野を見詰める。台詞を遮られた恵理は僅かに顔を引きつらせている。

白野「この手に限ります。」

鈴「…もうちよつと穩便に済ませても、バチは当たらないと思うなあ。」

雫「思い切りが良いのは昔と変わらないわね…。」

記憶を失う前の白野と同じ点を見つけられた事に喜べば良いのか、何も成長していないと嘆くべきか、一行は複雑な表情をしていたが、白野は気にせず武器を構え通路に入って行った。

通路の中は暗くそれ程幅が無い事から、白野と、第一発見者の恵理と、便乗し

た鈴の少人数で調べる事になった。他のメンバーは入口の警戒に当たっている。

ランタンで通路を照らしつつ通路を進んで行くと、同じく灯りの消された部屋に到着した。罨が無いか確認しつつ、白野が壁にかけられている緑光石に魔力を込めて灯りを点けて行く。部屋が照らされると、そこには壁を覆う垂幕が架けられた、何も置かれていない机や椅子等の家具が幾つか部屋の隅に置かれているだけの、閑散とした景色が広がっていた。入口の対向にまた別の出入口があり、鉄製の扉が硬く閉じられている。

鈴「…：…：…む、何も無いね、この部屋。怯えながら入った鈴が馬鹿みたいじゃん。」



苦しい  
寂しい

だが、何かがおかしい。この景色が見える時は、唯寒く感じるだけで、他は何も無い筈だ。何時もそうだった。

嬉しい  
怖い  
悲しい

今は違ウ。別の何カが僕ノ中に流れ混んデ来る。様子がおかしい、早く逃げナいと。

憎イ  
恥カシイ  
楽シイ  
悔シイ

必死ニ逃ゲヨウトスル。ナノニ、体ガ思ウヨウニ動カナイ。ソモソモ、僕ハ何処ニ立ツテイル？ 私ノ手ハ何処ニアル？ 俺ハ今、何処ニ目ヲ向ケテイル？

虚シイ  
殺シタイ  
欲シイ



シイ冷タイ恐ロシイ氣持チイイテ焦ル憎イ情ケナイ耐エル可哀ソウ  
苛立ツ泣ケル惜シイ飽キル氣持チ悪イ懷カシイ温カイ苦シイヘコム  
熱イ切ナイ困ル寂シイ好キ悲シイ怖イ落チ着ク暗イ安心スル恨ム辛  
イ嬉シイ欲シイ寂シイ萎エル痛イ恥ズカシイ樂シイ呆レルイ可愛イ  
哀レ虚シイ冷タイ恐ロシイ氣持チイイ焦ル憎イ情ケナイ耐エル可哀  
ソウ苛立ツ泣ケル惜シイ飽キル氣持チ悪イ懷カシイ温カイ苦シイヘ  
コム熱イ切ナイ困ル寂シイ好キ悲シイ怖イ落チ着ク暗イ安心スル恨  
ム辛イ嬉シイ欲シイ寂シイ萎エルク痛イ恥ズカシイ樂シイ呆レル可  
愛イ哀レ虚シイ冷タイ恐ロシイ氣持チイイ焦ル憎イ情ケナイ耐エル  
可哀ソウ苛立ツ泣ケル惜シイ飽キル氣持チ悪イ懷カシイ温カイ苦シ  
イヘコム熱イ切ナイ困ル寂シイ好キ悲シイ怖イ落チ着ク暗イ安心ス  
ル恨ム辛イ嬉シイ欲シイ寂シイ萎エル痛イ恥ズカシイ樂シイ呆レル  
可愛イ哀レ虚シイ冷タイ恐ロシイ氣持チイイ焦ル憎イ情ケナイ耐工  
ル可哀ソウ苛立ツ泣ケル惜シイ飽キル氣持チ悪イ懷カシイ温カイ

——エリさん

——惠理!!

.....

惠理「——ゴフツ!? ゲホツ! ゲホツ!!」

鈴「惠理!! 大丈夫!? しっかりして!!」

唾液が気管に入ったのか、激しく咳込む。それだけでも酷いのに、  
頭も何かに殴りつけられた様に痛み、頭痛が止まない。いつの間にか  
倒れていたのか、鈴が切羽詰まった、今にも泣きそうな表情で惠理の  
体を膝に乗せ、此方の顔を覗き込んでいる。

暫く咳が止まらなかつたが、何とか呼吸だけは整えて、状況を整理  
する。

惠理「..... うう、一体.....何が.....?」

鈴「分かんないよっ! 惠理が急に倒れるし、体はどんどん冷たく  
なるし、全然目を覚さないし、意味分かんないし!」

白野「無事生還された様で何よりです、エリさん。」

周りを見渡すと、先程迄居た部屋と変わりは無かった。どうやらそれ程時間は経っていないらしい。そして、何か物騒な言葉を口にした白野に、諸々の事情を問い質す。

恵理「・・・生還って、どう言う事？」

白野「そのままの意味です。エリさんが倒れた時、貴女の心臓は止まっていました。死因は恐らく、魂の消失です。」

恵理と鈴の表情が驚愕に染まる。鈴は魂と言う概念がある事にも驚いているのだろうが、事前に魂魄魔法の知識を得ていた恵理は違う。

魂が無くなる。それは肉体の生命維持が出来無くなると言う事だ。患者の生命維持装置を止める様な物だ。それは文字通り死を意味する。

白野「鈴さんと協力して、何とか魂魄魔法でエリさんの魂を呼び戻して蘇生したんです。少しでも遅れていれば間に合わない所でした。」

恵理「そんな事が・・・でも、外傷も無いのに触ったで魂が消えるなんて……………」

鈴「ねえ、この魔法陣、今の内に壊しておかない？ このまま放つて置くのは危な過ぎるよ……………」

今まで様々なトラップに鉢合わせた鈴達だが、触れただけで即死する様な物は無かった。探索するにしても、意図せず魔法陣に触れてしまえばそれだけでアウトだ。しかしそれだけ危険な物にも関わらず、白野は首を横に振った。

白野「申し訳ありませんが、調査が終わる迄は残して頂けませんか？」

鈴「でも……………」

白野「この場所に、見覚えがあるんです。」

二人の顔が驚愕に染まる。その言葉が正しければ、この部屋には白野が行方不明になっていた時に関する何かがあると言う事だ。まさか迷宮の奥底の、こんな辺鄙な場所で白野の記憶の手掛かりがあると



は思いもしなかった。

恵理「それって、どう言う——」

恵理が詳細を聞こうとしたその時、入口から剣戟と爆音が聞こえ始めた。この場所で武器を振るう者は限られている。明らかに光輝達が何かと戦っている音だ。

恵理「搜索は後にしよう！ 光輝君達に何かあったのかも！」

白野「先導します。お二人は下がっていて下さい。」

鈴と白野はその言葉に頷き、光輝達の元に駆け出した。

.....

重吾「なあ、天之河。お前は玖珠木の事をどう思う？」

光輝「白野？ 勿論大切な仲間だ。行方不明になった時は心配したけど、無事に戻って来て良かったと思っている。それがどうかしたのか？」

時は少し先登り、光輝達が隠し部屋の入口で警戒に当たっていた頃、永山が険しい表情で白野について質問し始めた。

光輝は当然の事のように返答するが、永山は表情を変えずに首を横に振る。

重吾「そうじゃ無い、彼女の変容についてだ。見た目もそうだが、戦い方も、思考も前とは丸で違う。」

光輝「それは……確かにそうだが、あの一ヶ月の間に何かあったんじゃないか？ 魔人族が白野を連れて来たのも迷宮の下層からだっただし、そこで戦っていて、頭を怪我したとか。もしくは、例の魔人族に何かされたのかも知れない。」

重吾「その魔人族に何かされたと言う推測には同意するが、問題はその空白の一ヶ月だ。記憶喪失になったにしても、精神面が希薄過ぎる。」

以前の白野も、トラウムソルジャーと戦っていた際は冷徹な表情をしていた。しかしそれでも、その瞳には生徒達を守ろうとする意思と覚悟が宿っていた。

今の白野はどうだ。何をするにしても顔色一つ変えず、魔物とは言

え躊躇いもなく生命を屠る。それらからは何の情動も見受けられない。

重吾「以前の白野の面影も無い。あれは最早ロボットそのものだ。」  
光輝「… 永山。例えどんなに変わり果てても、彼女は今でも大切な仲間じゃないか。仲間をそんな風に侮辱する様な事は言わないでくれ。それに、記憶が無くなったんだ。前とは変わらない所もあるんだし、性格が違うのも気にしすぎなんじゃ無いか？」

重吾「その記憶喪失になった原因が分からない。あれだけの力があ  
るなら、並大抵の敵なら相手にもならない筈だ。それに治癒魔法も白  
崎より腕が立つ。あれだけの腕前なら怪我をしても自力で治せる。  
つまり、外傷による記憶喪失なら治療出来ると言う事だ。」

永山を含め何人かの生徒は、記憶を戻す手掛かりを探し回り情報を  
集めていた。得られた物は少ないが、それでも判明した事はある。そ  
もそも、記憶と言うのは脳の神経を直接壊さない限りは無くならな  
い。例え忘れたとしてもそれは一時的な物で、外傷による物だけなら  
ばトータスにおける治癒魔法で治る例も数多くあった。

そして白野が使う魔法ならば、治療魔法では治せない“限界突破”  
による疲労も回復出来る。永山は試しに以前、白野に頼んで彼女自身  
の頭に治癒魔法を掛けさせたが、記憶は失われたままだった。

雫「もしかして、白野の記憶は消えたんじゃないや無くて——。」

？「あく、話してる所悪いんだけどさ、警戒している時に近くの  
敵に気付かないのは不味いんじゃないかい？ 仮にもあたしみたい  
な種族が目の前に居るんだからさ。」

突如聞こえて来た、特徴的な男口調のハスキーな声音に、光輝達は  
直ぐに戦闘態勢に入り声が出た方向に振り返る。

広い空間の奥から、赤い髪に黒い肌を持つ妙齢の女性が現れた。体  
のラインが映える様に着こなされた服装をしており、肩には白い鳥を  
乗せている。

この世界に於いて、その特徴を持つ種族は一つしか無い。数ヶ月前  
に一行に辛酸を舐めさせた、人類の宿敵。

光輝「魔族…っ！」

カトレア「勇者はあんたでいいんだよね？ そののアホみたいにキラキラした鎧着ているあんたで。」

光輝「あ、アホ……う、嫌い！ 魔族なんかアホ呼ばわりされるいわれはないぞ！ それより、魔族がこんな所に何の用だ！ また俺達を実験体にでもしに来たのか!？」

カトレア「……まあ、ソイツはお仲間の判断次第だから何とも言えないけど、流石にそれは無いと思うよ？ あんた達は貴重な人員だからね。」

光輝「何？ それは、どう言う意味だ!？」

カトレア「そんな難しい話じゃないさ。人間なんか付いてないで、あたしら魔族側に来ないかって話だよ。色々、優遇するよ?」

光輝達としては完全に予想外の言葉だったために、その意味を理解するのに少し時間がかかった。しかし光輝は直ぐに呆けた面を引き締め直し、魔族の女を睨め付けた。

光輝「断る！ 人間族を……仲間達を……王国の人達を……裏切れないで、よくもそんなことが言えたな！ 俺達を実験材料にする様な奴らに協力するわけ無いだろう！ わざわざ俺を勧誘しに来たようだが、一人でやって来るなんて愚かだったな！ 多勢に無勢だ。投降しろ！」

光輝は確固たる意思で魔族の提案を否定する。対する魔族は断られた事を気にせず、冷めた視線を光輝に向けている。その時、魔族の肩にとまっていた鳥が女に顔を向け、徐に嘴を動かした。

? 『言っただろう？ あの坊主は他人の話なんぞ聞かないつてなア。こんなの時間の無駄だろう?』

カトレア「仕方ないだろ。上司の命令なんだからさ。これも仕事の一つなんだし。」

雫「鳥が、喋ってる?」

言葉を発しているのは白い鳥だった。その声を聞き、雫達は眉を顰める。初めて会う存在の筈なのに、何故かその声音に聞き覚えがあったからだ。

カトレア「それで？ 一応、お仲間も一緒にいいって上からは言わ

れてるけど？ それでも？」

光輝「くどいぞ！ 何度言われても、裏切るつもりなんて一切ない！」

しかし光輝はその事には見向きもせず、聖剣を引き抜き構える。力尽くでも魔人族を取り押さええるつもりの様だ。他の生徒も光輝に続き各々の得物を手に持つ。

カトレア「そう。なら、あんたらの行末は決まりだね。せいぜい、捕まらない様に祈るんだね。ここで死んだ方がマシだろうし。ルトス、ハベル、エンキ。餌の時間だよ！」

.....

白野達が到着した時には既に、勇者達は多数の魔物に追い詰められていた。前衛組の何人かは負傷し、後援は姿の見え無い敵に翻弄され相手のペースに飲まれている。

鈴「やばいよ、早く加勢しないとっ！」

白野「お待ち下さい、スズさん。ここで無闇に飛び出せば敵に囲まれます。」

恵理「でもこのままだと光輝君達が…… 前みたいに魔法で一掃出来無いの？」

白野「味方が散らばっている状況では無理です。巻き込んで良いのであれば出来ますが。」

無論この案は却下だ。最悪光輝を死なせる羽目になるようでは本末転倒だ。幸いにも、回復担当のお陰で戦線は維持出来ている。光輝も切札の一つである“限界突破”を使い、辛くも敵を数体蹴散らしている。今の内に合流して撤退に持ち込めば逃げ切れるだろう。

白野「私が道を作ります。お二人はその隙に——。」

白野が唐突に言葉を区切り、二人の胸倉を掴み無理矢理地面に伏せさせる。恵理は急な出来事に何事かと驚き白野を睨むが、直ぐにその顔を青ざめさせた。

三人が立っていた位置を薙ぎ払う様に、鏢無しの大剣による横振りの剣撃が放たれた。そのまま突っ立っていれば、全員仲良く胴体か首

が切り離されていただろう。

しやがみ込む事で自身も攻撃を躲した白野は二人を腕で抱えながら、追撃に振るわれた大剣を盾で防ぎ、その衝撃を利用しつつ後ろに飛ぶ事で続く攻撃を回避した。想像を超える威力があったのか三人纏めて大きく吹き飛び、一気に勇者達の下へ滑り込んでいった。

白野「合流出来ました。」

鈴「話が違っただけ?!? こんなスリル満点な方法じゃ無かったよね!?!」

雫「鈴、恵理、白野、無事だったのね!?!」

意図しない形で合流したが、二人は気を取り直し加勢に入る。鈴が境界を張り守りを固め、恵理は予め詠唱していた魔法を放ち魔物達を牽制する。

しかし白野は一人、隠し部屋の入口を見詰めていた。理由は勿論先程の剣撃だ。程無くして、その元凶がゆっくりと歩きながらその姿を現した。

錆びつき、大剣と言うよりは廃材を溶接した鉄塊の様な武器を、重さを感じさせない様に軽々と両腕に携えた人の形をした何か。

顔も含め全身の皮膚は無く肉が剥き出しになっており、その肉も強引に繋ぎ合わせた様に縫い合わせられている。体は括れており女性的な体格をしているが、四肢はそれぞれで長さが違い、骨格も何処かアンバランスな物になっている。髪は無く、頭の中に大きな一つ目が付いており、瞳孔の開いた濁った瞳がギョロギョロと辺りを見回していた。

白野「神の使徒? 見た目が随分違いますか?」

? 『お前の為にわざわざ用意したんだ。大人しく殺されたらどうだあ?』

再び、白い鳥が声を上げた。その声音は、白野が何度も聞いたあの男の声と同じ物だった。剣の切っ先を使徒擬きに向けたまま、視線を白い鳥に向ける。

白い鳥は目元を嘲笑う様に歪めた後、魔人族の女の肩から飛び立つ。途端、鳥の体が歪み、形が崩れ別の肉体に変質して行く。

光輝「あれは… 莫迦な、そんな筈は無い… っ！」

龍太郎「何でだよ、何であいつが居るんだよ!？」

体が再び再構築され、黒いローブを羽織った人の姿を形作る。その肌は浅黒く、耳は片方だけ僅に尖っている。眼はひどく澱んでおり、左眼は片方とは色の違う赤い目が取り付けられている。顔中から縫い後が消え去り、肌の色が違う皮が混ざり合って真鱈模様になっている。

少し特徴が違うが、その人物は紛れも無く光輝達を敗北させたあの男だった。そして、白野と何らかの因縁がある宿敵でもある。

キンドル「指輪を返して貰うぞオ、クソ人形。」

白野「何度も出て来て恥ずかしく無いんですか？」

## 15. 勧誘

白野「少し見た目が変わりましたね。今度は変性魔法でご自分の体を変質させたんですか？」

キンドル「ああ、お陰様で上司に借りを作ってしまったよオ。ツケはお前に払って貰わないとなア？」

以前白野が無力化させる為にかけた変質魔法を、同じ魔法を使える何者かが再度変性させる事で解除したらしい。同時に身体障害もある程度改善された様だ。両眼が的確に相手を捉え、足を引き摺る様な事も無くなっている。

キンドル「行け。腕を切り落とせ。」

使徒「???'」

使徒擬き<sup>???</sup>指示を出し、白野に襲い掛からせる。強引にでも指輪を取り戻すつもり<sup>???</sup>の様だ。

主人の命令通り、使徒擬きが双大剣を振り、言葉にならない咆哮を上げて白野に斬りかかる。降り掛かる斬撃に身を振り最小限の動きで躲すが、重厚な武器の見た目に反した高速の剣捌きで次々に白野を切り刻まんと襲い掛かる。

自身も剣を振り大剣を去なすが、刃が一合触れただけで刀身が軋み悲鳴を上げる。瞬時に再生魔法を使い剣を修理するが、このままでは何れ武器が壊れてしまう。

そして、今自分達が相手をしているのは使徒擬きだけでは無い。キメラの固有魔法“迷彩”を纏い潜伏していたブルータル擬きが、使徒に押され後退している白野の後ろに立ち、武器を振り上げ獲物が自分の元に来るのを待ち構えていた。

恵理「“緋槍”！」

しかし、恵理が放った魔法が隠れていたブルータルを的確に撃ち抜き、魔物を焼き殺す。潜伏していた筈の魔物達は、自分の姿が何故バレたのか知らないまま地面に倒れた。

白野「助かりました、エリさん。」

恵理「礼は後にして! ……つて、あれ? 何で私…この魔法を

知って…?」

香織「恵理ちゃん、もしかして敵が見えるの!？」

恵理「へ? 皆には… 見えないの?」

他の生徒達が見えない敵に翻弄される中、恵理は敵の位置を見えて  
いるかの様に視線を追従し、王国で習わなかった魔法を使い迎撃して  
行く。

だがそれでも、向こうの方が数枚上手だった。

カトレア「ほら、仕事だよ。さっさとしな。」

キンドル「やれやれ、老骨には労って欲しいものだ。」

キンドルが再び白い鳥の姿に変わり、甲高い鳴き声を上げた。それ  
と同時に、勇者達によって傷を負わされていた魔物達が瞬時に治療さ  
れ、死んでいた個体も息を吹き返し蘇生される。

雫「蘇生役までいるの!？」

白野「再生魔法と魂魄魔法ですね。どうやら神代魔法を付与した魔  
物を、自身の体に混ぜた様です。」

神代魔法は魔力の消費が激しい事から、魔物の蘇生と治療の連発は  
不可能だろう。しかし、こちらの殲滅速度ではとても倒し切るどころ  
か、最悪物量に押し潰される可能性が高い。

現に、野村を含め何人かの前衛組は怪我人が出ている。魔物の相手  
ですらこの状態だ。更に戦力が増せば、この戦線は一気に崩れる。

カトレア「ものみな砕いて大地に還せ!」  
「落牢」!」

健太郎「ヤバイツ! 谷口イ!! あれを止めろ! バリア系を使え  
!」

鈴「ふえ!?! りよ、了解! ここは聖域なりて 神敵を通さず  
!」  
「聖絶」!」

魔族の女から放たれた灰色の渦巻く球体が、放物線を描いて勇者  
達に飛来する。

土系の上級攻撃魔法「落牢」。着弾地点から撒き散らされるその  
煙幕に触れた者は、徐々に蝕まれ石化する。

その危険性を熟知していた野村は、数少ない防衛手段の一つである  
上級の結界魔法を谷口に使用させる。多くの魔物が結界の中に入って



しまったが、何とか“落牢”が着弾する前に受け止められた。

しかし“聖絶”を維持している間、彼女は動けなくなる。その無防備な状態の彼女を狙い、結界の中に居た魔物達は一斉に動き出した。

白野「少し止まっていて下さい。」

使徒「???」

それと同時に白野の動きも変わった。今迄使徒擬きを押しされつつも対応していた彼女だが、使徒擬きの周囲に何十本ものステイレットを出現させ串刺しにする。オリジナルと比べ魔法耐性も強く無いのか、使徒擬きの動きが止まる。それでも高い耐性を持っている事に変わり無いのか、徐々に鎧通しを砕いて行く。

白野はその隙に霊体化し、一気に鈴の元に駆け抜ける。刃こぼれし摩耗した剣に魔力を込め灰色の球体へと投げ付けると、速度を落とさず結界に飛び掛かった。光の障壁は白野を阻む事なく彼女を通し、更に谷口をすり抜け彼女の背後に着地する。

そして石化する魔法へ投げられた剣はそのまま球体に突き刺さる。触れたものを石に変質させるそれは、しかしその剣を変える事無く逆に吸収される。

恵理「え?」

カトレア「あれは…嘘だろ、生成魔法!? クソツ、幾つ神代魔法を持つてんない!」

白野は連射クロスボウを構え、鈴に襲い掛かる魔物を撃ち落ととして行く。キメラやブルターレ擬きは不発性のボルトが急所に当たり絶命するが、黒猫は迫り来る矢をその身軽さで躲し確実に距離を詰め触手を飛ばして来る。

こちらを刺殺するべく伸ばされた触手を、鈴を抱えて横に躲す。それと引き換えに結界も解除されてしまう。そして獲物を外したその触手を掴み取り、腕力に物を言わせて黒猫ごと縦横無尽に振り回す。黒猫は味方に向けて次々にぶつけられ、最後には魔物を巻き込みながら投げ捨てられた。ハンマーの如く投げ捨てられた黒猫は既に磔死体と成り果てている。

そして石化の魔法が付与された剣を取り、今度は魔族に向け槍投

げの要領で投げ撃つ。その切っ先は僅かに女の顔をそれ、肩に止まっている者に向いている。

キンドル『貴様ツ!?』

剣は見事に烏の胴体を貫き、その効能通り一瞬で肉体を石に変えた。投げた勢いが衰えないまま石の烏ごと飛んで行き、宛ら彫像の如く背面の壁に深々と突き刺さり石材と同化する。

光輝「助かった、白野！ 良し皆！ このまま一気にツ——!?」

これで厄介な回復役は居なくなった。光輝は相手の切札が無くなった事を確信し、皆を鼓舞してケリをつけようと意気込む。しかしそれは、思わぬ障害により頓挫した。

白野が数十本ものステイレットを出現させ、あろう事か味方である光輝達に放ち始めたからだ。突然の同士討ちに全員が動揺する。

香織「白野ちゃん!」

鈴「ハクノン!? 何で!?」

龍太郎「何だ!? …… って、ああ?」

白野「“聖絶”」

視認出来無い程の速さで飛来した鎧通しは、生徒達の肉を貫く事無く当たった瞬間砕け散り、被弾した者は一瞬でその場から居なくなっ  
て行った。

魔族の女が何処に消えたのか辺りを見渡すと、いつの間にか白野を含めた勇者達は、広間の出入口である通路に集められていた。魔物に指示を出し追いかけてしようとするが、白野が唱えた結界魔法により全ての出入口を塞がれる。拘束を解いた使徒擬きも結界を壊そうと双大剣を振り回すが、前代未聞の強度を誇るのか傷一つ付かない。

光輝「白野! どう言うつもりだ!」

白野「撤退して下さい。このままでは全滅します。」

光輝「何を言っているんだ!? 俺達は負けてなんかいない! もう回復要員も居なくなった。後は力を合わせて倒せば良いだけだ!」

白野「この魔物に対応出来ている人は“限界突破”を使っている貴方しか居ません。序でに言えば、それを用いても使徒擬きには対応出来ません。」

光輝「そんな筈は無い！ 君でも戦えたなら俺でもやれる！ 今直ぐ結界を解いてくれ！」

今の白野のステータスは分からないが、この4ヶ月間鍛えて来た自分より数値は低いと考えているのか、白野が単独で使徒擬きを抑えていた所を傍目で見ていた光輝は、自分ならもつと上手く戦えると確信している。

白野「了承しかねます。例え貴方が戦えても、他の方はどうするつもりですか？ 全員が魔物と渡り合える訳ではありません。現に負傷者も出ています。」

光輝「だったら治療すれば良い！ 君も優秀な治療役なんだ。香織達と協力して三人掛かりでやれば何とかなる。」

白野「確かに可能ですが、それは相手も同じです。キンドルは無力化しましたが、それも一時的な物です。剣を抜かれたら直ぐに復活されますよ。」

光輝「そんな事はさせな…ぐっ…」

白野が仲間の治療に加わるならば、確かに相手が倒れる迄戦い続けられるだろう。しかしキンドルが戦線に復帰してしまえば、今度は何方かの精神が壊れる迄の泥仕合が始まるだけだ。

光輝は尚も反論しようとするが、“限界突破”の効力が切れ、遂に力尽きてしまう。龍太郎が慌てて駆け寄り肩を貸す。

白野「逃げて下さい。あまり長くは持ちません。」

雫「…分かったわ、白野。貴方はどうするの？」

白野「ここで殿を努めます。後で私から皆様を追いかけますので、合流場所を決めなくて結構です。」

鈴「…え？」

その言葉に全員が息を呑む。つまりは白野を置いて、自分達だけ離脱しろと言っているのだ。仲間を見捨てる事が許せないのか光輝が再び声を荒げるが、雫が手を制し口を封じる。

雫「本気なの？」

白野「冗談を言える性分ではありません。」

雫「…ごめんなさい、白野。皆、撤退するわよ！ 急いで！」

鈴「待つてよ!!」

雫が苦い顔で撤退を呼び掛けるが、鈴がその号令よりも大きい声を上げて白野の手を掴んだ。手の温度が下がって行くのも構わないまま、今にも泣き崩れそうな表情で白野を問い詰め始めた。

鈴「殿つて何!?! 一人でアレと戦うつもりなの!?! そんな事したら死んじゃうよ!」

白野「ご心配無く、恐らくは死にません。」

鈴「ふざけてんの!?! 置いてなんか行けない! このまま皆で逃げれば良いでしょ!?! ハクノンが残る必要なんか無いじゃん!」

如何しても白野を置いては行けないのか、鈴が躍起になって白野を連れて行こうと説得する。その言動は余りにも必死で、何処か悲壮な雰囲気漂わせていた。

言い包める事は不可能と判断した白野は、鈴から贈られたブレスレットを外す。

白野「では、これを持っていて下さい。」

鈴「え、コレつて……。」

白野「預かっていて下さい。後でまた受け取りに行きます。」

鈴「……っ。本当……?」

白野「はい。必ず会いに行きます。」

鈴「……約束だよ。破ったら、ハクノンの恥ずかしい話、皆に言い触らすんだからっ。」

白野「約束します。」

鈴はいつの間にか溢れていた涙を乱雑に拭い、白野を見る。その目に憂いは無くなり、覚悟を決めた女の姿がそこにあった。

互いに軽く、たがしっかりと手を繋ぐ。そして鈴は手を離すと身を翻し、通路の奥へと引き返して行った。周りもそれに合わせる様に追従し駆け出し、遠藤が魔法で痕跡を消して行く。

一瞬、白野と恵理が目を合わせ、互いに頷いていた事に気付かないままに……。

.....

•

場所は変わり、89層の最奥付近の部屋。

全員が満身創痍な事と、光輝が“限界突破”の副作用により戦闘力が落ちていた事で、これ以上浅い階層迄突破する事は出来ず、今いる隠し部屋で回復に努めていた。

恵理（あの時……）

そんな中、恵理は一人思考にふけていた。思い出しているのは、魔族が使役していた魔物達が、固有能力で姿を隠していた時の事。

恵理（あの時、魔物が消えていた時、僕にはアイツらが見えていた。）何も魔法を使っていたにも関わらず、恵理の視界には敵が全て映っていた。他の人物は隠れた敵が見えず苦戦していたのに。

ふと僅かに顔を上げて、辺りの人物を見渡す。香織と綾子が負傷者の治療に当たり、皆が思い思いに身を投げ出し、休息を取っている。一通り視線を向けた後、恵理は視界の焦点をずらした。

その視界に映った物は、普通の見え方とは違った。全ての生物が白く浮かび上がり、他の物は全て色彩を失った不可解な景色。

この視界のお陰で、先の戦闘でも隠れていた魔物も含めて白く映り、戦いを多少有利に進める事が出来た。

映っている物の正体は大凡検討が付いている。魂魄魔法を身に付けている今なら、それが何なのか分かる。

恵理（………魂。）

魂魄魔法にも、本来見えない筈の魂を視覚化する魔法もある。しかし、それは魂が見える様になるだけで、こんな殺風景な物が映るものではないし、魂が白く浮かび上がる事も無い。

そしてこの景色は、白野から知識を刷り込まれた時に、あの不気味な魔法陣に触れた時に見えた物に酷似する。

恵理（この景色は何……？ それに……）

恵理が頭を悩ませているのは、この景色だけでは無い。

魂が見えているならば、生物全ての魂が見える筈だ。例え姿を消していても、或いは霊体になったとしても、魂がある限り視覚化される筈だ。なのに――

恵理（白野だけ、見えなかった。）

焦点をずらした時、視線は白野を捉えているのに、彼女だけが消えていた。まるで、最初からそこに居ないかの様に……。

恵理（アイツは……何なの……？）

顔を埋めて、また答えの出ない思考に陥る。そうしている間にも、治療は進められて行く。

その後数十時間に渡り、彼等は交代で仮眠を取りながら、体と精神を癒していった。

.....

カトレア「……はあく。」

白野と魔人族との戦闘が始まり、かなりの時間が経った頃。

白野との戦いは、未だ硬直状態が続いていた。カトレアは持ち込んだいた携帯食料を齧りながら、魔物の死骸と、その血溜まりの中で淡々と戦い続けている使徒擬きと白野を眺めていた。

結界の中にいる魔物は、最初の小一時間で全て排除されてしまった。結界の外には待機させている魔物も居るが、この障壁は依然としてその強度を弱める事なく出入口を塞いでいる。勇者達を追おうにも、深追いさせれば返り討ちに逢うのは自明の理だ。

自身も魔法で援護していたが、尽く対応され決定打を打てない。途中で無駄だと判断し、魔力の温存も兼ね仮眠を取りつつ観戦に徹していた。

キンドルを救助しようとして剣を引き抜く事も試したが、予想以上に剣が深く突き刺さっており自力で抜く事は出来なかった。無論魔物に任せようともしたが、即座に白野に妨害され息絶えた。危うく自分も彼女に殴り殺される所だった。

カトレア「……いつ終わるんだい、コレ。」

剣を無くした白野はバルディッシュを取り出し、今尚使徒擬きと斬り結んでいる。当初と比べ互いの戦力は拮抗し合い、激しい剣戟が広間に響き渡る。

キンドル曰く、使徒擬きは何処からか魔力を補充しているようで、体力も魔力も尽きる事は無い。しかしそれは相手も同じ様で、何方も

力尽きる事なく終わらない戦いを続けている。

カトレア「あのさあ、その騎士っぽいお嬢さん。いい加減諦めたら？ そのまま戦ってても、終わらないだけだと思っけど。」

白野「それは出来ません。」

こちらが手を出さない限りは攻撃して来ない事もあり、いつか終わると考え待機していたが、いい加減時間を持って余し始め白野に降伏を申し出た。案の定、返答は否定のみだが。

白野「今、どれくらい時間が経ちましたか？」

カトレア「それアタシに聞く？ まあ、たぶん一日以上は経ってるだろうよ。」

白野「そうでしたか。では、もう充分ですね。」

カトレア「何？」

今迄防戦に徹していた白野だったが、突如動きが変わり攻めに出た。

戦斧を構え、使徒擬きに突撃する。使徒擬きは双大剣を振り上げ迎えた打とうとするが、振り下ろした剣は白野を斬り裂く事なく地面に埋めり込む。

そして次の瞬間、使徒擬きの背中から胸にかけて戦斧が飛び出し、同時に背中を向けたまま戦斧を持った白野が、使徒擬きの背後に現れた。

使徒「????????」

白野は躊躇い無く戦斧に魔力を流し込み、雷光が部屋を白く塗り潰す程の威力が込められた電撃を使徒擬きの内側から叩き込む。内部から焼き焦がされた使徒擬きは、あっさりと力を失い倒れ伏す。

白野は戦斧を引き抜き、更に使徒擬きの首を斬り落とすと、武器を持ったままカトレアに振り向いた。

カトレア「このっ!?!」

(こいつ、まさか勇者達が逃げる時間を稼ぐ為に、ワザと全力を出していないかったのか!?)

予め詠唱を終えていた魔法を使い、地面から石槍を生やし白野を攻撃する。しかし白野はそれを一瞬で横に移動する事で回避し、目にも

止まらぬ速さでカトレアに近付き――

カトレア「……何のつもりだい？」

カトレアに刃を向ける事なく、戦斧をあらぬ方向に投げ捨てた。更には兜を外し顔を見せる。敵と対峙しているにしては、余りにも無防備だった。

白野「魔族と、取引がしたいんです。」

カトレア「ハツ、取引？　なんだい、降伏しろとでも？　言っておくけど、捕虜になんてならないよ、アタシは。」

白野「いえ、魔族に加わりたい方がいますので、仲間に入れて頂きたいんです。」

カトレア「……へえ？　中々面白い事を言う。」

カトレアにとって、それは願ったりいな申し出だった。本来の目的では無いが、勧誘は仕事の一つでもあった。まさか相手から参加を要求されるとは思いもなかったが、勇者も一枚岩では無いと言う事だろう。

カトレア「こつちに加わりたいうって言う奴は何人いるんだ？」

白野「私を含めて二人。いえ、三人です。その内の一人は勇者です。」

カトレア「勇者？　あんなだけ頑なに勧誘断っていた奴が、アタシらに入る事は無いだろ。今一頭も切れないし、こつちに参戦してもねえ？」

白野「方法は幾らでもあります。それに、そちら側でも勇者が人間側から脱退する事は本望なのでは？」

カトレア「ハハツ、なんだい、手下の方が頭の回転が早いな。」

勇者達が魔族に寝返る。それは魔族側に取って大きなメリットがある。

一つは人類にとつての最後の希望が敵として立ちほだかり、今度は絶望として敵になるという事。

もう一つは魔族側の大幅な戦力の増強だ。ステータスだけみれば光輝の戦闘力は、この世界に於いて上位に入る程の強さを持つ。そして迷宮攻略による恩恵は計り知れない。ならば最高の戦力を揃え



るのは自明だ。それを手下として配下に置き、迷宮を攻略させればその脅威は更に跳ね上がる。

カトレア「志願するんならこつちとしては構わないがね。取引つて言うんだから手ぶらでは無いんだろう？ まさかこれだけ駒を殺して置いて、唯で入れるとは思っていないよな？」

白野「もし参入を了承して頂けるのでしたら、軍勢をお渡しします。」

白野は左腕に付けていた腕輪を外すと、魔力を込めて十数体の魔物を呼び出す。それは以前、清水が魔族と協力し使役した魔物を詰め込んだ“宝物庫”だった。

白野「前金でこちらを差し上げます。腕輪の中には約6万の魔物が入っています。」

カトレア「驚いた、前払いで随分気前良く払ってくれる。これもアంతらお抱えの戦力の一部って訳か。」

白野「いえ、保有している戦力はそれで全てです。」

カトレア「前払いで全額渡すんじゃないよ。」

白野「これから増やしますので。」

カトレア「それは賭博で破産する奴が言う台詞だよ。」

間の抜けた発言により白野に対する信用が一気に下がるが、カトレアの中では既に悪い取引では無くなっている。

幾ら上司が神代魔法を所有しているとは言え、6万體もの魔物の用意するのはそれなりに時間がかかる。それが前金だけで手に入るのだ。いざと言う時は逃げたら良いだけの事だ。

カトレアが少しの間考え込んでいると、白野はそこら辺で拾った鉱石を整形し、掌大の円柱の形をした鉱石を四つ作り出した。一見唯の柱の様に見えるが、よく見ると二つの鉱石がくっついており、柱の真ん中で別れている。

白野「後は、これも差し上げます。」

カトレア「コイツは？」

白野「離脱用の転移式アーティファクトです。魔力が足りない人でも使える様、予め魔力を込めてあります。使用限度は最大二回限り

です。」

曰く、万が一死なれては困る為、緊急時に於ける逃走用のアーティファクトの様だ。円柱を引っ張る事で効果を発揮し、使用者の思い浮かべた場所に転移するらしい。因みに、転移出来るのは一人だけだが距離制限は広く、ここから魔族領に行ける程だ。名付けるならば“転移石”と言った所か。

カトレア「転移？ そんな事出来んの？」

白野「では試してみましよう。」

白野はそう言うと、転移石をカトレアに握らせ起動した。その瞬間、カトレアの姿だけが跡形も無く消え去った。

.....

ミハイル「... え!! カ、カトレア!! 何でここに!?!」

カトレア「あ、やば。」

.....

数秒後、光と共にカトレアが元居た場所に戻って来る。

白野「使い心地は如何でしたか？」

カトレア「え？ ああ、うん。中々良かったぞ。フフツ、着替え中の恋人の前に飛んだけど。良い眺めだった。」

白野「それは何よりです。」

カラカラと笑いながら、満足そうに笑うカトレア。今頃魔族領の一室で、その恋人とやらが慌てふためいているだろう。

白野「それで、この取引は如何しますか？」

カトレア「良いよ。この話乗った。一先ず仲間に取り計らう様には伝えといてやる。」

白野「ご協力、感謝致します。」

二人は面と向かい合い、握手を交わす。これで恵理が望んでいた魔族との繋がりが出来た。後は手土産を増やして仲を取り繕うだけだ。

白野「貴女が居ない間に、連れていた魔物は全員蘇生しておきま

した。それで、これから如何するおつもりですか？」

カトレア「しれっとんでもない事するなあアンタ。有難いけどさ。まずはその飾物になった仲間を連れて帰るさ。クズだが、置いてくと後が怖いんでね。」

カトレアはそう言つて、未だ剣に貫かれ壁に突き刺された鳥を指差す。

白野「宜しいのですか？ その人は、貴女達を裏切るつもりの様ですが。」

カトレア「裏切る？ 何の事だ。」

白野「以前この人に会った時に、神を殺して自分が神に成り代わると仰っていたので。その為にこの指輪がいるとも言っていました。」

カトレア「神？ コイツが？ 世も末だ。こんな奴に神様が務まるとは思えないな。にしてもその指輪、アンタが持ったのか。キンドルの奴が、奪われただの何だの言つて喧しかったぞ。」

戯けた様に話してはいるが、カトレアの視線はかなり冷え切っている。自分が信仰している神を殺すと宣つたのだ。信仰者ならばその場で殺されても文句は言えない。

しかしカトレアは溜息を吐くと、頭を掻きながらキンドルの救助を頼んで来た。

カトレア「如何にしろ、コイツは魔王様の計画の最重要人物でね。コイツを如何するかは魔王様に判断して貰うさ。悪いけど剣を抜いてくれないか？」

白野「……分かりました。ですが、代わりに私達を襲わない様説得して頂けませんか？ 自分の責任ではありますが、こうも会う度に攻撃されては敵いません。」

カトレア「随分気に入られているな。何かしたのか？」

白野「それはこちらが聞きたい事です。如何やら私の過去について知っている様ですが、何も答えて——如何かしましたか？」

白野の言葉を聞いた瞬間、カトレアの表情が変わった。その目は驚いている様な、悲しんでいる様な、或いは哀れんでいる様な、そんな

不思議な顔をしていた。魔人族の敵である、人間族を前にしていると  
言うのに。

カトレア「神代魔法…記憶喪失…そうか…アンタ  
は……。」

白野「あの……。」

カトレア「……説得はしてみる。ソイツが言う事を聞くかは知  
らないけどね。全力は尽くすさ。アンタも仲間を連れて逃げた方が  
良い。」

白野「……ありがとうございます。」

ヤケに大人しくなったカトレアを尻目に、壁に刺さった剣を引き抜  
く。烏の石像が地面に落ちるが、放って置いても石化は解けるだろ  
う。

白野は剣を仕舞うと身を翻し出口に向かう。目的は果たせた。後  
は契約者の元に向かい、離脱するだけだ。甲冑姿の少女が、暗闇に消  
えて行った。

## 16. 裏切

キンドル「……………ここは……………クソツ、あの人形めエ… ツ！」  
カトレア「よお、目が覚めたか？」

白野が部屋から退室し、暫く時間が経った頃。

キンドルが蘇生するのを待ち、カトレアは最下層へ潜るべく準備を済ませていた。

キンドル「おい、勇者共はどうしたア？」

カトレア「勇者ならアンタが寝てる間にトンズラこいたよ。逃げられてから大分時間が経っちゃったし、もう追えない。」

キンドルはその返事を聞き、隠しめせず舌打ちをする。又もや白野に敗北した事が余程気に食わないらしい。

カトレア「野暮用も済んだし、本来の目的を終わらせるよ。アンタも支度しな。ここから最下層迄は結構時間が掛かりそうだしな。」

キンドル「……………馬鹿を言うな。」

カトレア「ああ？」

キンドルは立ち上がると、未だゆっくりとしか再生していない使徒擬きを、自身の再生魔法を使い修繕する。先程の戦闘で互角以下の戦果しか挙げられていないにも関わらず、未だ同じ手段を取るつもりらしい。

カトレア「おいおい、まさか勇者達を追い掛けるつもりか？ やめときな。騎士の嬢さん相手に用意した様だけど、相手にもなつて無かったよ。と言うか、勝手に——ッ!？」

キンドル「黙れエ!!」

突然、キンドルは蘇生した使徒擬きの心臓に手を突き刺し、血肉をカトレアの後ろに控えていた魔物達にぶちまけた。

カトレア自身は何か血肉を躲したが、他の者は対処出来ずにその鮮血を浴びてしまう。すると——

——ガアアアアアアアアアアアアッ!?

肉が、骨が、内臓が。全身から生々しい音を立てて変形する。四つ足から二足へ、動物から人間へ、体付きが女性へ、更には皮膚が剥か

れ骨の一部が双大剣へと変化し、全ての魔物が使徒擬きへと変化する。

キンドル「ハ、ハハハ！ 私はまだ負けてない！ まだ策はあるさア、ハハハハハ！」

カトレア「てめえ、何の真似だツ!!」

キンドル「決まってるだろオ。あの人形をまたぶつ壊してやるんだよオ！ 私を散々コケにしてくれた報いを受けさせてやるツ……！」  
魂魄魔法で魂を使徒のそれへと上塗りし、変性魔法で肉体を使徒に変質させる。これを使えば迷宮に居る魔物は愚か、勇者達をも使徒擬きに変える事が出来る。これこそが、彼が対策として持ち出した禁術だった。

キンドル「戦力なら十二分にある。だがコイツらは魔法が苦手だねエ？ お前も手伝ってくれるよなア？」

カトレア「冗談じゃ無いよ、行くならアンタらだけでやりな。アタシは降りるぞ。これ以上アンタには付き合ってもらえない。」

何とか白野から渡された報酬を守るべく提案を断る。キンドルは白野の討伐を諦めるつもりは甚だ無いらしい。

その否定の言葉を聞いた瞬間、キンドルが体中に虫が這い回る様な殺気と共に威圧を放つ。その瞳は激しい憎悪と憤怒で酷く激んでいく。

そして抵抗する隙も無く、カトレアの首筋に大剣が添えられる。嘗てはカトレアの配下だった魔物が、今度はキンドルに従い剣を向けて来た。

キンドル「お前に、拒否する権利は無いんだよオ。黙って私に従え。」

カトレア「………チッ。」

カトレア一人では使徒擬きに対抗出来る程の力は無い。ここで下手にキンドルを刺激すればこちらの命が無い。仕方無く両手を上げて従う事にする。キンドルを止める約束を果たせないからか、或いは無理矢理従わせられる事への不満か、カトレアの表情が険しく歪む。

その様子をかけら程も気遣わずに、キンドルは使徒擬きの軍勢を率

いて迷宮の上層へと昇り始める。

キンドル「ハハ、ハハハ。待つてろよオ、クソ人形。二度と逆らえないように、またお前を同じ目に合わせてやる…… ツ!!」

.....

龍太郎「てめえ……誰のおかげで逃げられたと思ってんだ？ 光輝

が道を切り開いたからだろうが！」

礼「そもそも勝っていれば、逃げる必要もなかっただろうが！」

大体、明らかにヤバそうだったんだ。魔人族の提案呑むフリして、後で倒せば良かったんだ！ 勝手に戦い始めやがって！ 全部、お前のせいだろうが！ 責任取れよ！」

一方その頃、勇者達が休憩に使っている隠し部屋で内輪揉めが勃発していた。

薄暗い閉鎖空間、戻って来ない仲間、“限界突破”の時間切れで疲弊し切っている光輝、いつこの場所が敵に見つかるか分からない恐怖。諸々の状況が彼等の精神と思考を狂わせていた。

女性陣が喧嘩し始めた二人を必死に説得しようと仲裁に入るが、効果は薄く止まる気配が無い。次第に険悪な雰囲気になり釣られて周囲の者達も荒れて行く。とうとう喧嘩をしている二人が各々の武器を構え、状況は流血沙汰の一步手前まで来てしまう。その時――

白野「少し宜しいですか？」

「アツーーーーー!!?」

突如二人の横から光の膜と共に白野が現れ、それぞれの首に手を添えた。極地の氷塊の如く冷えた籠手を当てられた二人は女の子の様な悲鳴を上げて跳び上がる。

白野「そんなに大きな声を出すと、魔物に気付かれますよ。」

礼「てめえのせいだろうか!!? ふぎっけんなマジで！ めっちゃ冷てえんだよクソが！」

鈴「ハクノン！ 無事だったの？ 良かった〜！」

首を抑えて蹲る近藤と坂上を差し置き、鈴が白野に駆け寄り抱き着く。

白野「お元気そうで何よりです。」

鈴「それはこっちの台詞だよ！　ずっと戻って来なかったから心配したんだから。」

龍太郎「いゝ、冷てえなあおい。よお白野。思ったよりピンピンしてんな。」

今度は無事に帰って来た仲間に、各々が労いの言葉を掛ける。散々な状況が続いていたが、漸く自体が好転し始した。場が明るくなり、生徒達は心の余裕を取り戻して行く。

雫「白野、魔人族達はどうなったの？」

白野「時間を可能な限り稼ぎながら逃げて来たので、彼等が今後どう動くかは知りません。ですが他にも用事があると呟いていたので、町まで私達を追って来る事は無いでしょう。無論、推測ではありませんが。」

雫「そつか。そうなると何時迄もここに隠れている訳にはいかないわね。白野、今使った空間魔法で私達を地上まで避難させる事は出来る？」

生徒達は神代魔法の存在自体は知っている。以前白野が「湖畔の町ウル」から帰還した際に、彼女は空間魔法で直接生徒達が居る宿まで転移したのを見たからだ。時間帯的に丁度夕飯時だった事もあり、食事中に突然現れた白野に驚いて何人かが飲み物を吹いていたのは余談だ、

因みに存在しか知らないのは、恵理から神代魔法の教示を禁止されているからだ。何れ敵になる相手に、圧倒的な優位を取れる物を渡しては恵理が不利になる為だ。

白野「可能です。皆様の用意が出来ましたら、直ぐにでも宿までお送りします。」

その言葉で、全員の表情が喜色に変わる。この危機的な状況を抜け出せる、それは生徒達全員が望んでいた事だ。しかしここで、その提案を拒む者が現れた。

光輝「待ってくれ雫。魔人族はどうするんだ？　今ここで俺達が逃げれば彼奴らを野放しにしてしまう。あんな危険な奴らを放置する



訳にはいかない！」

雫「……無茶言わないで光輝。私達じゃあの魔族には勝てないわ。それに治療は済ませたけど皆疲弊している。それは光輝だつて同じでしょう？ 万全な状態で勝てなかった相手に挑めば、今度こそやられるわよ。」

光輝「でも今は白野がいる。彼女なら“限界突破”の副作用も直せるし、魔力だつて取り戻せる。大丈夫、さつきは不意打ちを喰らったけど、魔物の特性は把握した。次は絶対に勝つてみせる！」

確かに魔族を放置するのは危険だ。彼等が目標を勇者から変更し、【ホルアド】の住民を襲う可能性は否定出来ない。自分達でさえ苦戦するような相手に一般の冒険者では歯向かう事さえ不可能だ。

しかし、幾ら言い繕うと今の戦力で敵う相手では無いのも事実だ。雫を含め大半の生徒が避難に賛同しているが、光輝は敵から逃げる事が納得出来無いのか頑なに意見を曲げない。

白野「推定1万です。」

光輝「え？」

口論になり始めたその場に、白野の口から大袈裟な数字が発せられた。その意味が分からず光輝が硬直する。

白野「キンドルが連れていた、使徒のステータス値です。全ての数値が大凡1万程になります。今いる方で、その値に達している人はおられますか？」

光輝「な、何を言うんだ白野。曖昧な事を言わないでくれ。そんな桁外れなステータスを持つてる奴がいる筈無いだろう？ 大体、何でそんな事が分かるんだ？」

白野「何度か攻撃性魔法を試したんですが、並大抵の魔力量では真面に通じませんでした。大量の魔力を使って初めて、相手に傷を追わせられたんです。他の数値も目測ではありますが、戦った所同じ様な数値になると推測しただけです。その結果が1万程です。」

余りのステータス差に絶望が広がる。このメンバーの中で最も高い魔力量を誇る香織でさえ桁が足りない。光輝の“限界突破”で底上げた数値すら、その半分にも届いていない。文字通り化物級の強

さだ。迷宮の魔物など足元にも及ばない。

光輝「そんな物は関係無い！ スペック差なんて技術や経験で越えられる。それにその使徒とやらだつて一体しか居ないんだ、皆で協力すれば奴を必ず倒せる筈だ！」

白野「あれが一体だけとは限りません。それにキンドルの手が加わっている以上、原理は分かりませんがアレも不死身の魔物です。現に何度か傷を負わせましたが、直ぐに回復されていました。それに加えて、敵は90階層の魔物を遥かに凌ぐ戦力と数を揃えています。使徒一体ですら苦戦している我々に、それらの相手が務まりますか？」

光輝「それは……でもっ——。」

雫「光輝……このまま逃げ続ける訳じゃ無い。でも今回は引くべきだわ。ここで立ち向かえばお終いよ。生きてさえいれば勝てるチャンスはある。だからお願い、今は耐えて。」

光輝「っ……分かった。」

その圧倒的な数値を聞いて尚、光輝は否定し戦うと宣うが、雫の言葉もあり漸く苦い顔をしながら避難に同意する。

だがそれはもう遅すぎた。既に彼は判断を誤っている。しのごの言わずに??逃げ出せば良かったのだ。

使徒「??」

突然不慣れた咆哮と共に、偽装された隠し部屋の壁が双大剣に粉碎される。

咄嗟に白野が結界を張り、衝撃と飛来する残骸を防ぎ入口に蓋をする。その障壁の向こうには、まだ相對したく無かった肉塊と二人の魔族の姿があった。

キンドル「人形オオオオオ!!」

龍太郎「嘘だろ!? なんて見つかつたんだ！」

大介「白野お!! てめえつけられてやがつたのか!？」

白野「空間魔法を使って離脱したので、つけられたと言う事は無いかと。」

白野は何事も無い様に答え、結界の維持に集中する。これを突破される前に全員を地上に避難させなければならぬ。その為の時間を

稼ぎ、空間魔法の用意をする。

しかし今度は、事は穏便に進む事は無かった。対抗するには十分な魔力を込めているが、徐々に使徒擬きの大剣が結界を貫き、遂には難攻不落だった障壁を砕いてしまった。

恵理「炎浪！」

使徒擬きが入口を通り抜ける前に、炎の津波が襲い掛かる。無論、恵理として自分の魔法が通用しないのは承知の上だ。だからこそ、目眩しの為だけに中級魔法を使う。

炎浪が使徒擬きの視界を遮った瞬間、クレイモアを抜き一瞬で敵に迫る。視認出来無い程の速さと共に繰り出された突きが、相手の心臓に真つ直ぐ伸びて行く。

しかし、使徒擬きは剣には目も向けないまま大剣を振り上げ弾き返す。たったそれだけの動きで白野の剣は半ばで折れ、剣先が飛んで行き天井に突き刺さる。

その攻撃で白野の上半身が大きく逸れてしまうが、逆に白野はその勢いを利用し、姿勢を戻す事なく両足を上げてドロップキックをかます。両足が使徒擬きに触れた途端、そこから青白い波紋が広がり相手を吹き飛ばした。使徒擬きが爆音と共に後ろに飛んで行くが、あっさり空中で身を翻し音も無く着地する。

その広間、勇者達の視線の先には悪夢の様な光景が広がっていた。

真面に太刀打ち出来ないスペックを持つ使徒擬きが、10、20……凡そ60体以上もの使徒擬きが、キンドルの後ろに控えていた。全員が双大剣を両手に携え、大きな一つ目が勇者達に視線を向けている。

雫「嘘……でしょう……？」

一体いるだけでも対抗出来ない相手が、自分達の倍の人数を揃え立ち塞がっている。戦力も、物量も遥かに相手が上手だ。圧倒的に不利な状況を前に、生徒達の心が恐怖で折れていく。

キンドル「ハハハハハ。随分低い所に逃げてたなア、勇者サマ。それで、コイツらを相手にどうするんだ？ 勇気ある若者の返事を聞かせてはくれないかア？」

光輝「く……………ッ！」

こちらを詰る様な目で煽るキンドルを前に怒り心頭で飛び出し掛ける光輝だったが、咄嗟に雫が青い顔で肩を掴み引き止める。

彼女もこの絶望的な状況を前に折れそうになっているが、何とか歯を食い縛り耐え忍んでいる。光輝も雫の表情を見て瀬戸際で思い留まる。

キンドル「ハア、つまらんなア。妄言叫んで踊り狂うのを期待したんだがねエ。まあ良い。武器を下ろせエ。」

キンドルは呆れた表情で悪態をつくど、軽く手を上げて使徒擬きに指示を飛ばす。すると全ての使徒擬きが武器を下ろし、その場に座り込む。まるで交渉しに来たとしても言う様な、余りに無防備な光景だった。

相手の意図が読めず困惑する勇者達を前に、キンドルが愉悦に浸り醜悪に顔を歪めて宣言した。

キンドル「お前らア、生き残りたいか？」

光輝「……………何だど？」

キンドル「生きたいかって聞いたんだよオ、マヌケエ。お前達に特別、選ばせてやる。」

雫「……………要求は何？」

キンドル「簡単な話さア。その人形と眼鏡のお嬢さんを渡せエ。そうすれば後は見逃してやる。」

カトレア「馬鹿、重要人物を抜くな。追加で勇者もだ。お前の目的の為だけで取引するのは止めろ。」

不意に生徒達の視線が恵理達に集まる。光輝と白野だけならば、魔族が取引に彼等を持ち出して来るのは分かる。片方は救世の勇者であるし、もう片方はキンドルが目の敵にして執着する人物だ。

しかし恵理は別だ。唯の後衛組の一員である彼女が、この話に出て来る理由が思い当たらない。

恵理「そんな……………何で私を？」

キンドル「つい最近まではどうでも良い奴だったんだがねエ。だが、お前はみたんだろう？ あの部屋にあった入口から、その向こう

側をオ。」

恵理が固唾を呑む。彼が言っているのは恐らく、90階層の隠し部屋にあった不気味な魔法陣の事だろう。

キンドル「私は向こう側の研究を勧めているんだが、あれを覗いて戻って来た奴は居なくてねエ。理論上、それを覗いて来た奴には特別な力が備わるのさア。つまり、お前は貴重な研究材料と言う訳だ。」

心当たりはあるだろうか？ と、恵理をジツトリ見詰めながら、モルモット扱いする事を隠しもせず話す。そんな時、いい加減忍耐が尽きた勇者が憤り声を荒げる。

光輝「ふざけるな!! 仲間をお前みたいな奴に渡す訳無いだろう! それに、お前達の取引なんて信用出来る筈がない! 大方、俺を取り押さえた上で、無抵抗な皆を捕まえるつもりなんだ。そんな事はさせない!」

聖剣が起動し光を纏う。怒りの籠った目でキンドルを睨みながら、武器を構えて切っ先を使徒擬きに向けた。

キンドル「コイツら一体だけでも、お前とはステータスが違うんだがア、それでも戦うのかい?」

光輝「黙れ! ステータスなんて関係無い。そんな物は、俺の力で超えて見せる!」

絶望的な状況でも、光輝の意思は少しも揺らが無い。自分一人になったとしても、魔族を倒し皆を救うつもりの様だ。

キンドルはその光景を鼻で笑うと、片手を上げて呟く。

キンドル「遊んでやれ。」

地面に座っていた使徒擬きの一体が、一瞬でその場から姿を消す程の速さで光輝の前に現れる。光輝の目はその余りの速さについていけず、体さえも反応出来ず無防備な胴体を晒す。使徒擬きは彼の横腹目掛けて、その筋力に違わ無い威力の回し蹴りを放った。

その足が光輝の胴体に当たる前に白野が動き、使徒擬きの反対側から光輝を後ろに突き飛ばし彼を庇う。直ぐに左腕の盾を展開し回し蹴りを受け止めるが、素足が当たったとは思えない轟音が響き、僅かばかり白野の方が力負けし後退する。

光輝「——なっ!? 白野!?!」

白野「剣を下ろして下さい。今戦った所で勝ち目はありません。」

光輝「待つてくれ白野! まだ勝負はついていない! 奴の取引に応じれば、二人を見殺しにする事になる。そんなの間違ってる!」

白野「ここで正しい事をして生きられる訳でもありません。それに、今の動きに追いついていない様では戦いにもなりません。本格的に戦闘になれば全員が死ぬ事になります。」

既に状況は八方塞がり陥っている。例え悪手だとしても、唯一全員が生き残れる手段は取引を聞く事しか無いのだ。

光輝はまだ険しい表情を崩さない物の、使徒擬きに勝てない事を漸く理解したのか剣を収める。

同時に使徒擬きも構えを解き隊列に戻る。白野も盾を下ろすが、先程の蹴りで盾の機巧が壊れ、無残に残骸が腕から落ちる。

恵理「……その、あなたの言う実験で、私をどうするつもりなの?」

キンドル「なアに、お前の魂を使わせて貰うだけさア。安心しな、この人形よりは優しく扱ってやるとも。」

まるで耳を貸して貰うだけだとも言う様な軽さで、生命維持に必要な魂を要求して来る。

恵理から見れば正直に言っつて、この提案は悪い物では無い。自分と光輝だけを連れ出してくれる上に、都合の良い事に行き先は魔人族領だ。態々こちらから用意する事無く生徒達と袂を分かつ事が出来る。

だがそれは、実験体になる条件を呑んだ上での事だ。それでは自分達は研究の為の奴隷として扱われ、下手をすれば両方が命を落とす事になる。それでは意味が無い。

恵理「わ、私は……。」

しかしここで他に取れる方法が無いのも事実だ。下手に足掻いた所で、全員押し潰される未来しか無い。ならば、最悪な選択ではあるが要求を呑んで魔人族について行き、その後何とか仲間に入れて貰う手段を考えるしか無い。

恵理が観念し取引に応じようとしたその時、そつと慰めるかの様

に、恵理の肩に冷たい手が置かれた。

恵理「は、白野？」

白野「エリさんは、何を望みますか？」

恵理「え？」

絶望的な状況の中でも眉一つ動かない、愛想の欠片も感じられ無い  
声音。スリット越しの冷たい瞳が、何かを待ち望んでいるかの様に恵  
理を見つめていた。

白野「彼が言っている事とは抜きにして、貴女はどうしたいんです  
か？」

恵理「それは……でも……。」

白野「私が動く理由は、誰かが望んでいたから、それだけです。な  
ので貴女が望めば、私は可能な限りそれに従います。」

無論、断る事もありますが。そう付け加え、白野は視線を逸らさず  
に彼女の目を見る。自分の言う事が、白野にとっての最善だとも言  
う様に。

自分が動揺している様に話しているのは演技だ。思考は冷静に生  
存への道を探し、取引に応じる事を選んでいる。なのに、その瞳に釣  
られたのか、はたまた雰囲気の流れされたのか、気付けば恵理は理論的  
では無い言葉を口にしていた。

恵理「——アイツらを、全部殺して。」

白野「——仰せの通りに。」

白野が動き、キンドル達に向き直る。手に武器は無い。それでもそ  
の背中からは、ここを死守する様な雰囲気を感じられた。

キンドル「おいおい、馬鹿を言わないでくれエ。お前一人に敵う筈  
が無いだろう。コイツらはお前の動きを完璧に学習して——。」

——チリンツ、と。短い金属音と共に、白野の手から青白い光が宙  
に飛んで行く。

それはいつの間にか白野の手から外された、不可思議な指輪だっ  
た。キンドルが欲して止まない、絶対的な力を宿す指輪。その欲望に  
従い、彼の視界が指輪に釘付けになる。その瞬間——

白野は瞬時に連射式クロスボウを取り出し、目の前に展開した光の

幕にボルトを撃ち尽くす。すると使徒擬きの周りに現れた無数の光の幕から次々にボルトが吐き出され、使徒擬き達を針の筵の様に串刺しにした。

キンドル「——クソツ、小癩な真似を！ 構うな、殺せ！」

指輪は重力に従い、再び白野の手に落ちる。まんまと騙された事に気付いたキンドルは更に怒りに震え、使徒達に全滅させるよう指示をする。

しかし、何故か使徒擬き達は微動だにしない。それどころか次々に剣を落とし、電池の切れたブリキの様にその場に崩れ落ちて行く。

キンドル「おい、どうしたア！ 何故動かない!? 巫山戯るなア!! 早く人形共を殺せエ!!」

金切声を上げながら発狂し使徒擬きを蹴り付ける。生徒達も訳が分からず視線を右往左往に巡らせる。そんな中、事の張本人は悠長に空になったクロスボウの弾倉を外し交換する。

恵理「な、何をしたの？」

白野「使徒の能力値を全て0にしただけです。」

白野が使徒擬きに施した物は単純だ。凡ゆる情報に干渉する昇華魔法。本来は能力を文字通り向上させる魔法だが、今回は逆に能力を下げる事に使用したのだ。それをボルトに施した上でばら撒き、一体残らず全ての使徒擬きに当てステータスを掻き消した。

指輪を放り投げたのはキンドルの注意を引き、ボルトが当たる確率を上げる為だ。彼が指示を出さない限り使徒擬きは動かない。だからこそ彼の気を逸らした。

目論見は見事に的中し、使徒擬きはその高いスペックを失った。今ももう箸は愚か自分の腕一つ持ち上げられ無い。また昇華魔法を掛けない限り、使徒擬きは唯の肉塊に過ぎない。

キンドル「ハハ、ハハハ、巫山戯るなよ人形オ…！ これで終わりだとも——

連射式クロスボウの弾倉が再び回転し、痛みで集中を切らせ魔法を使わせないよう、断続的に十数本ものボルトがキンドルの四肢を穿つ。



キンドル「グッ……ウウ……ま、待て、話し合おう！ 私の研究成果を渡す、全部だア！ おま、お前の過去も、全部話す。だから、命だけは……！」

キンドルは地面に倒れ、無様に後退りながら命乞いをする。既に勇者達を恐怖に陥れた強者の威厳は欠片も無い。

白野はその言葉を無視しながら、キンドルに向かって歩き出す。途中、光輝が駆け出しカトレアに襲い掛かる姿が目映るが、彼女は離脱用の転移装置を持っているので問題は無いだろう。万が一死んだ場合は蘇生させれば良い。

キンドル「わ、分かった。お前が望む物を全てやる。金か？ 力か？ 権力か？ 欲しい物なら全て手に入る。その為にお前に従うと誓おう。なア、頼——

白野が向かう途中で拾った使徒擬きの双大剣が、風切音と共にキンドルへと飛んで行く。鈍同然に錆び付いた大剣だが、その見た目通りの重量でキンドルの両肩を押し潰し、両腕を千切り取る。

キンドル「ギアアアアアアアアアア！」

千切れた両腕が衝撃で吹き飛び、生々しい音を立てて地面に落ちる。その右腕には、樋の部分で二又に別れた双刃のブロードソードが握られていた。近付いた瞬間斬りかかるつもりだったのだろう。降参するフリをして右手に隠し持っていたようだ。

白野はそれをクレイモア用の宝物庫に仕舞うと、再び使徒擬きの大剣を拾いキンドルに向き直る。

白野「私は貴方を信用してません。貴方はこの先エリさんの障害になり得ます。なので二度と邪魔させないよう、ここで捕らえさせて頂きます。」

そして遂に、キンドルの近くに迫り着く。屈辱と怒りに歪んだ顔で、噛み砕く勢いで歯を食いしばりながら白野を睨め付けている。

白野はそれに何の感情も抱か無いのか、無表情のまま両手で大剣を持ち上げ、首を切り落とすかの様に構える。

白野「暫く眠っていて下さい。」

キンドルに目掛けて、彼が白野を倒すために作った武器が振り下ろ

された。

時間は少し先登る。白野がキンドルに向かって歩き出した時、光輝はこのチャンス逃すまいと聖剣を抜き、カトレアに斬り掛かった。カトレアも応戦し何とか離脱する時間を稼ごうとするが、他の勇者達の加勢もあり瞬く間に劣勢に陥ってしまう。

光輝の斬撃を砂塵で作った盾で防ぎ態と散らす事で目眩しをするが、後衛組から放たれた風撃が彼女の鳩尾に突き刺さり後方に吹き飛ばす。

聖剣を構え踏み込んで来る光輝を傍観の年が混じった瞳で見つめながら、右手を伸ばし懐からロケットペンダントを取り出す。

その時、光輝は見るべきで無い物を見てしまった。

カトレア「ごめん、先に逝く。愛してるよ、ミハイル……。」

光輝は今迄、魔族とは魔物の上位種、或いは魔物が進化した存在だと思い込んでいた。人間では無い、人に仇成す害獣だと。

しかし現実が違う。互いを愛し、何かの為に全てを捧げる思いで生きる。自分達と同じ人間だったのだ。最悪のタイミングで気付いてしまった。相手は魔物では無く同じ人間で、これから自分が成す事が人殺しであると。

カトレア「……呆れたね……まさか、今になってようやく気がついたのかい？ 人を殺そうとしていることに。」

光輝「ち、ちが……俺は、知らなくて……。」

カトレア「ハッ、知ろうとしなかった、の間違いだろ？」

光輝「お、俺は……。」

そこで、光輝は見てしまった。キンドルに向けて大剣を振り下ろそうとしている白野の姿を。同じ人間を、自分と同じクラスメイトの一人が殺そうとしている光景を。

光輝「——やめろ、白野。殺してはダメだ!!」

最後の力を振り絞り“限界突破”を使う。一気に加速し白野達の元に迫り着き、振り下ろされた大剣に目掛けて聖剣を振り上げる。し

かし——

白野「コウキさん？」

白野が途中で光輝に気付き、大剣を止めてしまった。本来なら大剣を弾き飛ばすだけだった聖剣は、大剣に当たる事無く空を斬り、白野の両手を斬り落とした。

キンドル「——喰い殺せエ!!」

その絶好の機会をキンドルが逃す筈が無かった。突如彼の左足が蠢き、両手を失った白野に飛び掛かった。

それは既に無力化した筈の使徒擬きだった。白野は勘違いをしていた。キンドルの足は治っていたのでは無い。自身の足を斬り落とし、魔物を変質させて自分の足へと擬態させていたのだ。任意で使徒擬きに戻る様に改造し、緊急時の戦力として隠し持っていた事に、彼女は気付けなかった。

使徒擬きの目が中心から縦に裂かれ口の様に開かれる。その醜悪な牙は白野の喉笛を食い破りながら自分ごと彼女を大きく吹き飛ばす。

そしてキンドルは、落とされた白野の左手に食い掛かり地面ごと彼女の手に噛み付く。指輪がキンドルの肉体に触れ、その効能を遺憾無く発揮する。

キンドル「ハハ、ハハハハハ、ハハハハハハハ！ やった！ やつたぞ！ ハハハハ！ 指輪だあ！ 私の指輪だあああああ!!」

消えた左足と両腕が再生し、彼の体に活力が戻る。キンドルが崩れ落ちた使徒擬きに手を掲げると、機能を停止していた使徒擬き達は息を吹き返し生徒達に襲い掛かる。

更に数体が白野の元に向かい、彼女の四肢を喰らい始める。白野自身も抵抗しようと足掻いているが、鎧を剥がされ再生する端から体を挽ぎ取られ、食い荒らされて身動きが取れ無い。

光輝「——よ、よせ。もう止めるんだ!!」

漸く白野を斬った衝撃から我に帰った光輝が、聖剣を振りキンドルに斬りかかる。しかし容易く聖剣を素手で止められ、逆に壁に投げ飛ばされてしまう。轟音と共に壁に叩きつけられ、そのまま地面に倒れ

る。尚も立ち上がりキンドルに向かおうとするが、“限界突破”の間切れが来てしまい、遂にはその場で崩れ落ちてしまった。

キンドルは勇者を歯牙にも掛けず、口から指輪を取り出し手に嵌める。今度は指から抜け落ちないよう、指を変質させて指輪を肉で覆い隠す。

キンドル「ハハハハハ！ 態々指輪を取り戻す為に色々用意していたが、まさかこんな形で取り戻す事になるとはなあ！ 感謝するぞ勇者！ これで私は世界を、全てを手に入れられるッ！ 褒美に全員生捕りにしてやろう…ッ！」

キンドルが愉悦に満ちた恍惚な表情で高笑いを上げる。雫達が光輝を庇いながら応戦しようとするが、使徒擬きのスペック差に敵わず、次々と打ち負けじわじわと詰る様に追い詰められて行く。

そして遂に前衛組が全員組み伏せられ、使徒擬きが後衛組に襲い掛かる。筋力的にも魔力的にも圧倒的な差がある相手に、逃げ出す体力も無い彼等が敵う筈も無い。

これでもうお終い、誰もがそう考えた時、それは起きた。

轟音と共にキンドルの頭上にある天井が崩落し、紅い雷を纏った漆黒の杭が凄絶な威力を以て飛び出した。その杭は勢いを衰えさせる事無くキンドルを貫き肉体を赤い霧に変える。

そして、崩落した天井から一人の男が飛び降り、地面の染みに成り果てたキンドルの血を踏み付けながら降り立つ。

ここに、彼等が予想しても見なかった、最強の援軍が到着した。

ハジメ「何だこのキモい連中は……。よお、存外しぶといな、お前も。」

## 17. 私の過去

生物は、苦痛により進化する。

飢えを凌ぐ為に、毒を口にしても死なない体質になる様に。

水中で溺れ無い様に、鰓で酸素を取り込める体になる様に。

苦痛に抗う為の手段を、脅威に晒される過程で進化し、種の生存を勝ち取って来た。

恐怖、危機、天敵、絶滅。その生存への脅威があるからこそ、生物は避ける為に進化を、変化を余儀無くされる。

苦難から逃れたいと、その恐怖が「自我」を生む。

.....

香織「ハジメくん！」

突如目の前に降りて来た黒いコートを羽織った男に、歓喜に満ちた声が掛けられる。香織にとつてその人物は、数ヶ月前から会いたいと願って止まない最愛の人だった。

ハジメはその様子を苦笑しつつ更に天井から降りて来た二人を受け止め傍に下ろすと、視線を使徒擬き達に戻し部屋全体を見渡す。その軍勢の奥には鎧を剥がされ、今も尚傀儡に食い荒らされている少女の姿があった。

その様子に僅かにも表情を変えぬままドンナーを抜き、白野に夢中になり無防備になっている背中を目掛けて、電磁加速させた銃弾をお見舞いする。

奇跡的な起動を描き数多の使徒擬きをすり抜けた必殺の弾丸は、しかし軌道上に双大剣を割り込ませた別個体の妨害により失敗した。弾は双大剣を大きく折り曲げたが、弾道が外れ明後日の方向に飛び虚しく壁を撃ち抜く。

キンドル「邪魔をされては困るなあ、女神の剣サマよ。ソイツは今調教中でねえ。」

ハジメ「チツ、まだ生きてるのか。ゴキブリ並の生命力だな。」  
ハジメが声のした方向に目を向けると、そこには地面の赤い染みに

成り果てていた筈のキンドルが立っていた。いつの間にか体の再生が終わっており、五体満足の状態に戻っている。

キンドル「あの程度の攻撃で殺せるとでも思っているのかあ？ おめでたい小僧だ。それでえ、お前達はこんなカビ臭い穴蔵に何をしに来たのかね？」

ハジメ「死に損ないには関係の無い義理を果たしに来ただけだ。邪魔をしないなら見逃すぞ？ 追いも殺しもしない。」

ハジメの傲岸不遜な発言を聞いたキンドルは、一瞬呆けた面を見せた後に言葉の意味を漸く理解したのか、突然ハジメ達を嘲笑い始めた。

キンドル「ハハ、ハハハハハハ！ 何を言うかと思えば、世迷言か！ つくづく神に連なる者は滑稽だなあ！ 逃げ出すのはお前達の方だろうか？ 最も、お前を見逃すつもりは無いがなあ。私から見ても、その肉体とアーティファクトは実に興味深い。」

ハジメ「ハツ、寝言は棺桶に入ってから言えよ、迷彩野郎。寧ろお前が俺の実験体になる、の間違いだろ？」

お互いが軽く罵り合う中、嵐の前触れのように空気が張り詰めて行く。既に使徒擬き達は武器を構え臨戦態勢にあり、ハジメは念話石でユエとシアにお守りの指示を出し、自身も“瞬光”を発動し知覚能力を引き上げている。

そしてたった一言で、戦いの火蓋は切って落とされた。キンドル「ー捕らえろ。殺しても構わん。」

ハジメ「なら遠慮は要らないな。お前は俺の、敵だ。」

先に動いたのは使徒擬きだった。2体の使徒が目にも止まらぬ速さで突進し、ハジメを十字に挟む様に囲み斬りかかる。

ハジメは迫り来る大剣を屈んで回避すると、使徒擬きの鳩尾に義手の肘鉄を叩き込む。瞬時に肘から散弾を撃ち出し片方の使徒を射殺すると、更に激発の反動と“豪腕”を利用した正拳突きをもう片方の使徒にくらわせた。肉の爆ぜる音と共に使徒擬きの胸部が弾け飛び、内側から砕けた魔石が吐き出され使徒擬きは息絶えた。

少しの間も置く事すら無く、瞬時にドンナー&シユラークを抜き発

砲する。使徒擬きは射撃に対応する為に双大剣を構え防御をとるが、間延びした銃声と共に12発の弾丸が各々の大剣に当たり跳弾すると、ピンボールよろしく跳ね返り続け、まるで吸い込まれるかの様に使徒擬きの胸部を貫いた。

キンドル「馬鹿め、無駄な足掻きだあ！」

罵声と共に、再生魔法の光が死体に降り注ぐ。ハジメに殺された使徒擬き達は瞬く間に蘇生し息を吹き返す。

ハジメ「再生能力に頼ってるようじゃお終いだな。」

キンドル「まさか。それだけでは無いさあ。」

再びドンナーを連射し使徒擬きを撃ち殺そうとするハジメだったが、必殺の弾丸は、あろう事か使徒擬きの肉体に当たった瞬間、柔らかいクツシヨンに跳ね返るボールの様に鈍い音を立てて跳ね返り、あらゆる方向に跳弾する。使徒擬きは少しのダメージも受けた様子もなく平然と立っている。

全員の顔が驚愕に染まる。銃の存在を知る勇者達は勿論、ハジメと同行しているユエ達もその威力は良く分かっている。硬い装甲を持つている魔物なら兎も角、剥き出しの肉体を持つ使徒擬きでは音速で飛来する金属弾を防ぐ事は不可能だ。先程までは届いていた攻撃が効かない、それが意味する事はつまり――

ハジメ「適応しているのか？ この短時間で。」

キンドル「その通りい！ 頭の回転が早いねえ。だが、君の玩具はもう効かない。コイツらは――」

ハジメ「話が長え。お前は新しい玩具を見せびらかしたがるガキか？ ゴチャゴチャ喚いてる暇があったらさつきと掛かってきたらどうだ。たっぷり遊んでやるよ。」

校長の長話に退屈した生徒の如く、呆れた視線を向けるハジメに眉を潜めたキンドルは、片手を上げて使徒擬きに短く指示を出す。使徒擬きが一斉に武器を構え、ハジメに向かって駆け出す。ハジメも敵が動き出すより早く武器を取り換え応戦しようとしたその時――

キンドルが付けていた指輪が光を失い、黒く澱んだ。

.....

次から次へと絶え間無く、怪物が私の四肢を喰い尽くしている。喰われた端から再生が始まっているが、その度に体を壊され治り切らない。離脱する方法を考えようにも、先程から噛まれる度に伝わって来る十二力のせいで魔法の構築すら出来無い。

——— いたい

使徒擬きに齧られる度に、体の奥から何かが湧き出して来る。この地獄のような光景に、何故か見覚えがあつた。こんな光景を前にも見た事がある。

そうだ、あの不可解な魔法陣があつた部屋だ。あの部屋の、硬く閉ざされた扉の奥に、私は閉じ込められていた。

——— イタイ

使徒擬きに屠られる度に、見てはならない記憶がこじ開けられる。そうだ、思い出した。

その部屋の中で、私は今と同じ様な目に遭つていたんだ。

狼が、私の四肢を噛みちぎり食い尽くした。

蝙蝠が、私に牙を突き立て血を吸い尽くした。

蜘蛛が、私に毒を刺し溶かした血肉を啜った。

蟋蟀が、私の骨を端から齧り尽くした。

小鬼が、私に子を孕ませ腹を食い破り産まれ出た。

百足が、私の脊髄を噛み砕き寄生した。

蛭が、私の体内に住み着き臓物を喰い尽くした。

蜚~~虫~~が、私に卵を産みつけて何匹にも増え続けた。

蜂が、私の体に巣を作り子を育てた。

蛆が、私の体を這い回り腐った肉を食い漁っていた。

何回も、何回も、何回も、体が壊される度に、白い鳥に魔法を施され治療された。その度にまた魔物に喰われ、犯され、寄生された。



ソウダ、コレガ、コノ悍シイ穴蔵ニ居タ時間ガ、私ノ過去ダ。

.....

キンドル「ガツ!? ウア、アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

ハジメ「..... 何だ、アレは?」

突然、キンドルが前触れも無く苦しみ始める。体中を搔きむしり、狂犬病に罹った犬を彷彿させる動きで、耐え切れない苦痛に喘ぎ無様に地面を転げ回る。

その体には異変が起きていた。全身の穴と言う穴から血が流れ、血管が不自然に大きく波打ち、何かが蠢いているかの様に血管をなぞり脈を打つ。そして腹部が内側から何かを詰め込まれる様に膨張し、止め処無く大きくなって行く。

白野「..... カツ..... アア..... ウア..... ツ」

惠理「白..... 野..... ?」

そして離れた所で同じ様な症状が、白野と彼女を喰っていた使徒擬きにも起こっていた。ボコボコと、音を立てて全身が波打ち泡立つ。そしてその膨らんでいる腹部は、脂肪で体積を増やしたそれとは違う、胎内に子を宿した母体の様にも見えてー

ハジメ「ーマズイツ、ユエツ!」

ユエに魔法を放つよう指示を出し、自身も手榴弾を投げ殲滅を図る。しかし、爆弾が起爆する前に、ユエの魔法が発動するより早く、それは起きた。

ーギヤアアアアアアアアアアアアアアア!!!

バチャリと、

キンドル達の体が、内部から破裂した。

蝗、小鬼、蠍、狼、百足、蠅、螭螂、蜂、蜘蛛。所々体が欠損し、体組織が露出した蟲や獣が溢れ出し産声を上げた。

「いやああああああああああああ!!?」

ハジメ達の後ろで、絹を裂く様な誰かの悲鳴が上がる。だがこの異常事態を前に、それを気にしている余裕は無い。

数多の魔物が百鬼夜行の如く群れを成し、大海原の如く部屋を片隅から埋め尽くして行く。湧き出した怪物が互いに牙を剥き、見境無しに周りの者を喰い殺している。その数は数百、数千にも及び、瞬く間に残りの使徒擬き達を数に物を言わせ飲み込んで行く。

背後に突如現れた敵に、使徒擬き達は抵抗しようと双大剣を振り魔物の数を減らしているが、圧倒的な物量には敵わず抵抗虚しく、蟲に全身を覆い尽くされ体を食られて行った。

魔人族の女は土を操り、自身を覆う様に土壁を作り身を守っているが、怪物達はその障壁ごと魔人族の女を飲み込んだ。ブルータルや猿形等の屈強な魔物が、拳を振り翳し障壁を破ろうとしている。あのままでは何れ突破され、使徒擬きの二の舞になるだろう。

そしてそれはハジメ達や勇者達も同じだ。既に怪物達は使徒擬きの垣根を越え、無差別に彼らへ襲い掛かって来ていた。

勇者は“限界突破”の副作用で衰弱し、他の生徒達は目の前で突然起きた、白野が破裂するという悍しい光景を直視してしまい恐怖で竦んでいる。そんな中、動く者が居た。

ユエ「天絶」

鈴「せ、刹那の嵐よ 見えざる盾よ 荒れ狂え 吹き抜ける 渦巻いて 全てを止め “爆嵐壁”！」

ハジメとシアが勇者達の元の後退した後、即座にユエが光の障壁を張り進行を阻む。その防壁を覆う様に鈴の攻勢防御魔法が展開され、飛び込んで来た怪物達を纏めて後方に吹き飛ばす。

この時、鈴自身も恐怖に怯えて半ば呆然としていたが、怪物が迫って来ると言う脅威を前に、青ざめた顔のまま本能的な危機感で咄嗟に防壁を張っていた。

しかし、彼女の奮闘で多く数を減らしたにも関わらず、怪物達の規模は収まるどころか逆に数を増やしている。

ハジメ「チツ、うんざりする量だな、これは。コイツら、何処から湧いて来やがる？」

魔眼石を駆使して室内全体を見渡すと、そこには蟲に喰い荒らされた使徒擬きが横たわっており、白野達と同じ様に全身から怪物が溢れ出していた。原理は不明だが、どうやらこの怪物達に喰われた瞬間、その者は噛まれて感染するゾンビ宜しく怪物達の苗床と化すらしい。

だが事今回に於いて、それは劇的に効果を発揮している。魔人族が多くの使徒擬きを引き連れていたせいで、怪物はそれらに寄生し、ねずみ算の要領で爆発的に数を増やしている。既にその数は、勇者達の実力で殲滅する事は不可能な規模になっている。

シア「い、一体何なんですか、この魔物達!?! どんどん増えていますよ!」

ハジメ「シア、お前は下がっている。コイツらに噛まれたら終わりだ。ユエ、魔力はまだ持つか?」

ユエ「………んっ、まだいける。『蒼龍』」

『天絶』の外側、彼らの頭上に直径1m程の青白い炎球が現れる。その炎はうねりを上げて形を龍に変貌させ、蜷局を巻きながら障壁にへばり付いていた怪物達を廃すら残さず焼き尽くす。

周囲の怪物を焼き払うと、蒼く燃え盛る龍は鎌首を擡げて顎門を開く。重力魔法により目先の敵が宙に浮き、掃除機に吸われる塵の様に触れれば焼け死ぬ龍に吸い込まれて行く。

綾子「なに、この魔法……?」

勇者達が見た事も無い魔法を前に呆然とする中、蒼い龍は障壁から離れ辺りの怪物を巻き込みながら前進する。自身を部屋中に這わせる事で全てを掃討するつもりらしい。目論見通り、怪物達は炎に焼かれ数を一気に減らして行く。

ハジメ「助かった、ユエ。後はー」

俺がやる。そう言い切る前に、有り得ない事が起きた。

突然、ユエが放った『蒼龍』が進行を変え、あろう事かハジメ達に襲い掛かり始めた。その巨体に見合わない速度で勇者達を囲う障壁に突進し、壁を破ろうと噛み付き苛烈な攻撃を重ねる。

シア「ユ、ユエさん!?! 敵はコッチじゃありませんよ!?!」

ユエ「違う! 私じゃない!」

血迷ったのかと、シアが魔法を放った張本人であるユエに言葉を掛けるが、返ってきた応答は焦りの混ざる困惑した台詞だった。

その疑惑に答える様に、“蒼龍”に異変が起きる。長い胴に黒い血管が浮かび上がり、脈打ちながら全身に広がって行く。その様子は、怪物に噛まれた魔物達と同じ現象で――

ユエ「…………… 何かが、何かがおかしい!？」

その瞬間、龍が炎を散らし弾け飛び、中から大量の怪物が現れた。使徒擬きから湧き出すソレとは桁違いの量が頭上から降り注ぎ、一瞬で障壁の外を埋め尽くす。怪物同士が互いを押し潰しながら障壁を囲い、周囲の者を蹴散らし合いながら防壁を破壊しようと次々に攻撃を加えて来る。

香織「そんな、魔法まで!？」

ハジメ「…………… 悪食にも程があるぞ。達の悪いホラー映画を見る気分だ。」

原理は不明だが怪物達は魔法に干渉し、何らかの方法で自らの糧に変えたようだ。こうなると魔法による殲滅は難しくなる。放った魔法が片っ端から敵を増やす餌になるのだ。減らす為の攻撃が逆に敵を増やしては話にならない。

しかし何時迄も手を拱いている場合では無い。障壁に加わる衝撃は止めどなく増えている。一体当たりの火力は大した事は無いが、それが数千規模にもなれば話は変わる。集団で重ねられる圧力は計り知れず、それを表す様に光の防壁には無数の罅が入っている。重圧に押し潰されて怪物達の海に飲み込まれるのも時間の問題だ。

ハジメ自身も対多数用の兵器を揃えてはいるが、ブルータルは兎も角、蟲等の的が小さい相手は撃ち漏らす可能性が高い。接近戦で万が一にも噛まれてしまえば、それだけで苗床の仲間入りになってしまう。

ハジメが必死に頭を動かし、対抗策を考えていた時、彼の後ろから意外な人物が話しかけて来た。

恵理「えっと、南雲君…………… だよな?」

ハジメ「…………… ア? 確かに無能の南雲君だが、何の用だ?」

言葉を掛けたのは恵理だった。苛立っているハジメの視線に怯えながら、地図を片手に話を続けた。

恵理「さつきみたいなのに、床を壊す事は出来る？」

ハジメ「それは……なるほどな。」

その一言で何かを察したハジメは、宝物庫から魔力回復薬を取り出すと、香織と鈴に投げ渡した。突然の事に目を白黒させながら慌てて瓶を受け取ると、二人揃って疑問の視線をハジメに向けた。

ハジメ「お前ら、“聖絶”は使えるよな？ 俺が合図を出したら境界を張り直してくれ。出来るな？」

香織「でも、ハジメ君はどうするの!？」

ハジメ「決まってるだろ。」

この短時間で以前の「無能」とは思えない程の、圧倒的な戦力を見せつけられた香織だったが、滝から流れる水のように、無制限に溢れて来る敵の物量を前に悲痛な表情を浮かべる。

しかし、ハジメの反応は逆だった。口元が不敵に弧を描き、獰猛な獣を思わせるような殺意を滾らせる。その様は、嘗ての彼とは別人とも言える程掛け離れた姿。

香織「……ハジメ……くん？」

ハジメ「敵は、殺す。それだけだ。」

そう言いながら踵を返すと、ハジメはミサイル&ロケットランチャー オルカんと、ガトリンググレールガン メツエライを取り出し構えると、ユエとシアに指示を出す。それは少しでもしくじれば終わってしまう、綱渡りをする様な作戦だった。

ユエが“聖絶”の頭上当たりに、人が一人通れる程の大きさの穴を開ける。当然、その部分に張り付いていた怪物達が、重力に従い雨の様に降り注いで来る。しかしそれらが穴を通り抜ける前に、弾幕の嵐が怪物達を襲った。

ハジメ「群がるな、害虫供が。」

シア「通しません!」

メツエライから繰り出された毎分1万2千発の弾丸が、ドリユツケンから放たれた炸裂式のスラッグ弾が、怪物達を押し流す様に蹴散ら

して行く。音速で駆け抜ける金属の暴風は、遂に怪物達の海原を貫きその先の天井が露わになった。

ハジメ「壁を張れ！」

「二」聖絶」！」

ハジメが“空力”で空を跳び障壁の穴を抜けると、香織達に合図を送る。穴の空いた“天絶”を下から塞ぐ様に“聖絶”が展開され、再び怪物の群れを押し留める。

羽を持つ蜂や蝙蝠等の怪物が、空を飛びハジメを喰い殺そうと襲い掛かるが、そんな事は吸血姫が許さない。

ユエ「黒渦」

障壁を押し潰さない程度に加減された重力場が空飛ぶ怪物達を捕らえ、地面に縛り付ける。羽虫程度ではその重力から逃れる事は叶わず、他の怪物共々地に伏せる事になった。

跳び上がったハジメはそのまま天井迄昇ると、靴に仕込んだスパイクを打ち込み天井に張り付く。そして火器の引金を引き、有りつたけのロケット弾と焼夷手榴弾を下にいる怪物の海に投下した。

内包されたタール状の液体に火が灯され、一気に燃え上がる。摂氏3千度の極炎が室内を焼き払い、苗床ごと怪物達を灰に変えた。

それでも尚、焼かれた端から苗床を起点に驚異的な生命力で怪物達は湧いて出て来る。巣穴を燃やした程度で全滅出来る程度の、柔な連中では無いようだ。これだけで蹴散らせられたら御の字だったが、ハジメの狙いは制圧では無い。

オルカンから瞬時に取り替えたパイルバンカーが、紅いスパークを放ちながら杭を回転させる。そして、電磁加速したアザンチウムコーティングの杭が発射され、流星の様な光の尾を引き地面を穿った。地面を貫いた杭を起点に壮絶な衝撃波が辺りに放たれ、洗剤を垂らされた油の様に怪物達を吹き飛ばす。

ハジメはその結果を見る事なく次々に杭を装填し地面に杭を打ち付けて行く。片手で貫かれた地面の穴に手榴弾を投げ入れると、ドナー&シユラクを抜き発砲した。

ハジメ「落ちろ、ゴミ蟲が。」

ドパアアアン!!

僅かに間延びした一発分の銃声と共に、複数の銃弾が放たれ手榴弾を撃ち抜く。貫かれた衝撃で炸薬が起爆し、地面に亀裂が入る。そして、大量の怪物達の重量を支え切れなくなったそれは、一気に崩壊を始めた。

恵理が持っていた物は、自分達を書き記して来た階層の地図だった。今居る階層と一つ下の階の地図を照らし合わせると、この部屋の下に同じ様な広い空間がある事が判明したのだ。一掃が難しいならば、丸毎ゴミ箱に捨てれば良い。それが、彼女が考え付いた作戦だった。

目論見は成功し、苗床と化したキンドルと使徒擬きも含めて怪物達が下層に落ちて行く。崩壊しない様に加減された勇者達が居る場所に、必死によじ登ろうとする怪物達だったが、下方に発生したユエの“黒渦”により遮られ、障壁に張り付いていた怪物も含め加圧された重力に従いあえなく落ちて行った。

大海原の如く部屋中を埋め尽くしていた怪物達が、底の抜けたバケツから落ちる水の様子に奈落に落ちる。そして、障害物が無くなり、部屋の壁が見えてきた。

鈴「あ……………！」

そこには、崩壊し崩れ落ちている地面と、四肢や胴、果てには顎や目さえも失い、今も尚断面から蟲が湧き出している白野の姿があった。

鈴「ーダメ、白野!!」

鈴の悲痛な叫びと共に、奈落に落ちる白野の下にに結界が張られ、首しか残っていない彼女を拾い上げた。

それを見たハジメが怒りに顔を歪ませて、殺意の籠った目で鈴を睨む。

ハジメ「何のつもりだ、谷口！ ソイツを落とせ!!」

鈴「嫌だ!! 絶対に落とさない!!」

苗床がある以上、怪物達は無限に繁殖する。元手を絶たなければ終わらないのだ。

既に白野を乗せた結界の上は蟲が蔓延り、その壁を覆い尽くしている。ユエの重力魔法は怪物を下層に落とし続けてはいるが、魔力は何れ尽きる。そうなれば怪物は壁を登り勇者達を襲うだろう。

苗床を全て処理した上で蓋をしなければ、状況は逆戻りになってしまう。だからこそ、苗床になってしまった者は、例え仲間だろうと処分しなければならぬ。

ハジメ「ソイツは玖珠木なんかじゃ無え！ 血の代わりに霧と蟲を垂れ流す化物だ！ アイツはもう死んだんだよ！」

鈴「そんな事無い！ 白野はまだ生きてる！ だからっ——  
今度は絶対に助けるんだ!!」

しかし鈴は頑なに結界を解こうとせず、白野を落とすまいと魔力を注ぎ込み“聖絶”を維持する。周りに居た何人かの生徒が鈴を止めようと動いたが、彼女の唯ならぬ氣迫に押され、タタラを踏み立ち止まってしまふ。

説得は無意味と判断したハジメは、苛立つ様に舌打ちをしてドナーの銃口を白野に向ける。彼女ごと障壁を撃ち抜いて下層に叩き落とすつもりだ。

その引金が引かれる前に、異変が起きた。

ハジメ「……………何だ？ 蟲が……………？」

白野「……………ズ……………ズ……………さん……………？」

今まで死体同然に動きもしなかった白野から、顎が砕け肺が無くなっていくにも関わらず、出ない筈の音が発せられた。

鈴「白野!? 待ってて、今助けるから！」

それと同時に、白野自身から流出していた怪物が、ついさつきまでわんさかと溢れていたのが嘘の様に止まる。出し尽くしたかの様に一匹も現れなくなった。

ユエ「……………“風爆”。」

鈴「え、あ、ありがとうございます！」

一先ず怪物のパレードは終わったと判断したユエが、結界越しに放った風を起こし白野に纏わり付いていた蟲を吹き飛ばす。

鈴は香織に話しかけ、勇者達を守護していた“聖絶”を解くと、白



野が居る場所に向かって結界を張り、それを足場にして駆け出した。  
白野に対する警戒を解かないまま、ハジメは天井から降りて壁に手をつき“錬成”を始める。壁剤から練り上げられた土が伸びて行き地面を作る。“土術師”である野村もそれに追従し、同じ様に壁から土を生やし作業に加わる。

鈴「白野！ 返事をして、白野！」

白野「……………スズ……………さん。ありが……………とう……………。」

鈴「……………っ！」

途切れ途切れの、蚊の鳴く様な声で言われた彼女の礼に、何故か悲しそうに顔を歪ませる鈴。

しかしそれでも、白野の生存に喜ぶ様に、大切な者を二度と離さない様に、白野の頭を両腕で抱きしめていた。